
魔法少女リリカルなのは--偽善の正義の味方の少年

マイペース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは - 偽善の正義の味方の少年

【Nコード】

N7089M

【作者名】

マイペース

【あらすじ】

偽善の正義は正義でもなくまたは悪でも無い、そのことをわかっていた少年はある虚空を抱き続ける。

「守りたいものを作り、守り続ける」

その虚空が少年の現実リアルを変えてしまつのを知らず・・・

偽善と少年と始まりの回想（前書き）

初めましてです？

駄文の2乗の作品ですが、今回が処女作なので生暖かい目で見えていただければ幸いです（、；；、）
では、THEMY peace world、始まります。

偽善と少年と始まりの回想

??? Side

皆さんは厨二病と言う病気を知っているだろうか？その感染理由は十人十色である。

「夜道で出くわした少女に力を与えられ化け物と戦ったり」だとか
「いきなり自分が死んだら転生してチート能力を与えられハーレムを築く」

「俺が野菜先生の代わりに先生やって女の子たちを守る」だとか
大体のオタク共は自分達の幻想（虚空）を抱き現実から目を背き始めている。

・・・こんなこと言ってる自分も厨二病か・・・。

自分・・・俺が抱く虚空は・・・小さく大きい、弱いが強い・・・そう、
「守護するものを作り、そして一生を傍に居続けること」

俺が抱き続ける虚空はこのようなものだ。

正直アニメの主人公は見ていて尊敬と平行し嫉妬・・・いや嫌悪感すら感じる・・・

奴らは俺が抱く虚空を平然とやってのけちまう。

それをみていると虚しくなっちまう。

だが俺はこの虚空を諦める訳には行かない、それが偽善の正義でも俺は・・・。。守りたいものがあるから、形が有るものでは無い・・・そう、「ただの自分勝手」そう思われても良い、だけど・・・ね、やっぱり俺は「正義の味方」に成りたいんだと思う・・・

??? Side OUT

偽善と少年と始まりの回想（後書き）

作者「・・・What!?!?」

自分でも知らないうちに書いていたが何書いてんだあ!!!!!!!!!!
「」

飛翔「良いんじゃないね?これから原作Breakしていく気なんだろう?」

作者「言ってくれるぜ（ ; ; ）この野郎!?!?てか、やっぱり二次創作にするきなのかよ・・・」

飛翔「だってそうしかないだろ?あんたがオリジナルでキャラクタ―や世界観、魔法や武器を思い浮べられるのかよ?」

作者「・・・無理です（ ; ; ; ; ）正直、二次創作でも行けるかどうかだもんなあ（ ; ; ; ; ）」

飛翔「じゃあ何の作品にするかは決まってるのか?」

作者「大体の構成はできてるんだが絞り切れてなくてなあ（ > < ）」

飛翔「そんな優柔不断だからバイトの先で怒られてばかりなんだよ・・・」

作者「返す言葉もございません（ ; ; ; ; ）
では皆様にアンケートでもして決めますか!?!」

飛翔「K t k r、他力本願！」

作者「う、うるさいなあ（o' ' o'）では作品を紹介します

1・魔法先生ネギま！

2・魔法少女リリカルなのは

3・とある魔術の禁書目録この三作品なんですが、アンケートお願いします」

飛翔「・・・で、作者よ・この作品たちにした理由わ？ドドド、（（隠しきれない殺気）」

作者「ハーレムが好きだから！キリッ？」

飛翔「・・・死ねば良いのにボソッ」

作者「ではアンケートお願いしますゞ（|| ^ ^ ||）」

偽善の日常、そして非日常（前書き）

ええーと、やっとかけたので投稿しますたゞ（〃＾ ｈ 〃）ノ
皆様にはできれば、感想を書いていただければ、初心者自分とし
ては勉強になりますので、書いていただければ幸いです（´；
、）

ではでは、「偽善の日常、そして非日常」はじまります

偽善の日常、そして非日常

ここは何の変哲もない、大きくも無く、小さくも無い普通の町。

だがその町には一人、纏う雰囲気が違う青年が居た。

その名は西園寺飛翔さいおんじ かける

容姿は身長170前半で限りなく黒に近い青色の髪をし、肩口位まで伸びておりそれを一本に纏めており、顔は中の上程。

そして何より彼の腰には・・・木刀、小太刀が二本刺さっている・・・

この物語はそんな青年が、幻想の世界を自分の偽善エゴで守りぬく、ご都合主義である。

飛翔Side

今俺はコンビニで苦汁の選択に狭まっている・・・

(コーヒーゼリーとマンゴープリン・・・どっちにすればいいんだあああああ!!!)

店のデザート置き場で頭を抱えて、店員に生暖かい目で見られつつも、この選択をしている。

え、両方買えって？二つも食べる訳もねえだろ!!

そんなこんな思考に思考を重ねてコーヒーゼリーに決めてレジに向かい会計をすませようと料金を払おうとした瞬間・・・

男A「強盗だあ!!!!静かにしろあ!!!」

男B「このバックの中に金を入れろ!通報なんかしたらタダじゃす

まないぞ！」

男C「そのガキも大声なんか出すんじゃないぞ！」

・・・なんだかベタなやろう共だなあ（・・・;）

そういつつ強盗はレジにバックを勢いよく投げた。

・・・コーヒーゼリーが勢いよく飛んだ・・・

・・・ピキ??

自分のこめかみにしわが出来たのが自分でも解る。

そうじぶんが自覚した時には強盗の一人の顔に膝が入っていた。

飛翔SideOUT

男・B SideIN

兄の顔に膝が入っていた。

男BC「兄者あああああああ！！！！！！！」

そっついながらオレらは兄者の傍に走っていった。

兄者「ぐはあ???弟達よ、俺が死んだら・・・灰をエアーズヘロツクにしてく・・・ガクッ」

男BC「兄者あああああああ！！！！！！！」

男B「兄者の仇！！！！わが弟よ、あのガキにジェットストリームアタックをかけるぞ！！！」

男C「おうよ！！！」

そついいながら俺たちは一列にならガキにナイフを持ちながら特功した。

ガキにナイフが刺さってKILLしたと自覚したと思ったらガキは俺達の後ろにいた

（何時の間に移動したんだ？）と思考した時には弟が倒れた。

男B「弟よおお！！！！己よくも！！！！」そついいつつナイフで切り掛かるうとした時に気が付いた。

（！？・・・ナイフが折れている！！！！）

そう思考した時にガキが口を開いてこういったー

飛翔「貴様は罪を犯した、それはコーヒーゼリーを・・・コーヒーゼリーを！！！！！！」

その言葉を聞いたときには意識を手放した、だが一言言わせてくれ・・・理不尽だああ！！！！！！

男B Side OUT

飛翔 Side IN

いらつく、ああいらつく！！！！

朝からイラ着くなあ！！！！！！あの強盗どもは警察に突き出したから良いものの、あいつら！コーヒーゼリーを！！！！！！

そんなこんなで、町をふらついていたら、見たこともない店にたどり着いた。

飛翔「こんな店、会ったっけ？」

「
店の名前は「希望の始発」……店長は厨二病ですな解ります。」

俺は好奇心でその店に入ってみた。

店の内装は……一言で言くと広い部屋にテレビが一台あるだけ……

飛翔「どうなってるんだ？」

少女「ど、どうやってここに入ってきたんですか!？」

何なんだ、このロリッ娘は？外見は禁書の打ち止めそのまんまだし？

飛翔SideOUT

少女SideIN

この少年はどうやって入ってきたんだ!？

少女「……失礼しますが、私が見えますか？」

飛翔「what!?!?!?見えてますよ!」

少女「!?!?!?!?」

飛翔「……どうしたんですか？それにこの店は何なんですか？」

少女「み、見つけた・・・見つけたみつけた」

やっと見つけました。この世界に来てから早10年。やっと見つけました。双月の騎士をぐ（〃＾　＾〃）ノ。

少女SideOUT

飛翔SideIN

何なんですか？このちびっ娘は？

飛翔「見つけたって、自分の事ですか？」

少女「そうです！！やっと見つけました、双月の騎士！！」

飛翔「ふ、双月の騎士？なんなんですかそれは？」

少女「あなた、いや、双月の騎士にやってもらいたい事があります・

・助けて下さい、あの娘たちを助けて下さい！」

・・・なんなんですかこのちびっ娘は？

双月の騎士？助けて下さい？駄目だ、電波しか流れてこない（・・・）

飛翔「ええーと、まず聞いていいかな、双月の騎士ってなんだい？それと君は・・・何物だい？」

この質問は間違っているかと思ってた、普通は話を聞かず逃げるのが得策だった、が、逃げたら面白いものを逃がすように思えた。もうこのような事はないと思っただし、それに腰に刺さっている二本の木刀「双月」と関係しているんじゃないか？家に置いてあったの持

つてきているだけだがなあ・・・

少女「双月の騎士は・・・私の故郷より伝わる伝説の騎士で、その騎士は次元を越えてそこに居る人たちの悲しみや涙を減らし笑顔あげる。それが双月の騎士です。

そして、私は・・・千雪・・・神になり損ねた、女神です」

その瞬間、少女・・・千雪は背中から純白の翼を広げた。

神、女神、そんなもんはこの世には存在すらしてないと思っていた。だが目の前には2はある純白の翼を広げた女神が居るんだ、信じるしかないし、何より・・・やっと来たんだ！俺の虚空を叶えられる機会が・・・

飛翔「わかった、で千雪・・・俺はこの世界を救えばいいんだ」

それを聞いた千雪は急に眩しいくらいの笑顔になり奥の部屋から、DVDを持ってきた。

千雪「実はあなたに救って欲しい世界はこれなの！」

そっさいながら千雪はDVDを再生させた、どうやらアニメのようだが見たことが無いアニメだ。

偽善の日常、そして非日常（後書き）

作者「やっとかけたよ（、、）」

飛翔「中途半端所で終わったな？どうしてだ？」

作者「いやあゝ前話で、アンケートしたんだけど・・・誰一人として感想に書いてくれなかったんだ・・・」

飛翔「・・・ど、ドンマイ」

作者「皆様できれば前話のアンケートに答えて下さい」

飛翔「今回は作者涙腺が崩壊したのこれまでです、ではでは、さようならあ」

偽善と始まりと、能力とエンカウント（前書き）

更新が遅れたのは39の熱を出したからです。
べ、別にネタが無かったわけじゃないんだからね（o
,
,
o）

偽善と始まりと、能力とエンカウント

飛翔 side

女神・・・千雪に見せてもらったアニメの名前は「リリカルなのは A ^ s」話を見ていたが、千雪が言う助けなければいけない娘は、この「八神はやて」と言う娘らしい。

なんでもこの娘はある物質、ロストログア、「闇の書」の呪いによって体、特に足の障害があるらしい、自分はアニメは好きだし、「リリカルなのは」なんつうアニメがあつたのは知ってたが、見たことが無かつたからなあゝ

こうして千雪はアニメの二話までみせてDVDを止めた

飛翔「おい、たしかこのアニメってまだ話があつたはずだぞ。

こんな中途半端だと助けられるはずの物も助けることが出来ねえぞ」

当たり前である、こんな中途半端に見せられても誰が悪でだれが善かもわからない。だけど・・・

千雪「ごめんなさい。私の位じゃああなたにこの位しか見せられないの。女神といっても神様のなり損ないだから」

理由はできる。

だが、二話までみてわかったことがある。

それは・・・

飛翔「千雪、助けてやりたいのは山々だが、俺にはこいつらに対抗出来る力も、魔力だっけ・・・それもない」

そう助けたいが、そのための力が無い。

さっき倒した強盗は隙有りまくりだし、今やってる通信教育の「小太刀二刀流の剣道講座」の歩方で気ずかれずに後ろにいけないが、あいつらは、魔力バリアなどを持っているのでそれすら効かないだろうし、俺が行っても足手纏いだ。

千雪「大丈夫です。それでも女神の端くれです。あなたの旅立ちの為に貴方に力を3つ差し上げます。

何が良いですか？」

・・・what!?!?!それってチートじゃん!!!!!!

光が見えてきたぞ！

飛翔「じゃあ、まずはあつちで言う魔力だっけ・・・それを最大限にしてくれ。

二つ目は、俺が知っている魔法、武器、超能力、忍術そういう異能を再現し出せるようにしてくれ。

そして最後に、デバイスだっけ? 「双月」それにしてくれ」

多分これでも足りない。

あの娘たちを助けるためにはこれでも足りない。

でも足りないならあつちで言うクンフーを積みれば良い。

千雪「わかりました。では貴方に女神の加護を渡します。ハアア！」

千雪が俺に手を翳しその手のひら出た多角形の結晶が俺に入り込んだ

。

千雪「ではあなたをなのはの世界に送ります」

そう千雪のセリフを聞いたと思った瞬間視界がブラックOUTした。

飛翔SideOUT

千雪SideIN

彼・・・双月の騎士はあの世界に無事に遅れたかなあ？

だけど彼には頑張って貰わないとね！

だって、双月の騎士の伝説には「彼のもの、次元を越えてその世界にHappyEndをもたらしたもの」

と言われている。

それになぜAsからだというと、無印の最後にプレシア、アリシア

は、死んでしまうと言う因果は替えられなかったからである。

千雪「でも大丈夫かなあ？彼が「魔力を最大限にして」て言うからしたけど、軽くSSSはあつたなあ！」

まあ双月の騎士・・・飛翔、頑張つてね（はあと）

千雪SideOUT

飛翔SideIN視界が回復していくと、俺は周りを見渡した。

（ここは、図書館かなあ？）俺は図書館で寝ていたらしい。

俺は椅子から立ち上がり図書館内を散策した。

そうしたら車椅子にのった少女が必死に手を伸ばして本を取ろうと
していた。

俺は少女が取ろうとしていた本を取ってあげた。

飛翔「これかい？」

少女「あ、ありがとう。」

飛翔「他に欲しい本は有るかい？」

少女「ほんまに！おおきに、それにそれとそれを・・・」

本を4、5冊取って席に座ると

少女「ありがとなあ、私の名前は八神はやて言います。平仮名で
はやて、変な名前やろ？」

飛翔「そんな事はないよ。君みたいに可愛い名前だよ。」

俺の名前は西園寺飛翔。

飛翔ひしろうとかいて飛翔かけるこっちの方が変な名前だよ」

はやて「そんな可愛いなんて／＼／＼飛翔君の方がカッコいい名前やで／／」

飛翔「飛翔君？」

はやて「だって同い年の子には君を付けるのは当たり前やろ？」

飛翔（同い年・・・・・・・・・・・・・・・・まさか!？）

自分の体を確かめてみたら、某探偵さんと同じがごとく、体が縮んでしまった!!!!

（あの女神、今度あったら締める?）

飛翔「はあ」。

はやてさん、これからは飛翔君ではなく、飛翔とよんでくれ。」

はやて「なら私もはやてって詠んでえなあ」飛翔「わかったよ、はやて」多分今自分の顔は爽やかSmileだろう。

飛翔SideOUT

はやてSideIN

飛翔「わかったよ、はやて」

飛翔君／／そんな笑顔は反則やで／／／

（やっぱり飛翔君は格好ええなあ／／／）

多分今の私の顔、赤いんやろなあ／／／
多分これが一目惚れなんだろうなあ。

そうして私は飛翔と世間話をしていて

はやて「そういえば、飛翔ってどこに住んでるん？」

飛翔「あつ！？そう言えば！……！」

はやて「ど、どうしたん！？」

飛翔「いやあ、そう言えば住むとこないんだよね！」

はやて「住むとこないって……両親は？」

飛翔「……居ないんだよ（この世界には）」

だから今日は野じゅく「駄目やで……！」「どうしたんだ？！」

はやてSideOUT

この会話のせいで飛翔の人生は変わった。

偽善と居候と私刑と言つ名の O H A N A S I (前書き)

やっと執筆し、終わりました!!!!!!

いやあゝ先人の皆さんは良く戦闘シーンを書けましたね・・・;

そんなダメダメな駄文でよろしければ読んでください。

では、始まります。

偽善と居候と私刑と言つ名の O H A N A S I

飛翔 side

今俺に起きている惨状を報告しよう・・・

今俺は公園のベンチに座らされている。

それでバインドとか言うもので縛られているため、抜け出せない。

そして極め付けは三人の美女、赤くてちっさい子供アニメで見たヴィータだっけ？

そいつが今にも振りかぶろうとハンマーを持っている。

桃色の長髪をした可愛いと言うより美人という言葉が似合いそうなむこの女性、シグナムさんはおれの首元に刀を押し付けている。

（てか、普通に血が出てますから！！！！！！！！）

おっとりとかふんわりとかをイメージが第一印象に浮かびそうな女性、シャマルさんは目の前に円形の異空間に手を入れていたらいきなり俺の胸辺りから手が生えてきた。

（いやいやいや！！！！これがちでやばくね！！！！！！！！！！）

「ヴィータ、なんでてめえみたいな魔導師がはやての近くにいたあ
！！」

シグナム「騎士としてこのような事はあまりしたくないのだが、主
が危険に曝されるのなら黙認出来ぬ！」

シグナムさん、だからって首筋に刀押しつけないでくださいよ！！
！！

シャル「貴方はなんではやてちゃんの近くにいたの？」

事と次第によってはリンカコアーから魔力を根こそぎ貰う事になる
わよ？」

シャルさん、だからって俺の胸元から腕を出さないでくださいよ
！！！！

正直見ようによってはスプラッター過ぎて15禁じゃ済みませんよ
！！！！

なぜこのような事になったかというと、

図書館から出ようとした 玄関に居たシャルさん、シグナムさん
にエンカウント なんだか驚愕したような顔をされる そのまま睨
まれながら八神家到着 ヴィータたちに取り押さえられる。

それでいまに至る。

そんな状況を助けてくれたのが、

??「HEY！ボス！どうするよこの状況！どうせボスならこいつらKillされるだろがヨ！！！！！！」

頭に直接流れ込んできたこのへんな口調なセリフは、デバイスにしてみらった「双月」だ……わかつている。

木刀だし、名前が「双月」だからちゃんとした日本語で大和撫子かと想像していたんだが……

まさかこんなのが生まれとくるとは……

双月（ボス！其処んところは気にしてちゃこれから先やって行けんZeeeee!?!）

こいつ家の家宝だけどBreakしても良いよね？

双月（そんなことよりもだZeeeee！

SetUpするかい？）

こいつは……ふざけているんだか、真面目何だかわからんなあ……！！！！

双月（真面目に不真面目なんだZeeeee！）

こいつこの戦いが終わったら魔改造して、性格すら変えてやる！！！！

飛翔「仕方ない、双月Setupだ」

双月「わかったZeee！ヒーハー」

Setupという言葉聞いて美女三人集は一旦距離を置いた。

良かった〜胸から手が抜けたよ

手が抜けた瞬間、自分の手首についている黒い勾玉が付いているブレスレットが輝き俺を包み込み、光が止んだ頃、Setupが終わった時自分の格好は、黒を単調としたバリアジャケット・・・ジャケットってよりも和服に近い。

そして両手には、片方は日本刀型でもう片方は鰐がない黒い長ドス型。

これがデバイスになった「双月」の姿二対一刀の刀なのである。

飛翔「む、意外とかつこいいもんだなあ」

さあーて、どう反撃するかなあ？

シグナムSideIN

なんだあの少年は？

最初はただの主と年の変わらない少年だと思っていたが
念の為に魔力を見てみたら軽く私たちの全員分の魔力すら越えてい
た。

何故このような子供が主の近くに居たのか解らないがもしかしたら
管理局の手先かも知れん。

バリアジャケットを展開したと言うことはデバイスを持っていて且
つ魔力量からすると相当の強者だろう。

シグナム「ヴィータ！シャマル！奴を子供と思うな！魔力量からす
ると相当の強者だぞ！気を引き締めて掛かれ！」

こう言って置けばヴィータ達も慎重に攻めてくれるだろう・・・

ヴィータ「つまりアイツの魔力が高いって事は、アイツを倒せばペ
ージが大分埋まるって事だろうがああ！」

シグナム「ば、バカ物！そう安易に敵に近づくな！」

そう私が言い放った時にはヴィータはファイゼンゼ少年に殴り掛か

って居た。

シグナムSideOUT

飛翔SideIN

女の子、ヴィータがハンマーを振りかぶりながら猛スピードでこっちに迫って来た。

飛翔（どうやって対処しようかなあ？）

そう考えていたら、双月が話し掛けてきた。

双月（HEY！HEY！HEY！ボス！ミーの刀は日本刀型が技、ドス型が魔法を、ボスが知っている物なら何でもできるzeeee！）

マジで！？

そんなんだったら俺ってチートじゃね！？

飛翔「ならやってみるか！散れ！千本桜！」

そう言いながら俺は日本刀の方を逆手に持ち、手を離したら刀が先端から砕けていき、刀が美しい千枚の桜の花弁になり、ヴィータに襲い掛かった。

ヴィータ「な、何だよ！この花びらは！」

そういいながらヴィータはハンマーで千本桜を払おうとしていたが、まったく言っていないほど意味が無い。

飛翔「行け！千本桜！」

そういった時には千本桜はヴィータを包み込む球体のようになっていた。

飛翔「FINISH！パチン」

そういいながら指パチンをしたら球体型の千本桜は高速回転を初め、10秒後に回転を止め、千本桜は霧のように消滅して行った。

千本桜が晴れてヴィータは見えてきた。全身無傷なのだが動きが無い。

ヴィータ「……………バタツ」

どうやらヴィータは立ったまま気絶していたらしい。

てか、気絶したから落下してますよおお！！！！

ポスッ。

そんな擬音を立てながら俺はヴィータを回収した。

飛翔（軽いなあ）。見た目はこんな子供なのによくあんな力が出るものだ。）

そんな感心しながら地面に着地した。

シグナム「貴様！ヴィータに何をするつもりだああ！」

飛翔「何もしませんよおお！」

そう慌てて返答し、俺はヴィータを近くのベンチに寝かせた。

え、死んでないかって？

何をいつてますが、千本桜は非殺傷設定にしてるし、切れ味だつてよく切れる果物ナイフレベルだよ

飛翔「さて、まず一人がおわったが、どうするよ？まだやりますか？」

シグナム「貴様はやる気があるのか？ヴィータに使った技は、見るかぎり手加減されていたが？」

飛翔「なんで解ったんですか？」

シグナム「あの技は見るかぎり、刀をあの花びらに変形させ、相手を切り刻む技、何だろう？」

飛翔「よく解りましたね（初見でばれたあー！！！！！！）」

シグナム「それにしてはヴィータの服には切り傷一つ見えない・・・」

飛翔「そりゃそうですよ、あんな可愛い女の子に傷なんて付けたら、地獄に落とされますからね！」

シグナム「優しいな・・・いや、戦場ではそれはただの甘さだ。貴様は自分の甘さで死んでいくタイプだな」

飛翔「酷い事言いますね！！！！。
まあわかつては居るんですけどね・・・
で、やるんですか？」

シグナム「もちろん！
ベルカの騎士として貴様のような強い奴と戦えるのは本望だ！！
！」

飛翔「楽しそうですね！！！！！」

そういいながらシグナムさんはデバイス、レヴァンティンを振りかざしてきたので、俺は双月でレヴァンティンを受け止めた。

そうして、そのまま、10合、50合と剣を交わしているとシグナムさんが埒が開かないのが分かったのか一旦距離を取り。

シグナム「レヴァンティン！カートリッジリロード！」

そういつてレヴァンティンから弾丸の残りが出た瞬間、シグナムの魔力が飛躍的に上がった。

飛翔（シグナムさんの魔力があがったなあ！？・・・だけど、俺の10分の1にも満たないな・・・）

シグナム「紫電・・・一閃！！！！！」

そういつてシグナムさんは炎を帯びたレヴァンティンで切り掛かってきた。

飛翔「ならば俺も！投影・・・開始！」

そついいながら自分が投影したのは伝説の佐々木さんが使っていたとされている、太刀・物干し竿だ

俺は物干し竿でレヴァンティンを受け止めた。

飛翔「おらあゝ！反撃だあ！！」

物干し竿の長いリーチを生かしシグナムさんのレヴァンティンが届かない距離から攻撃を仕掛けた。

飛翔「そらそらそら！いくぞ、必殺、大蛇三連！」

シグナム「くっ！！」

高速の三連続の突き、シグナムさんは何とか防ぎ切ったのだったが、服の所々に避けきれなかったのだろう切り傷が数ヶ所ある。

大蛇三連が終わったら、シグナムさんは自分から50m程離れてカートリッジをリロードし始めた。

シグナム「貴様に私の全力をぶつけよう。
だから貴様も本気で来い！」

そういいながらシグナムさんはレヴァンティンとその鞘を連結させ、
弓にし、魔力で矢を生成した。

飛翔「ならばこつちも弓矢で行ってやる。
投影・・・開始！」

そういつて投影したのは、普通の弓に捻れた剣。
弓に剣を遣い、魔力を込める（まあ、本気では、ないんだけどね・・・）。

そうして俺とシグナムさんは一斉に矢を放った。

シグナム「駆けよ、隼！！！！」

飛翔「偽、螺旋剣！（カラドボルグ）」

俺たちが放った矢は1秒も立たずぶつかり、5秒間拮抗していたが、やはり魔力の差で「偽、螺旋剣」が押しやり、シグナムに向かう。

シグナムさんは紙一重でカラドボルグを避けるが、それではこの技は終わらない。

飛翔「ブローケン・ファンタリズム！！！」

その瞬間カラドボルグは、爆発した。

爆発により、発生した煙が晴れたらシグナムの姿があったが、シグナムはレヴァンティンを杖代わりにして立っているのがやっとであった。

飛翔（結構強めに打ったのまだ立っていられるのかよ！？）

思った矢先、少し強めの風が吹いた。
その風でシグナムは倒れてしまった。

シグナムさんもヴィータと同じベンチに座らせておいた。
残りは――

シャル「動かないで！動けばあなたのリンカコアを破壊するわ
！」

・
そういいながらシャルさんはまた異空間に手を入れている。あの
技はめんどくさいし、下手をすれば子供にはよろしくないしなあ・
・

飛翔「え〜っと、闘いはこの辺で終わりにしませんか、これ以上や
るなら・・・・・・貴方たちを――殺します」

少し殺気を発しつつ、言い放ったからシャルさんは肩をビクッて
させていた。

飛翔SideOUT

シャルSideIN

な、なんなのあの子は、ヴィータちゃんとシグナムを簡単に退けて
尚も汗一つかかず、あんな殺気までも放てる。

私たちはとんでもない子に喧嘩を仕掛けたようね

シャル「わ、わかったわ。

ごめんなさいね!?

突然喧嘩を仕掛けて・・・」

飛翔「いやいや、気にしてないですから」

そっいいながら彼は公園を出ていった。

シャル（本当に危なかったわ。

仲間なら頼もしいけれど、敵としてなら、もう会いたくないわね・・・）

そっいいながら私はザフィーラに念話で連絡し、シグナム達の治療
を始めた。

シャルSideOUT

飛翔SideIN

公園から出て5分位経ったが、
・・・ヤバイ!!!

初めての能力使用に体が着いてこなかったのか、体が痛い・・・。

飛翔（マジでやばいなあ・・・あつ!!!）

俺は何も無いところでつまづいてしまい、勢い良く頭から地面にダイブしてしまった。

やばいなあ、意識が朦朧としてきたなあ・・・

そう思って、意識が無くなると思った時にある声が聞こえた

???「大変だ!!!人が倒れてるよ!」

そう、最後に聞こえたのは・・・かの有名な田村 かり。

偽善と居候と私刑と言つ名の O H A N A S I (後書き)

作者「いやあゝつと書けたよ!!!!!!」

飛翔「やつと書いて、内容がこれか？無能な奴だなあゝ」

作者「いやいや誉めるなつて、照れるじゃないか」

飛翔「いやいや誉めてないからな!!!!!!」

偽善と高町家とシスコンと（前書き）

遅くなりましたが、やっと出来たゞ（＝ハ　ハ＝）ノ

いやぁ（・・・；

いろんな事があるましてね（、、（

その事はあとがきで書かせて頂きます。

ではThe My Pace World 始まります

偽善と高町家とシスコンと

恭也Side

なのはに携帯で呼ばれていつてみたら、なのはと同じ年齢位の男の子が倒れていた。

外傷は無いが気絶しているらしく、仕方がないので家に連れて行って看病するようになったのだが……

なのはの部屋に寝かすのが納得いかん!!!!

これは起きたら死会……試合をしなくてはいけないな……

と、言いつつもあの子を運んでいる時に触ったのだが
手に竹刀や木刀を振っていると出来るマメが出来ている……これは
久しぶりに本気が出せるかもな……

恭也SideOUT

飛翔SideIN

少しの間三途リバーらしき物が見えたが放っておこう。

さてさて、さっきヴォルケンリッターの方々との死合・・・試合が
終わって少ししたら目眩がして

そのまま意識を手放したのは覚えているのだが・・・・・・・・ここは
何処だ？

だがこんな所に来たからには第一声はこうだろう。

飛翔「知らない天井だ」

よっしやあああ！！！！

一回言ってみたかったんだよなあ！！！！

そんなこんなで騒いでいたら、部屋に女の子が入ってきた。

????「あゝ、良かったの！目、覚ましたんだね！！」

こうして魔王とのエンカウントが成立した。

「????にや!?!今なんか失礼な事考えなかった!?!」

飛翔「いやいや、自分を助けてくれた恩人にそんな事考えませんよ」

そう、某ハニカミ王子(えっ?ネタが古い?知るか!)

顔負けの笑顔で返答をする。

「????そ//そうなの//へ、変な事聞いてごめんなの//
/(そんな笑顔で言われたら反論できないの//)」

なんだ?

女の子が赤面しながらチラチラこっち見ているんだが――まっ!
?まさか!!

やっぱり女の子のベッドに知らない男が寝てたら嫌な気分になるよ
なあ……

よくみたら部屋の内装からいって、女の子の部屋だし――
とりあえず――

飛翔「すいませんでした!!!!!!」

ベッドから飛び出し、空中前転をやり見事なDOGENZAを披露した。

???「えっ?ええっ!!」

見事なDOGENZAの声援は高町家全体に広がった。

-. -. . . .それから30分後-. -. . . .
さっきの声援（悲鳴）で高町家全員がなのはちゃんの部屋に集結した。

まったく、まだ6時半だよ?8時じゃないよ...

それからは皆さんの質問攻めだった。

なのはちゃんのお母さん、桃子さんからは、

「あらあら、可愛い子ねっっお持ち帰りしてもいいかしらっ」

可愛い・お持ち帰り、この単語から俺のチキン肌が...

そしたらなのはちゃんのお父さん、士郎さんが何処から出したか分からない木刀を持ちながら

「飛翔君、後でちょっと道場で話をしようでわないか」

士郎さん、表情と言葉の殺気が矛盾してますよ・・・

そんな士郎さんを見てなのはちゃんが

「お父さん駄目なの～～！！飛翔君をいじめちゃ駄目なの～～！！」

なのはちゃんが俺の前に立って士郎さんに言ってくれた。

ありがとうなのはちゃん「飛翔、ちょっと道場で話をするぞ」

ありがた迷惑だああ！！！！

今しゃしゃって出たのがなのはちゃんのお兄さん、恭也さんだ。

くそ～そのセリフ本日二度目だバカやる～～！！！！

そついいながら士郎さん、恭也さんは、俺の服の襟を掴んで道場に向かった。

その光景を見て、なのはちゃんの姉、美由希さんは……合掌をしていた。

――移動中――BGM・ドナドナ

道場に到着し、士郎さんと恭也さんが、ジャンケンをし始めた。

どうやら恭也さんが勝ったらしく、こっちに来た。

「飛翔、得物はどれがいい、君は剣をやっているだろう、自分の使いやすいので良いぞ。」

「

「わ、解りました!？」

そついいながら並んでいる、木刀を物色し始めた。

――本当に何でも有りやがる。

長い物は物干しクラスのやら、短いのはサバイバルナイフクラスのまである。

2分位物色し、決めたのは普通のサイズの木刀にナイフ位の木刀を

選んだ。

「ほう、君も二刀流なのかい？」

と、恭也さんも、小太刀クラスの木刀を二本持っていた。

「いえいえ、この木刀は多分使いませんよ？」

といいながら、俺はナイフクラスの木刀をズボンとベルトの間に差し込んだ。

「それはそれは、余裕だな、飛翔・・・」

「・・・やばいよぉ!!」

殺気が痛いんですけど・・・

「そ、そんな事ありませんよ・・・
取り敢えず始めましょう」

「そうだね・・・では、行くよ!!!!」

カン!!!!

一瞬で間合いを詰めて来た恭也さんの攻撃を取り敢えず、木刀で防いでみたが・・・重いなあ

年齢の差、身長、体重などの身体的差などの絶対的に埋め合わせの出来ない物が……」

そう考察しつつ、恭也さんの攻撃を防いでいるのだが、こちらは一本、恭也さんは二本、しかも小回りの効く小太刀

手数の差がさつきから危ない感じになってきた。

カンカンカンカンカンカンカンカンッ！！！！

そろそろジリ貧になってきたので、横に切り払いをし、木刀二本を払い、バックステップで距離を取る。

「中々やるではないか！！！飛翔！」

「恭也さんも、中々やるじゃないですか！！」

いつの間にか俺も恭也さんも、笑顔で打ち合ってたらしい

……今解った、多分、いや絶対、楽しいのだろう。

ならば……

「恭也さん！！！！今から俺も本気でいきます、だから恭也さんも、全力で来てください！！！」

今からやるのは、殺す剣技ではない……不殺の剣技！！

「解った！！！！掛かってこい！！！！」

多分、恭也さんも楽しいのだろう・・・ならばその期待に答えるために！！

「恐れる物は何もない！！！！」

回避不可の技、それは九回の突きを一瞬で相手に当てる・・・

「九頭龍閃！！！！」

飛翔SideOUT

恭也Side

「解った！！！！掛かってこい！！！！」
今、俺は楽しい。

父さんとの試合も楽しいのだが、その戦いは師弟のような手加減がある

だが飛翔との試合は全力では無いが本気で向かってきてくれる。

多分、好敵手ってこんなだろうな・・・ならば、俺も本気で・・・

「恐れる物は何もない！！！！！」

やばい！？

殺気がやばい！？

「九頭龍閃！！！！！」

防ぐか！？いや、無理だ、ならば・・・
向かってくる飛翔の殺気に当てられつつ俺は御神流の技・「神速」
を使い、神経を研ぎ澄まし、一瞬に九回くる突きを捌いた。

だが、無理があつたのか右側の剣は折れてしまい、右肩にも当たって、晴れている。

だが、俺も成功したものが有った。

それは・・・武器破壊だ。

捌いているときに一点だけ集中して捌いたのでそこが脆くなり、最後にその一点に木刀を叩き着けた。

現に飛翔の木刀は折れてしまっている。

「父さん、飛翔に木刀をわ「大丈夫よ。要りません。」!!!!!!」

そう言つて飛翔はナイフクラスの木刀を上に掲げていた。

恭也Side OUT

飛翔Side

いやあゝまづったなあゝまさか九頭龍閃が防がれるとは……
てか、双月使わなくてもこの位は出来るのか……

だが、どうしようかなあゝ
木刀は折れちゃったしなあ……だけど、負けたくないし

……こういう勝ち方嫌だけど仕方ないか……

「恭也さん、これで終わりです!!!!!!」

そついいながら俺は掲げていた木刀を恭也さんに投げつけた。

恭也さんはその木刀を焦らず叩こうとした……

俺が使った技は某殺人鬼の技……

飛翔Side OUT

恭也Side

飛翔が木刀を投げてきた。

苦し紛れの策だとは思わなかったが、取り敢えず木刀を叩こうとしたのだが……飛んできたはずの木刀が無い！！！！

一瞬、たった一瞬だが動揺した、その瞬間、首筋にそつと何かが触れた。

「極死・七夜」

後ろから聞こえてきた声は飛翔の声だった。

そして首筋に当たって要るのはさっき投げられた木刀だろう。

どうやって一瞬で間合いを取ったか解らないし、木刀をどう回収したのか分からない、ただと言えることがある。

「参りました。そして、楽しかった」

これだけだろう。

恭也 Side OUT

偽善と高町家とシスコンと（後書き）

飛翔「逝つてよし」

作者「第一声が非どかないですか!？」

飛翔「どうでも良いんだよそんな事は!!!
テメエ何日間サボってたんだよ!!!」

作者「いや、最近高校の宿題やら、バイトやら……るろうに
剣 を全巻をまとめ買いして読んだり、最近ハマった恋姫をヨウ
ツベで全話見てたり、ヴァイスシュヴァルツを極めてたりで遅れて
しまい……」

54

飛翔「最後のあたり、もろ私欲もろくそだなあ!!!!!!」
作者「その……ごめん？」

飛翔「作者よ、これが物を殺しと言うことだ!!!!!!」

作者「は、早まるな……」

飛翔「わかったから、言いたいことが有るんだろ、早く言えよこの
作者（虫以下）」

作者「虫以下!?!扱いひどっ!!」

まあ良いや、

読者の皆さんには読みにくかったと思いますが、最後の辺りからセ
リフの前に名前を書くのを辞めました。その方がいい方、駄目な方

は感想に書いてください。勿論、作品の感想も募集してますのでよろしく願います。」

飛翔「そういう事だそうだ。読者の皆さんはこの作者（プランクトン以下）を助けるためだと思って、感想を書いて頂けると幸いだ！」

作者「扱いが悪化した！！！！！！」

偽善と養子とツンデレと

さっきの試合から10分位たった頃だろう・・・

今何処に居るかって？

・・・風呂に入ってますとも！誰と？

恭也さんが入ってますとも！

流石に肉体年齢は同じでもなのはちゃんとは入れない・・・

俺はロリコンではあるがペドでは無い！！！！

それはともかく、何故恭也さんと風呂に入っているかと言うと・・・
・・・

話す前に言っておこう！！！！

男子はな、「キモい！」って言われるより、「臭い！」って言われる方が傷がつくんだぞ！！！！！！！！

・・・試合をして汗だくのまま高町家に行ったら女性陣に「恭也（お兄ちゃん）と飛翔君汗臭いからお風呂に入ってきて！！！！！！」

俺のラムハートのLifeが！！！！

止めて！もう飛翔のLife（精神力）はゼロよ！！！！！！

ダメ！涙が出ちゃう！

男の子だもん！

そんな事を思いつつ、恭也さんとトボトボ風呂に向かっていった。

そして今に至る。

回想終了だよ！！！！

今は恭也さんに頭を洗ってもらっている。

「それにしても飛翔は強かったなあ！誰からか習ったのか？ワシヤワシヤ」

「強いて言うなら父から習いました。

剣道の先生をやっている、家にも道場が有りまして時々教えてもらいました」

本当の話だ。前世の家には道場も有ったし、父親も強かった・・・てか、家族揃って強かった。母さんも剣の先生だった。

人当たりも良く、良い母親だと思う。
けど・・・

「飛翔を鍛えるくらい強いのか？
それは戦ってみたいな！ワシャワシャ」

恭也さんが笑顔で言っているが、

「それは無理です。」

そう、無理だ。

「父さんも母さんも、事故で死んじゃったんです」

俺が14の頃に……

死因は相手車両の飲酒運転だそうだ。

最初にそれを聞いたときは道場に置いてある双月をもって、その親族を皆殺しにするつもりだったが、

「す！すまない！！聞いてはいけない事を聞いたな！！」

「いえ、大丈夫です。今はもう割り切ってます。それに……」

「それに？」

恭也さんが申し訳なさそうに聞いてくる。

「憎しみからの報復は憎しみしか生まない。」

だから俺は憎むのを辞め、あの世に行っても両親に恥じぬ生き方を
することを決意した。」

そう、復習などしてもまた誰からか復習をされ、それを返り討ちに
したら、またやられと、いたちごっこの応酬になってしまう。

ならばここで憎しみの連鎖を断ち切ろう、そうおもっただけだ。

「そうか。だから飛翔は身体も、そして心も強いんだろう。」

「いえ、強いんじゃない。ただ、それしき出来なかったんで
すよ……」

「いや、強いよ、飛翔は。」

恭也さんが優しい声で行ってくれた。

風呂から上がり、二人でリビングに行くと高町家が全員集合してい
た。

そこで士郎さんに

「飛翔君、晩ご飯が出来たから食べていくかい？」

と、いわれたので晩ご飯を頂いて居るときに美由希さんが、

「じゃあ親御さんに、電話しなくちゃね！」

と言った。

恭也さんがあちや〜と思って居るような顔をしている。

まさか美由希さんはK Y S K I L L を持っているのか？

そい、思いつつも、さっき恭也さんに話した通り話したら美由希さんは

「ごめんなさい！！！ごめんなさい！！！」
と狂った位に言っていた。

別に気にしてないが、皆さんの美由希さんに対しての目線が1ランク下がった。

かわいそくに………

「よし！！飛翔君！家の子に成らないか？てか成りなさい！！！」

「流石士郎さん！良い考えだわ／＼／」

飛翔は目の前のバカップルに一瞬、刹那の時に等しいが殺気を覚えた。

「良いんですか？こんな身元不明の子供をホイホイと引き取っても？」

「そういう事なら俺も賛成だ。てな訳で兄さんと呼びなさい。」

恭也さん！！！！

もはやセリフが命令系に成ってますよ！！！！

「ならわたしはお姉ちゃんと呼んでね！」

美由希さん、復活はやっ！？

「私もお姉ちゃんって呼んでっ！！！」

なのはちゃん！？

何考えってんのよ（………）

「・・・解りました。呼び方云々は後で、これからもよろしく願います!!」

こうして俺は高町家の仲間入りをした。

それから二週間たったある日。
いきなりのイベントが有った。皆でリビングで晩飯を食べているときに・・・

「よし飛翔!!明日から学校に行け!!しかもなのはと同じ学校だぞ
ゝざまあみる!!」

・・・父さんは何を言っているんだろ？

「はぁゝ、解りましたが、なんか急ですね?」

「実は飛翔を驚かしたくてね!!サプライズこそ至高のプレゼント
だよ!!!」

母さんもはっちゃけてるなあゝ！！！！

「えゝホントお父さん！！！！良かったね！なのは！愛しの弟と一緒に学校、一緒に教室で夢のサクセスLifeだよ！！！！」

「美由姉え、一緒に学校だけど一緒クラスで勉強は「ちなみに校長先生と語り合ってクラスを同じにしておいたぞゝざまあみる！」父さん！！！！！！」

いつの間に校長先生に殴り込みにいったんだ父さんわゝ

「飛翔君と一緒にの学校・・・一緒のクラス・・・お揃いの制服・・・一緒のベッド／＼お姉ちゃん頑張っちゃう／＼／」

えゝつと、なの姉えが妄想の中だとはいえ、良くないハッスルをしているのでこは・・・天下の宝刀・スルー！！！！

てか、いつから！？

なの姉の良くないハッスルが始まったのは？

一緒にアリサの家に行ったときにアリサに「

飛翔はなのはの事どうおもってるの?」と言われて、

只の質問かと思って咄嗟に「なの姉は、一番守りたいと思う、大切な人だよ」というと、

なの姉の頭からプシューと音を立てながら煙が出た時に頭のネジでも抜けたか?

それからと言うもの、風呂に入れば、「ダイナミックお邪魔します

!」

をやり、

店の手伝いをやってるときに、女子高生達に「可愛いい〜?」と、頭を撫でてもらい戻ると、黒い何か(スタンド?)を背中に浮かんでいるなの姉とエンカウント!!

悔しい程に綺麗な笑顔で「綺麗なお姉ちゃん達に撫でてもらってよかったね」とビザが切れても日本に滞在している外人並に棒読みだった。

正直・・・恐かった。

やっぱり、なの姉は・・・・・・・・病んデルのか？

「飛翔！なのはと同じ学校に行くのなら、なのはに近づく男を・・・
・薙ぎ倒せ！」

恭兄ィのシスコン振りも健在です今日この頃！！！！

「解りましたから、皆ご飯は食べましょうよ！」

取り敢えず・・・・・・・・飯を食わしてくれ！！！！

それから一億と二千年後に行った・・・・・・・・と言つ夢を見た翌日・・

朝食をとり、制服にも着替え、今はリビングにて、カバンの中の整理をしている。

全く、どうなる事なら・・・・

偽善と告白と武力介入と（前書き）

やっと書けました（・・・；）

本当に更新速度の異常なほど遅すぎる（、；；）

こんな駄作者の作品でよろしければ楽しんで下さい。
では、M y P a c e W o r l d 始まります

偽善と告白と武力介入と

なのはSide

なんだか、クラス中が騒ぎ始めているの!?

それもそのはずなの!!!

その騒ぎの中心の「転入生」は何を隠そう。

我が愛しの弟、飛翔君なんだよ〜!

しかも、同じ教室だなんて・・・一緒のクラスで、隣の席で、一緒の机、一緒のベッド・・・・

「よおうし!!!頑張っちゃう／＼／」

その時になのはの半径85センチに近づく物は居なかったとさ)。・。
(

飛翔Side

今、教室はホームルーム中で教室内は「転入生ってどんなかなあ？」やら、「イケメンかなあ？」とかで盛り上がっている。

だがその中の一名、なの姉だけが――

――お花畑という名のHEAVENに旅立っているなあ

と思いつつ、今先生が紹介があつたので教室に入るかな――

ガラッ――

扉を開けて教室に入ってみると、クラスの子達の視線が全部こっちに来ている・・・正直、怖い???

その好奇心と言う名の精神攻撃（視線）を耐えつつ、教壇の上に上がり自己紹介をしよう。」

「今日より皆と一緒に勉強をする、高町飛翔です!!」

名前のとおり、このクラスに居る高町なのはの弟です。これからも
よろしく願いします!!!!」

前世から培ってきた営業スマイルを完璧に出したから多分大丈夫だ
ろう……

クラスの子達からは盛大な拍手を貰い。

チラホラ聞こえてきたのが

「なのはちゃんの弟さん!? 良く見てみれば似てるかも……」
「いやいや、似てないからね!!!!」

「けど、学年で、一番かつこいいかも／＼／」

おいコラ!!

今の小学生は、皆ませているのか……!?

「俺、男だけど・・・良いかも・・・」

コラ!!!

その少年よ!!!!!!

その扉は開いちや駄目だよ!!!!

「飛翔君の席は・・・先生!!!!私の席の隣が空いてます!!!!
!」そうね、じゃあなのはちゃん隣の席にしましょう。」

先生!!

なんで皆の暴走をスルーナンデスカ!!!!
しかも、なの姉の隣なんて・・・激安貞操喪失ツアーの決行ですね。
解ります・・・

「じゃあ席に着く前にみんな、飛翔君に質問は有るかなあ?」

「ハイハイハイ!!!!!!」

皆さん元気でよろしい!!
皆にハナマルを挙げたいよ・・・

「先生!そういう質問はホームルームが終わったらで良いんじゃないですか?」

流石アリサ!!!

皆が出来ない事を簡単にやってのけてくれるぜ!!
そこに痺れる憧れる!!!

ホームルームが終わり休み時間に成ったら、一斉にこっちの席に皆集まって来た・・・

勿論、質問は順番にやらせたよ!

こういうのは、ごちゃごちゃにやったら、厄介だし・・・

「この学校に来る前は何処の学校に居たの?」

まあ率直な質問だなあ・・・

「ここに来る前は違う普通の小学校に居たよ。」

それで家庭の事情で急に転校に成ったんだよ」

まあ家庭ってより、ある意味天命だろうけどよ・・・

「趣味や特技は？」

お見合いか！？

ここはお見合いパーティーなのか？

「そうだなあ、強いて言うなら家庭的作業ならなんでも出来るよ。後、少しだけ武術を嚙ってる位かなあ」

こつちの世界に来てから、わかつたのだが、自分の家庭的スキルが前の世界より随分と上がっていた。

その為か、翠屋での手伝いは、フロアも出来たが主流はクックの方だった――

・・・自分で言うておいてなんだが・・・武術が少しって・・・
自分に対して、過小評価し過ぎだろwww

「い、今好きな女子や、つ・・・付き合ってる女の子はいますか！」

この子は確か、アニメで見たことがあるなあ、確か・・・
すずかちゃんだっけ？

そうだなあ、好きな人かあ・・・

なの姉と言いたい所だが、この子、なんだか、真剣な顔してるし、
しかもアリサまでこつちを凝視してるし、だからといって「なの姉
以外の誰か」と言ったら・・・・・・・・俺の第二の人生が終了して
しまう！！

・・・待てよ！？
つまりは・・・・・・・・

そう考えると俺はなの姉とアリサに手招きをした。

二人とも何だろう？と言う顔をしながらこつちに来た。

そうしてこつちに来た瞬間、アリサとすずかの肩に手を回して俺は
こういった。

「付き合ってたたり、好きな女子は居ないけど、気になってたり、付
き合ってみたい女子は、アリサと、君、そしてある意味好きなのは、
なの姉かなあ？」

・・・・・・・・時が止まった。

まるでThe・Worldの如く時が止まった。

10秒程時が止まった後・・・・・・・・「ボンっ！」

アリサとすずかは、顔が上手に真っ赤に茹で上がりました〜！
！！

なの姉は・・・まだ止まってるな！！

「な・・・なの姉、大丈夫！？」

声を掛けたらやっと覚醒したのか、こっちを向いた。

「良かった、なの姉・・・大丈夫・・・」「飛翔君、式はどこで挙げようか！！」また良くないハッスルかー！！！！！！」

そんなこんなで、騒がしい休み時間が終了した。

そして神だけが為せる技、編集を使い、時は昼休み・・・
休み時間に仲良く為った男子やら女子やらに昼飯のお誘いが来たが、
すべてなの姉がハーン様顔負けの重圧で黙らせて・・・只今屋上でご飯を食べている。

さっきの質問の答えの所為でアリサはこっちを見ては、目が合えば目を逸らすと、なんだか挙動不審になっている。

それは良いが、もっと酷いのが二人程居る……
すずかとなの姉だ

なの姉は右腕、すずかは左腕に占領しつつ両サイドから

「あゝん／＼」

と赤面しながら弁当をたべさせられていると、こっちに向かって三人組の男子が歩いてきた。

身長から察するに六年生あたりだろう

「ちょっと、そこの君ちょっと良いかなあ？」

三人組の先頭のキザな野郎が俺に指を指して来た。

人に指を指すとは、躰が成っていないなあ……

「なんか、用ですか？」

「いやあ、只僕達は君と話したいだけなんだ」

先頭にいるキザな野郎は行儀良くしゃべっているようだが後ろに居る二人は下品に薄く笑ってやがる――

何となくだが展開が解ってきたぞ。

「解りました。

で、話と言うのは？」

内容は解って居るが一応聞いておく。

「・・・僕は・・・僕達はね、その三人の事が好きなんだよ。あ、勿論友愛ではなく、異性としてだ。

だから、彼女達と仲良くしてる君が・・・邪魔なんだよ。」

こんなんだと思っただよ・・・

まあ、なの姉達はこの学校で、BEST5には入るからなあ！
こういうのが来るのは考察出来ていたがまさか本当にくるとはな

「で、自分にどうしろと？言って置きますけど、俺はなの姉達のこととは好きだから離れる気は無いぞ。」

「そんな事は解っているよ。
そして今日はその事で話に来た。
．．．．．いくら欲しい？」

．．．．．はっ？

こいつらなの姉達の前で何言ってるんだ？

「ええ」と、先輩方は何を言ってるんですか？」

殺気を殺しつつ言い放った。

殺気を殺しながら言ったから身体が震えていたから。

また後ろに居る二人がまた、

「あいつ震えてやがるぜ！」やら、
「やつぱり先輩だからビビってるんじゃない！」

なんて下品な奴らだ……コレハオシオキがヒツヨウか？

「だから、君にいくら払えば高町さんのそばをはなれてくれるんだい？

あ、金額は大丈夫だ！

僕達のパパ達は全員政治家だからな！」

……ブチっ！！

「なるほど、そうやって自分の親のレッテルを掲げて下級生を脅さないで、彼女すら出来ないなんて、先輩方はゴミ……いや、肥料として使える分ゴミの方が幾分マシか？」

自分からは手を挙げず、口上戦で相手を苛つかせ、相手から手を出させる。

これが相手を落としめる高等戦術。

「何だと！」

「下級生の癖に生意気だぞてめえ！！」

後ろの二人がもう手が出そうだ、キザ野郎もイラついては居るようだ。

よし、後一步だ――

「それに先輩方、鏡を良く見てみてはいかがですか？とてもなの姉達とは、釣り合わない、金と親のレッテルで物にする前にまず自分を磨け」

多分これで、

「てめえ！！！」

と、後ろの二人が俺に殴りかかってきた。
その内1人のパンチを受けた。

――これで正当防衛は成り立った。

「てめえ、調子に乗りすぎなんだよ！！」

パンチが当たってゲス共がまた下品にわらってやがる。

――不愉快だ。

パアアアン！！！！

盛大に喝いた音がした。

それもそのはず、俺は、縮地で一瞬で二人組の目の前に行き、片方のゲスの頬に
蝶野さん顔負けのビンタをかました。

ピンタをされたゲスは5メートル位飛んで盛大に胴体着陸をした。
れた。

「・・・えっ？」

いきなりの事で惚けている片方の背後に周り・・・

「秘技！！膝カックン！！」

をし、バランスが崩れたクズの後頭部に両手を合わせハンマーの様にし、振り落とした。

ドゴっ！！

今度は鈍く、重い音が皆の耳に届く。

その瞬間クズは崩れるように倒れた。

「・・・え、飛翔（君）！？」「」

いきなりの事でなの姉達も驚いている。

「君は！！！！一体何をしたんだ！！」

キザ野郎も取り巻きがいきなり吹っ飛んだりして、驚いて居るようだ。

――知るか・・

「そんな事はどうでも良い、それよりもどうする？これ以上その汚い面と心をなの姉達に見せるんだったら・・・・・・食らうぞ」

今回は殺気ムンムンに出したからキザ野郎は後ろに一步下がるがその後、少し考えたのか解らないが、素人特有のボクシングの構え直し・・・

「な、何をやったか解らないがボクシングを習ってる僕には勝てないよー！！」

そう言つとキザ野郎はボクシング特有の間合いの詰め方で迫つて来た。

そしてキザ野郎が放つた右ストレートを．．．受け止め、こう言つた――

「我は面影糸を巣と張る蜘蛛．．．いらっしやい．．．この素晴らしき惨殺空間へ．．．」

この言葉を聞いたキザ野郎は一瞬で滝のような汗をかき、全身痙攣をしたように震えながら、後ろに下がっていった。

「．．．．．」

黙っているキザ野郎に向けて殺気を放ちつつ。

「なの姉、アリサやすずに今後一切手を出すな、そうすれば今回は見逃してやる。
だけでも手を出したら」

そして本日最大の殺気を放ちつつ

「一家もろとも根絶してやるよ」

「ひっひいひい！！！！」

そうしてキザ野郎は、倒れた二人組を引きずりながら屋上を後にした。

・・・よし！本当に根絶してやるよ！！！！

・・・あれ？なの姉達居るのに大丈夫かなあ？

偽善と告白と武力介入と（後書き）

飛翔「・・・・・・・・・・」

作者「・・・・・・・・・・」

飛翔「で、言い訳は有るのか？」

作者「弁解の余地もございません（´；；´）」

飛翔「で、冗談はさておき何で遅れたのよ（・・・）」

作者「いやゝ8月中には骨組みは出来たんだが、学校が始まっちゃったから（・・・）」

偽善と始まりとネギと

すずかSide

最近私たちにちよっかいや、アプローチを掛けてくる変な三人組が居た。

最初はアリサちゃんがあしらったけど、あしらい方が変わったのか余計に好かれてしまい。とうとう朝は校門で出待ちをされたり数日に一回のペースで、下駄箱いっぱいにはラブレターがあったり、昼休みのお弁当の時間には入ってこようとするし

（勿論アリサちゃんが阻止したけど・・・）けど、その断り方が悪いのか三人組の１人に妙に気に入られたのか、それから追っかけまがいても続いていた。

私たちの周りには男子がそれ位しか居ないからけど、その断り方が悪いのか三人組の１人に妙に気に入られたのか、それから追っか

けまがいも続いていた。

私の周りには男子がそれ位しか居ないから

男子と仲良くしようとは、思わなかった。

そんな時に転入生として来たのがなのはちゃんの弟がやってきた
アリサちゃんは会ったことが有るそうだからどんな子か、聞いてみ
たら――

「なんか、不思議な奴よ、けど嫌いに成れない。変な奴だけどそこ
ら辺の男子なんかよりよっぽどマシよ！・・・・・・私は好き
だし」

最後の方を言った時に、アリサちゃんの顔は真っ赤になってた。

アリサちゃんに春が来たよー！！！！

しかも一目惚れなんてロマンチックー！！！！

良いなあー、私にもそんな一目惚れ出来る異性に出会えたらなあー

すずかは知らなかった、これがフラグで、しかもそんな一目惚れが

出来る人が後十数分で来ることを――――

飛翔Side

後クズどもを排除してから数ヶ月・・・色んな事が会った。

あの事があいつらが親にバラし、良く翠屋に傭兵崩れの奴らが四人程来た。

最初は喧嘩腰に席に着いた奴ら、あーだこーだと、店にいちやもんを付けてた奴らに、ケーキを持っていき

「黙って食え」そう言つと奴らはケーキを黙って食った。

・・・・・・あいつら何個食ったかなあ？
流石は、翠屋のケーキだ、傭兵崩れの奴がその時は乙女だったぞ・・・

他には中間テストで一位を取りましたwww！

元々前世でも自他共に認める天才だったし、内容が小学生レベルだしなあ???

転生したらテスト一位になりました!!

転生を始めたら彼女・・・・居ないよ!!!ああ居ませんよ、チキショー（涙）

・・・只今泣き止み中・・・・
一時間後――

やっと泣き止みました??

そうだなあ（・・・）

他に変わった事は・・・あっ!!

昼飯が・・・増えました!!

何故だかあの事がフラグだったのかすずかと、アリサが弁当を作ってくれます!!

それと母さんの代わりになの姉が弁当を作ってくれます。

皆以外と料理が美味いんですよ。

そんなぐらいですね、他には変わった事はありません。

そして今何をやってるかと言うと・・・お使いで、長ネギを買いに行っている所です。

時間や日にちは・・・そう、1話のヴォルケンさんがなの姉を襲撃する日です。

ヴォルケンさん達にはエンカウントをかましたから良いとして、
の姉とビデオレターをしているあの金髪ツインテのあの娘とのエン
カウントがある。

ビデオレターには俺は出てないので面は割れてないがなの姉達が
散々言ってたなあ

まあ只言えることは・・・

「手がある、足もある・・・そして、力がある・・・なにが来よう
と俺の世界は壊させねえよ」
俺の呟きは夜の闇に消えてった・・・

（ふっ、決まっただろ「HEY！HEY！HEY！ボス！！！」）

頭の中に念話が大量でダイレクトコールされた・・・いくら出番
が無いからって怒るなよ！双月！

（頭に響くなあゝなんだよ双月！

せつかく人がカツコ付けてたのによおゝ（海鳴市広域に結界が張られてますZeeeeee!!）・・・・・・アジで・・マジで!?!?）

そう言われると空気の流れが変わったし？

（ちなみに今回はヴォルケンさんは誰をご指名で?）

俺の問いに関して双月はサラっと言いやがった――

「Your Sister」

やっぱり狙いはなの姉なんだなあゝ

ちよくちよく魔力隠さなかったりしてたし、時たま「全力全開!!」

!」とか言つて魔力全開にした事があつたし、狙われて当然か・・・

・

そうと決まれば早く助けに行こう。

「双月、モード飛行少年」

「ウイイイイイー!!!!」

モードを選択すると手首の双月は光だし、その光が俺の右肩に集まり、光が晴れたときには右肩には機械で出来た小さい羽根が付いていた。

「では、西園寺飛翔改めて、高町飛翔、目標を駆逐する」

そういつた時にはさっきまで立っていた所には俺は居なかった。飛行少年の能力は簡単に言うとした人間でも音速スレスレの速度で某DBの舞空Oが出来る代物だ・・・まさかMIXIMまでOKだとは、本当にチートだなあ（・・・）

なのはSide今、なぞの魔導師さんと交戦中なんだけど……

「てえええええ！！！！！」

(プロテクション)

キ
イ
イ
イ
!
!
!
!
!

パリーイイン!!!

-
-
-
-
勝てない・
・
・

攻撃は通用しないし、防御も紙みたいに容易く破られる。

――あんなに練習してたのになあ――

（こんなのって無いよ……）

ユーノ君……クロノ君……フェイトちゃん……飛翔君……！！
！）

そう思い目をつぶって、衝撃を待っていたときに――
キィイイ！！！！

鉄……いや、デバイスがぶつかる音がしたから目を開けてみると
そこには……

フェイトちゃんが居た。

フェイトちゃんはバルディシュで魔導師さんの攻撃を防いでいた、
そう思った時に肩にそっと手を置かれた。

「ごめんなのは……少しばかり遅れた……」

「ユーノ君……」

久しぶりにあった友の声だった。

「仲間か……」

魔導師さんの問い掛けに対してフェイトは……

（サイズフォーム……！）

鎌……バルディシュを構えてこういった。

「友達だ……！」

そう言い切ったフェイトちゃんはカッコ良かった・・・
そして少しの沈黙の後

「民間人への、魔法攻撃・・・軽犯罪では済まない罪だ」

「何だデメエ・・・管理局の魔導師か」

なぞの魔導師さんの問い掛けにフェイトちゃんは・・・

「時空管理局、囑託魔導師フェイト・テストロッサ」

そう言った後にフェイトちゃんは続けて、

「抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。同意するので有れば
武装を解除してほしい」

やっぱりフェイトちゃんはカッコ良いなあ！！！！

「誰が投降するかよ！！！！」

そういつて窓から飛び降りて距離を取っていった魔導師さんを見て、

「ユーノ、なのはをお願い！！」そういつてフェイトちゃんも魔導師さんにむかって飛んでいった・・・

フェイトSide

あれから数分後 - - -

「終わりだね！！！！名前と出身世界、目的を教えてもらっよ！！」
「くううう！！！！」

バインドで縛ったなぞの魔導師は鋭い眼でこっちを睨んでいた・・・
これで終わりだね・・・

「・・・なんかヤバイよ！！！！フェイト！！！！」

アルフがそういつた瞬間髪の色がピンクの剣士が現れてバルディッシュを弾かれた！！！！

「シグナム・・・」

あの魔導師が名前を知ってるところからすると仲間らしい

・・・ヤバイなあ・・・

「ウオオオオ！！！！！！」

男性の方はアルフを蹴り飛ばした・・・

「レヴァンティン・・・カートリッジロード」

そう、ピンク色の剣士の人と言った瞬間、彼女の魔力が膨れて・・・

「紫電一閃・・・てやあああ」炎を纏った剣を振り落とした・・・
その時にバルディッシュが真つ二つに斬られた・・・

そして剣士はもう一度、剣を振り落とそうとした・・・

・・・ヤバイ！！！！来る！！！！

そう思つて目をつぶつて衝撃を待っていた……

……何時まで経つても衝撃が来ない……

目を開けてみるとそこには……

見たことが無い服を着た少年が剣士の攻撃を

……長ネギで受けとめていた……

飛翔Side

な、何とか間に合った!!!!!!

何だか、フェイトちゃん?のデバイス、バルディシュが真つ二つに成つてるけど、原作では回復してたし大丈夫かなあ?

「き、貴様はこの前の……!」

「どうも!おはようからお休みまで高町飛翔です!!!!!!」

シグナムのデバイス、レヴァンティンと長ネギ、いいや!!!!これは長ネギでは無い!!

「貴様は真剣勝負を食物を使うのか!!!!」

「これはネギなんかじゃない!!!!!!これは伝説の……ドンパツチソードじゃあああああ!!!!!!」

-
-
-
-
-
この一言で俺の原作介入が始まった
-
-
-
-

偽善と介入と闇の書と

なのはSide

さっきまで压制していたフェイトちゃんだったが、いきなり襲って来た剣士さんにバルディシュを切られちゃった！！！！

(あ！危ない！！！)

助けに行きたいと思っただけど体が動かない。

自分の事じゃないけど目をつぶってしまった……

……何の音もしない、目を開けてみるとそこには、侍さんの格好をして、長ネギを持っている……飛翔君？か居た。

「……………えっ！？飛翔君！！！！！」

「うわ！！！！な、なのは？どうしたのいきなり大きな声出して！？」

「ユーノ君！！飛翔君が！！！！飛翔君が居るんだよ！！！」

「飛翔？……………あっ！確かなのはの弟に成ったって言う飛翔！！！！」

「そうなんだけど、けど……………なんでこんな所に居るんだろう？……………」

その疑問だけがこの戦いが終わる間であった。

飛翔Side

俺は手に持っている長ネ・・・ドンパッチソードでシグナムの剣を弾いた。

「ええーと・・・済まんが俺はあんたよりそっちの赤い女の子に用が有るんだけど・・・」

「むっ！？なんだお前、私よりヴィータの方が良いと言っのか！」

俺が申し訳なさそうに言うとシグナムは切り掛かって来た。

「発言は乙女みただけで行動が怖いわああ！！！」

「誰が乙女だぁ！！！！私は・・・騎士だぁああ！！！」

シグナムの剣をドンパッチソードで防ぎながらの会話だったりする・・・

「だってあなた普通に美人ですよ！？」

「誰が美人・・・美・・・美人！？」

いきなりシグナムが顔面を赤面させて後退りして行った。
これはチャンス！！！！

「じゃあ、俺はあつちの娘に用が有るから!!!」

そういつてドンパッチソードを戻して、飛行少年になり、光速でそこから離脱した。

その頃、シグナムは……

「私が美人……美人……美人／＼……」

頬が緩み、顔面が真っ赤に成っているときに……

「あ、あの〜大丈夫ですか？」

「ええいうるさい!!!」

人が折角余韻に浸って居るときに!!!!」「えっ、ええー!!!!!!」

初めて男性に美人と言われて、テンパっていたシグナムに話掛けたフェイトの不条理な末路であった。

そしてヴィータの所に着いた飛翔君Side

「やっとたどり着いたよ」

ヴィータの所に何とかたどり着いた。

ヴィータはこちらを殴ってこようとするがまだバインドがかつて
いるからだ、ジタバタしているだけだったが・・・バインドは可
哀相だよなあ（・・・）

パチンツ！

指パッチンをしただけでバインドをしていたものは碎けて弾け飛んだ

「えっ？な、なんで助けたよ！？」

そう疑問に思っているヴィータの頭を、俺は撫でた。

「な、何すんだよ！」

怒鳴ってはいるが、撫でている手を振りほどこうともしないし、顔
面が服と同じ色に成っている。「たぶん聞いてなかったと思うけど、
名前は何ていうの？」

名前自体は知ってはいるが、確かまだ聞いたことが無かった気がし
たから一応聞いてみる。

「ヴィ、ヴィータ／＼／」

まだ顔が赤いヴィータは囁んではいたが名前を覚えてくれた。

「ヴィータか・・・うん！！良い名前だ！！」

「じゃあ、ヴィータ、落とし物だ」

ポスッ

俺はヴィータの帽子を頭に被せてあげた。

「修繕はしておいたから大丈夫だとは思うが、何か変な所は有るか？」

「な、なんで？」

「そんなことしてくれるんだよ！？」

「あたし達は敵だろ」

「・・・？俺とヴィータ達って敵だったわけ？」

「変な事を聞く娘だ・・・」

「前は君たちが仕掛けた喧嘩・・・って、今回もか・・・だけど」

俺はヴィータの頭を撫でながら続けてこう言った。

「困っている人を助けるのは当然だろ？」

そういうと、ヴィータははっとした顔をして、いきなり泣きながら震えていた。

「ならよ・・・助けてくれよ・・・はやてを、はやてを助けてくれよ！！！！！」

ああ、はやてを助けるために俺は、この世界にやってきたんだからな！！

そう言い俺はヴィータを抱き締めながら。

「泣くなよ・・・絶対、絶対助けてや・・・」ブレイカー！！！！！！！！！！「て、ええええええ！！！！！！！！！！」

言い掛けたその時、こちらにピンク色の太い閃光が飛んできた・・・

なのはSide

今ユーノ君に傷を治して貰っているんだけど、みんなやつぱり、劣勢なの・・・

アルフさんは、青色の犬（？）と戦っているけど、力負けしているし、

フェイトちゃんは、互角のように見えて押されてる。

けど、あの剣士さん、気迫が凄いの！！！！

髪と同じピンク色の気迫だけど・・・

飛翔君は・・・あの魔術師さんのバインドを解いてあげてる！！！！
やっぱり飛翔君は優しいなあゝ

・・・・・・あっ！！次は頭を撫でたの！！！！

・・・・・・マダ、ユルセル・・・

次は帽子を被せてあげたの！

さつき私が落したもののか！！！！

後で謝らないとなあゝ

・・・・・・あれっ、いきなりあの娘がなきはじめたの？

・・・・・・抱きついたの・・・・・・その時には、なのは目から
ハイライトが消えていた・・・

「レイジングハート・・・」

「な、何でしょう？」

「スターライト・ブレイカー、行くよ・・・」

「り、了解！！！！！！」

なのはの迫力に押されて了承するしかないレイジングハートであつた・・・「カ、カウントダウン10、9、8、7・・・」

レイジングハートがカウントをすすめるにつれ魔力球は、デカくな

つていき・・・

「6、5、4・・・3・・・3・・・」

やはり限界が来たのかレイジングハートのカウントは止まり始めた・

「大丈夫!? レイジングハート?」

「だ、大丈夫です!! カウントを再開します」

「3・・・2・・・1・・・0!!!!」

スターライト・ブレイカーのチャージが終わり、なのはがスターライト・ブレイカーを撃とうとした時――

ドクンッ!!!!!!

「あ、ああ、あ・・・」

なのはの胸から手が生えていた。

その手は一回消えたと思ったが、もう一回出てしかも、その手にはピンク色の球体が握られていた。

「リンカー・コア、蒐集」

そう誰かが呟いた、そうしたらなのはのリンカーコアの光が鈍くなつていった・・・

「・・・なの、邪魔・・・なの」

そついいながらなのは、踏張って――

「浮気をする飛翔君も許せないけど、その・・・飛翔君に近づく雌猫の方が邪魔で許せないの!!!!!!」

そう叫びながら――

「スターライト・・・ブレイカー!!!!!!!!!!!!!!」

ピンク色の閃光は飛翔に向かって飛んでいった――

飛翔Side

ど、どうする!!!!!!!!!!

アニメで見たときは凄かったけど
実際の物はもつと凄すぎる!!!!

（俺チートだけど、あれ食らったら死ぬる気がする・・・）

ギュッ!!!!

・ ヴィータが、あの砲撃が怖いのか抱きつく力が強くなっていた・・・

（そついえば、ヴィータ抱きついてるから使える腕は片手だけじゃ
ん!!!!!!!!!!）

どうする！?!?!?!?

.....あ!?

あれがあつたじゃん!

ピンク色の閃光はすぐそこに来るまで迫ってきた――

「今だ!!!」

そう言つと俺は閃光にむかつて手を広げて――

「魔力待機!!!」

そう言つとピンク色の閃光は俺の手の平に集まり球体に成り、俺は

――

「収握!!!」

握り潰した。

「魔力装填!!!」

そう言つと握り潰して散り散りになつた魔力が俺に集まり、俺のバリアジャケットは、変化していった。

いつもの和服からなの姉みたいな、白が主体のバリアジャケットに成っていた。

「えっ!?!」

なの姉は自分が撃つた砲撃がいつも簡単に止められかつ、飛翔の姿がいきなり変わった事に驚いていた。

そんな時に俺はヴォルケンスに念話で話し掛けた。

「（俺が気を引き付けておく、その間に逃げる！！今のなの姉は悪魔だ！！）」

「悪魔じゃないもん！魔王でもないもん！！」

何処からか幻聴が聞こえてきたが聞えない聞えない――

「術式解放！！」

手の平を前に出しそういつと、ピンク色の球体が出てきた。
それを俺は――

「星光の――――殲滅者！！！！！！！！」

その球体を殴りつけた。

そうするとピンク色の閃光は空に向かって飛んでいった――

バリッ！！！！

空の結界が壊れてもなお、ピンク色の閃光は空を貫いていた。

「（ほら、今のうちに逃げとけ、捕まるぞ）」

ヴォルケンに念話で話し掛けるとシグナムから念話で――

「（すまぬ、最後に聞かせてくれ！？、お、お前の・・・お前の名前を教えてください！！！）」

念話だが、頬を赤らめているシグナムが見えた。

「（俺の名は・・・双月の騎士、高町・・・高町飛翔だ）」

「（わかった、では飛翔・・・また会おう／＼／）」

赤面に為りながらシグナム達は散り散りに飛んでいった・・・
（・・・さて、俺は闇の書の事について調べるか・・・）

飛翔は目をつぶり心の中でこう呟いた・・・

「（検索・・・闇の書について、それに関わる人物について検索・・・地球の図書館）」

あのアカシックレコードもどきを起動させていた・・・
そして1分で閲覧が終了した・・・
最悪の本の閲覧を・・・

その頃、クロノ、エイミィ、リンディ率いるアースラクルーは、闇の書の存在を確認していた・・・

偽善とKYと偽善者と（前書き）

やっとこさ、中間試験が終わって書き始めたところです）。・・。

いやあ、「中間終わるまで？触らせない」と、母親に言われてしま
って本当に遅い更新がまた遅くなってしまい（・・・；

ではでは、M Y P a c e W o r l d 始まります。・・。・

偽善とKYと偽善者と

フェイトSide

今私はあり得ない物を見ている。

今戦っている魔導師・・・いや、騎士シグナム。

彼女の攻撃はすべてが正確かつ、重い攻撃だった。

なのに、彼はその攻撃を・・・食べ物、ネギで受け止めた・・・

それになのはのスターライト・ブレイカーを片手で受け止めかつ、
吸収しそれを放った。

・・・悔しいけど、今の私にはシグナム達には勝てない。
だけど彼はそれを当然の事のようにやっていた。

シグナム達にスターライト・ブレイカーを片手で「止められる」か
と考えたが、推測では無理だと思う。

なのはのスターライト・ブレイカーには、結界破壊の性質がついて
るので、たとえ倒せなかったとしてもダメージは食らうはず・・・

・・・
だけど、彼は無傷でスターライト・ブレイカーを受け止めた、しか

も片手で――

勿論私にもそんな事は無理である。

――このことで解るように、私・・・いや、私たちには彼に勝てるものは居ない――そんな人が敵だったらと思うと・・・

だけどそんな推測は彼の一言で崩れた――

そんな人が敵だったらと思うと・・・

だけどそんな推測は彼の一言で崩れた――

「なの姉え！！！！！」

彼がスターライト・ブレイカーを撃ったリスクで倒れてしまったなのはに言った――

そう、彼はなののは・・・・・・弟だった。

飛翔Side

「なの姉え！！！！！」

俺はなの姉に向かって叫んだ。

理由は二通りある。

一つは、満身創痍の状態であんな砲撃をかましたこと。
俺も横目でしか見てないが結構ヤバい状態だった。

なの姉の意識が戻ったら説教しよう！

そして二つ目は……こっちに向けて撃ってきたことだ！
！！！！

何故だ！？

どうしてこっちなんだ！

結界を破壊することぐらいならこっちに撃たなくても良いじゃないか！！！！

「（それが解らない内はボスは一生独身だZe!）」

そう思った双月さんなのでした……

それはともかくなのはの所着いた飛翔Side

「なの姉起きろ！」

俺はなの姉に近づき軽く揺すったが

う、ああ！！！！

「うつ、つ

返ってくるのは苦しそうな呻き声だけだった……

「キミ、なのはの弟さんだよね？」

「あんたは？」

「なのはの友達のコノノて言うものだよ」

「私はアルフ」

「私の名前はフェイト・テストロッサ」

いつの間にかこの作品の重要人物達が揃っていた。

「なの姉の魔術関係の友達か・・・なら、なの姉をどこに持っていけばいい!？」

「多分アースラの方から救護班が来ると思うよ・・・あと10分位だと思うよ!」

フェイトが懇切丁寧に言ってくれたが後10分も掛かるなんて待てない!!!

「すまんが、フェイト!アースラの事を頭で考えてくれないか!？」

「えっ!?!別に良いけど？」

そっついフェイトはアースラの事を考えているのか目をつぶっていた。「皆!!!俺の腕に掴んどけ!!!」

「わ、解ったよ」

「解った」

「う、うん」

フェイト達は躊躇いながらも俺の腕に掴まった

そして俺はフェイトの頭に手を置いた

（行けるかなあ？）

そう考えた時には俺たちにはその場には居なかった――
俺が使ったのは某スーパー野菜人が使う瞬間移動をつかった――
あれはそこに知っている気が無いと出来ないが――
そんな事無視がでなくてなにかチートだwww

それに今回はフェイトを中継として使ったからできたのかもだしな
――

KY――クロノSide

「おいこら作者！逮捕するぞ」

（……………すいませんでした）

今なのは達を襲撃した奴らが持っていた魔導書は――第一級捜
索指定ロストログア――闇の書――僕の父さんが死ぬ理由になっ
た代物だ――それが今回の事件の敵だとは、因縁難いな――

「クロノ君、ちょっと良い？」

「なんだ？エイミィ？」

「さっき戦闘に出てた少年のことなんだけど」

「ああ、彼はフェイトの報告によればなのはの義弟だって話だが・
・」

「解ってるんだけど、その弟君を中心に皆集まり始めてるんだよ？」
「どういう事だ？」

さっきの映像を見たときもなのはの大技、スターライト・ブレイカ
ーを片手で止めかつ、吸収し自分の技として放った・・・
見たことも聞いたことも無い技だ。

そんな芸当が出来る彼はナニをやろうとしてるんだ？

そして映像を見ていたクロノ達は驚愕した・・・さっきまで映像に
映っていたなのは達が居なくなりかつ、目の前に居るのだから・・・

「すまんがなの姉を早く医務室に連れていってくれ、それとフェイ
トも腕に怪我をしてる」

彼は冷静な口調で言ったのであった。

それからなのは、フェイトは医務室に連れていきなのは弟は取調室に連れていった……

飛翔Side

今俺は簡単な事情調書を取っていた……

取調官はクロノ・ハラオウン、原作の作品では結構重要らしい……

さつき闇の書の「検索」を掛けたときに一応管理局の重要人物をピックアップしておいた。

一応「原作に関係が有るもの」のジャンルに引っ掛かる人達をあらかじめ調べ尽くした。

「すまないが今から簡単な調書を取らせて貰うけどいいかな？」

「いいが、終わったらなの姉に会わせてくれ」

「わかった約束しよう。では始めに名前を聞かせてくれないか？」

「高町飛翔、名字を聞いたとおり高町なのはの弟だ。義理のだけだな……」

「君の両親はどうしたんだ？」

「無くなったよ・・・交通事故でな」

そう言うとクロノは申し訳なさそうに・・・

「す、すまん！野暮な事を聞いてしまったな・・・」

「いや良い、そっちは仕事で聞いているのだろ・・・次の質問は何だ？」

「あ、ああ・・・では、さっきのなのはSLBを止めた・・・いや、吸収した技は何だい？あんな魔法は聞いたことが無い・・・」

さっきの魔法、ネギまの「闇の魔法」が見られているのか・・・

「さっきのあれは、敵弾吸収技、俺は闇の魔法と読んでいるが、簡単に言うとも魔法という魔法を吸収し、その魔法の特性を持った格闘が出来たり、さっきみたいに放出できたりする」

「そんな魔法聞いたことが無い・・・」

「だが、現に有ったんだから仕方がない」

この言葉に納得が行かなさそうな顔をしているが、無理やり納得したのだろう、次の質問をしてきた。「次に聞くのは質問では、無く提案なんだが、君の身柄は管理局が保護するのだが、その間君には民間協力者と為ってもらいたいのだが・・・」

「別に良い、けどこの事件が終わったら協力はやめさせてもらうよ」

「ああ、それで良い」

そんなコンナで名前、年齢、出身世界などを聞かれて事情聴取が終わって、なの姉の医務室に向かっていた・・・

「・・・・・・・・エイミィ、測定は終わったか？」

「終わったけど、こんな事していいの？」

「ああ、それで良いんだ。なのはのSLBを受けでは無く、吸収しかつ、放出する。どう考えても普通ではない・・・・・・・・で計測の結果は？」

「うん、今モニターに出すね・・・・て、え!？」

「どうしたんだ？エイミィ」

「そ、それが、彼 능력値、魔力値、身体能力値、全て「判定不能」で、出てるの!」

「う、嘘だろ・・・・全く、僕たちはとんでもない拾い物をしてしまったようだな」

取調室でそんな会話が呟かっている頃、主人公の飛翔君は・・・・

「・・・・・・・・ここは、何処だ？」

絶賛迷子中だった「おいおい、こんなに広いなんて聞いてないよ全
く」

「（どうするよボス、なのは嬢ちゃんの場合なら分かるZee!）」

流石チート武器君!!!

俺にできない事やってくれるぜ!

「じゃあ案内してくれよ」

そういう事で双月に導かれてなの姉のところまで移動していった

「（・・）」

そしてある扉の前に来た、反応によるとここになの姉が居るらしい。

ガラガラ・・・

ノックも無しに開けてしまった。

そして見えたのが、なの姉とフェイトが抱き合っていた・・・

・・・扉（。。）

ボタン!!!!!!

「ぐゅっくり!!!」

某WAWAWAの方も顔負けの戦略的撤退しました。

「ひ、飛翔君！！！！何か誤解してない！！！」

「え、どう言うことなのは！？」

「なの姉が百合だったなんて！！！！」

「だから誤解だつてば！！」

そう誤解をし、管理局内を数分走り続けていた――

その後の姉達のデバイスが有るところに行きデバイス達の現状を聞いた後――

「なのは、フェイト、それに飛翔、君たちに会いたいと言う人が居るから来てくれるか？」

そついいクロノに連れていかれたのがある扉の前だった「管理局執務顧問室……」

そつ呟きクロノが入り皆が入って行った。

そこには管理局執務顧問官、ギル・グレアムが居た

偽善と1と10と

グラムSide今回呼んだのは君、フェイト君は、先のPT事件で活躍して管理局内では、時たま呟かれているくらい彼女等是有名である。

だが、今回呼んだ理由は、この”闇の書事件”で私の計画に支障を来すのなら始末をするつもりだったのだが、そこまでの力では無いようだ。

今の彼女達じゃ守護プログラムに勝てないようだ。

だが、なのは君の弟さん、”高町飛翔”はただ者じゃない”らしい”あの守護プログラムを弟さんは圧倒する実力が有ると、数値的に出ていると報告を受けている。

先程の”らしい”と、言うのは、私は彼を数値しか、見ていなくて実力や、容姿が解らない。

だから今回なのは君達と一緒に呼んで、今私の前にクロノも入れて四人居るのだが――

ガタガタガタッ！！！！！！

右手が震えているのを左手で押さえてはいるが、震えている。

クロノや、なのは君、フェイト君に”震えている”のでは無く、目の前の少年に私は震えている！！！！！！

今まで執務官と言う仕事中に違法実験所や、無残な殺人現場などに出くわした事など数えきれない位見てきたというのに、最初の頃は気持ちが悪かったが今となっては慣れてしまったのだろう、吐き気などは無くなってしまったが――――――

――――――”アレ”は別格だ！！！！

「な、なのは君は地球出身なのかい？」

「えっ！？、あ、はい」

「そうかい、実は私も地球出身なのだよ」

「えっ！？そうなんですか！」

「ええ、私はイギリス人だがね……いやあ魔法との出会い方まで似ている……」

目の前の少年に恐怖しながらもなのは君には世間話を、フェイト君には監視の軽度を話した。

そして彼等が退室するさいクロノに今回の捜査担当の事を言われ、これで”終わった”と思った。

「グレアム、なに惚けているんだ……」

ビクッ！！！！！

どういう事だ！！！！

先程クロノ達と退室して行っただけの彼が目の前に居た。

「貴様の遣りたい事は解っている。……………あと後ろに隠れているネコ達……………出てこい！」

そういうと、後ろに護衛に付けておいた娘達が表れた。娘達は驚いている。

当たり前だ。自分に掛けていた姿が消える魔法が彼の殺気だけで消えたのだから。

「よし、役者は揃ったな。――とりあえず、座れ」

彼が言葉を発した瞬間私たちはいつのまにかソファ―に座っていた。
――しかも自分の意志に関係なく――

飛翔SIDE

こういう時に”言葉の重圧”が有ってよかったと本当に思う。

「さてグレーム、俺が言いたい事が解るか――」

「・・・・闇の書の事が・・」

分かってはいるようだな。

「解っているなら話は早い、今回の件からは手を引け」

「なっ!？」

「貴様!!父様になんて事を!!」

猫共が煩いな・・・

「……とりあえず俺はグレアムと話をしているのだ」
その後少し間をあけて……

「黙れ」

ドーン!!!!!!!!!!

そう呟いた時グレアムの脇に座っている猫共……の隣30センチにクレーターが出来た

「なっ!?!」

「えっ!」

それには猫共は驚いたのか喋らなくなった。

「さてグレアム、話の続きをしようじゃないか」

「……君は正義の味方を目指しているのかい? だったら止めておけ、この件に関わるとロクな目に会わ「嫌だ」!?!」

「だから嫌だと言っているんだ。貴様が遣ろうとしていることは、闇の書を封印するためにはやてごと氷結魔法に掛けて、異次元に閉じ込める寸法だろ」

「!?!……なぜ知っている」

グレアムは自分の計画が筒抜けに為っていることにビックリしながら俺に言ってきた。「それを教えると思うか？・・・そんな1を捨てて10を救うなんて作戦、見逃せないしな」

「私もそんな事をしたくは無い！！！！だが、あれを見逃せば今度は私の故郷の星が・・・壊されてしま」させねえよ「！？」

「させねえよ、はやてにそんな事をさせる訳には行かねえよ・・・」

「君は・・・はやて君と最近会ったばかりだろ。なんで・・・なんで他人の為に頑張ろうとするんだい」

「・・・はっ、当たり前だろ。」

「友達だからに決まってるからだろ」

「・・・」

グレアムは、俺の理由を聞いて口をポカーンと開けていた、

「ハッ、ハッハッハッ！！！」

グレアムは笑いだした

「友の為に善を取らずに偽善を取るとはね！！・・・ハッハッハッ！！！！よし、良いだろう私も偽善者なりに君と戦いたく為ったよ」

「分かった、けどその代わりに条件がある、この事件が終わったら、

「はやて達の罪は無くしてくれ」

「良いだろう、だが形だけの観察官くらい着くと思うがそれでも良
いかい？」

「大丈夫だ、それじゃ俺は失礼するよ」

そういうと俺はその部屋から消えていた

偽善と引っ越しと横槍と

グレアムとの取引も微妙な感じで終了し、今俺は有るところにいる……

そう!!!

ハラオロン家の引っ越しのお手伝いをしているのだよ!

始めてこのマンションを見た時俺は管理局の給金が気になって聞いてみたら……日本円にしたら年収で家が二つ買えていた……

それもリンディさんだけでた、クロノの給料も入れたら月に家だつて買えてしまうだろう……

考えるのは止めよう。鬱になってきた。

「フェイト、これは君のだよね?」

「あ、ありがとう飛翔、それはそこに置いておいて」

フェイトとは普通に話せる位にはなった。

グレアムとの取引の後なの姉とフェイトが居たから自己紹介をしたら普通に受け入れてくれた。

初エンカウントがアレだったから(戦場に葱持って来たからなあ)

ピンポン

誰か来客が来たようだ。

フェイトとなの姉が扉を開けたら其処には――

「「こんにちはー！」」

アリサとすすかが居た。

そう言えばなの姉が送ってるビデオレターに二人も出ていたり、写真も送ってたりしていたしなあ

「な、なんで飛翔までいるのよ！」

「なんだ、友達の家の引っ越しを手伝っちゃ行けないなんて聞いた覚えが無いがね」

「と、友達・・・友達／＼／」

俺がそういうとフェイトは小さく確認するように呟いていた。

「あんた何時の間に友達になってたのよ・・・まあ良いや、所でののは、フェイト、何処かでお茶しない？」

「良いねえ」 行こ、フェイトちゃん」

「うん」

・・・・・・僕は？

これが今流行りの「お前の席無いから！！！！」って奴か！！！！

そう思いヘヤノスミスにうなだれていたら、

「飛翔君も、ほら」

と、さすがが手を差し伸べてくれた。

「す、すずかー！！！！」

そついいすずかのを取り抱き締めた。

「か、飛翔君／＼皆居るよ」

・・・・・・あつ、そう言えばそうでした（・・・；）

後ろでは、全国に釘みい病をばらまいた本人と、話す事が大好きな方の目からハイライトが消えていた。

フェイトは赤面し、目を手で隠しつつチラチラこっちを見ていた。

「「飛翔（君）なんですすずか（ちゃん）むぎゅーしてるんですか？」

」

「いや待て、僕らは猿じゃない、文化と共に進化してきた人間だ、

まだ話し合えるはずだ……」

「いや、無理」

死刑宣告だった

「ぎゃあー！！！」

リンディSIDE

なのはさんの弟さんはかなり皆さんに慕われているんですね

これはフェイトさんのライバルが増えていくようね。

さっきの友達発言にはまんざらにもいい顔をしていたしね。

翠屋SIDE

死刑宣告も終了し、ぼろ雑巾と化した僕となの姉達は自分達の両親がやっている、喫茶翠屋にてお茶会をしている。

「ユーノ君、久しぶり！」

「きゅ、きゅ」

あのユーノって奴は不憫だなあ（・・・；）

本局で変化後の姿だと聞いたが・・・・・・・・・・惨めだ。
「きゅー！！！」

ユーノがなにか唸っているが、無視無視WWW

「なんかあんた見たことあるような？」

「ガウ？」

あの狼擬きはフェイトの使い魔らしい、本局の会議でフェイトに教えてもらった。

そんなこんなありフェイトに制服が届いたり、その時に見せたフェイトの顔に燃えてしまった（わざと間違えた）自分が居るよ（・・・；

そして我らが主人公は動き出した。

姫さまの騎士たちを守りに。

ヴィータSIDE

クツ、油断した！

ミミズの化け物を倒して魔力を吸収しようとした、その瞬間……

「……………！！！！！！！！！！」

人間が聞き取れない位の音量を上げてミミズが起き上がった。

そう、このミミズは死んだ振りをしていたのだ。そしてミミズは自分の身体から触手みたいにモノを出しアタシの四肢を縛り上げた。

「な、離せっ！！！！このミミズ！！！！！！！！」

私は叫ぶがミミズには伝わって無いのか、聞く耳を持たないミミズはアタシの腹に……………

ザクツ！！！！

触手を貫通させた。

「アツ！？アツ、アアアアア！！！！！！」

痛い！！！！！！！！！！

どうやら私の言葉は解らなくても、その音量が五月蠅かったのか黙らせる為に止めを刺されたらしいなあ。

（だめだ．．．貫通させた触手もぬかれて出血も酷くなっちまった．．．）

そう思考をしているとミミズは私を食べようと口に近付けた。

や．．．．．だ！！！！

「た、助けてよ！！！！シグナム！！！！シャマル！！！！ザフィ
ーラ！！！！」

そして前の三人より声量が多く．．．

「飛翔うう！！！！！！！！」

その叫びにもキレたのかミミズはまた触手を刺そうとしている。

そして放たれた触手による痛みに備え目をつぶった。

ザシュ！！！！

肉が切れる音が無音の砂漠に広がった。

（・・・・・・い、痛くない？）

肉が切れる音が聞こえたが体に残る痛みは一回目の貫通させた触手の痛みの一ヶ所だけであった。

いつまでも来ない痛みに疑問を抱いたからアタシは目を開けてみた、
そしたらミミズの触手が――――

途中で千切れていた。

そして千切れている触手を持っていたのは・・・・・・飛翔だった。

「大丈夫だよヴィータ。ゆっくり休んでね。」

そついつて触手を捨て私の頭を撫でてくれた。

私はここで意識を無くした。

飛翔SIDE

さて、ヴィータは寝たか。

「!!!!!!!!!!」

腕が千切れたのか騒いでる”ゴミ”が五月蠅いなあ。

「五月蠅い、騒ぐな、貴様には死を与える――――ガ―
ディアンARM、ア・バオアクー!!!!!!!!!!」

俺はポケットから予め作っておいたARM、ア・バオアクーを呼び出した。

そうすると、俺の背後に巨大な眼球に黒い雲みたいにものが纏っている物が現れた。

パチンッ!

俺が指パチンをすると”ゴミ”の周りを透明な球体が覆った。

「!!!!!!!!!!」

球体から出ようと藻掻いているが……無理だろ。

「俺があるセリフを言えばその球体の内部は爆発を連発する、何か最後に言いたいこと……」
「……………意味が無いか……バースト・アップ!!!!!!」

そういうと、球体の内部は爆発を繰り返し”ゴミ”は肉塊になっていった。

偽善と瀕死と契約と（前書き）

いやあゝ一週間も掛かってしまいました（．．．）

どうも木星帰りのMy Pace Type です〓^．．．^〓

本当は3日前に投稿出来たのですが、理由があり．．．．

ではでは、My Pace World、始まります。

偽善と瀕死と契約と

飛翔SIDE

”ゴミ”を片付けたあと俺は直ぐにヴィータの所に向かった。

「おい！！ヴィータ！しっかりしろ！！」

呼び掛けてもヴィータはうんともすんとも反応が無い。

「（ボス！！このlady、魔力で出来ているようなモンだから、魔力を分けてあげれば意識を取り戻すと思うZe！！）」

魔力なんてどうやって分ければ良いんだよ！！

なんだ、Fateみたいな魔力譲渡で良いのか！？

バカたれ！！！！

そんな事出来るか！！！！

じゃあどうやって魔力供給させる！？

「ボス！！キスすればいいZe！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・ふえ？

ナニソレ？

冗談だよね？

「キース！！！！キース！！！！キース！！！！キース！！！！」

合コンかここは！！！！！！

ええい！！！！

引いてしまつては男では無い！！！！！！

そつ思い俺はFIRST KISSを・・・・・・・・ヴィータに捧げた。

前世では年齢Ⅱだった者で（・・；）

確かにキスすると魔力が行くのが分かるなあ。

少したつとヴィータは薄い光に包まれていった。

ヴィータSIDE

アタシは・・・・・・・・確かあのミミズに串刺しにされて・・・・・・・・気を失

った気がするんだけど……………

んっ!?

息がしにくいなあ？

そう思いヴィータは目を開けると…………

目の前には先の戦いで”助けてくれる”と言った少年が居た。

しかも近距離で、しかも自分に口付けをしていて

（ちょ……！なんで飛翔にキスされてるんだよ……！確かに飛翔に助けを求めては居たけど、キスされるなんて考え…………無いつでは無いけど）

と、ヴィータは頬を赤くしながら考えていた。

目を開けても飛翔が気付かないのは、飛翔自身が目を閉じて居たからである。

そして飛翔が口を離そうとした瞬間、ヴィータは無自覚で飛翔の背中に腕を回して、放さないようにしていた。

「……………!!!!!!」

飛翔自身もビクリしていたが一番ビクリしていたのはヴィータ自身だった。なんせ無意識に飛翔を抱き締めてしまったのだから。

「……………ッ!?ス、スマン!!!!!!」

「・・・・・・・・こつちもいきなりキスしてごめん!!!!」

「・・・・・・・・そ、そうだぞ!!なんでキスなんかしたんだよ!!!!」

「それはヴィータの怪我を治す為に魔力供給させる為に仕方なく!!!!!!」

「ッ!?!・・・・・・・・し、仕方なくってなんなんだよ!!!!!!そんなにアタシはキスなんかしたくなかったのかよ!!!!!!」

「そんな事ないよ!!!!!!・・・・・・・・俺はこんな事するの初めてだったんだ////・・・・許してくれよ!」

「アタシだって、生まれてからキスなんかした事なんか・・・・ないよ//」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

砂漠の上で赤面の少年少女が無言になる。

なんとシニールな絵だ。

飛翔SIDE

や、ヤバイ無言が痛い!!!!
なんか会話を切り出さなくては!!!!!!

「・・・・・・・・・・そ、そう言えば！お腹の傷はどうだ！？」

こんな事までして治ってなかったら俺は双月を”メルト”しなくては行けなくなるからな！

「！？そうだあ！！！！お腹の穴は・・・・・・・・ふさがってる！！」

「良かったよ。ちゃんと魔力は行ってたようだね。」

「良かったあ・・・・・・・・・・パサア・・・・・・・・ん、なんか落としちまった。」

服を捲り腹の傷を確認すると、中から”長方形のポケットサイズの紙”が出てきた。

「ん？なんだ、この紙？」

ヴィータがその紙を取って見てみると・・・・・・・・

「っ！！！！アタシが書いてある！！」

そのカードには今の騎士服ではなく、青を基調にした騎士服に”何か”とグラーファイゼンを掴んでいるヴィータが映っていた。・・・・・・ああゝあ（。・。・。）

大体予想は出来てたよ。

まさか仮契約バクティオーが出来るなんて・・・・・・・・

「”ボス！！！！あれは”仮契約”じゃなくて”本契約”の方だ！！」

「……………ほえ！？本契約つてあの”一生”を共にいるパートナー達がやるアレの事か！！！！」

しかも一人という人数制限が会ったはずだ！！！！

「……………なの姉にばれたら・犯られる！！！！！！！！」

「大丈夫だZe！ボスがキスすれば全て本契約、しかも制限無しだから大丈夫だZe！」

「（それは安心できるのか？まあ、ヴィータには上手く教えて置くか。）……………ねえ、ヴィータ。」

「な、なんだノノノ」

やっぱりヴィータはまだこっちを見ると頬を赤める。

自分の姿が前世のままだったらキスした時点で”110”をされているだろう。

現に頬を赤めるヴィータは可愛く、”テイクアウト”つまりお持ち帰りしたい気持ちがあったりする。

「ノノノそのカードは俺とキスすると出来るカードで、そのカードを持ちながら、”来たれ”って言うアイテムが出てくるんだ。」

やっぱり俺も頬が赤いやノノノ

まあ、”初めて”だったんだし、仕方ないか。

「飛翔とキスしたとき……………ボンッ！！！！！！」

……………ヴィータ……………頭から凄い量の煙が……………

「うううう！！！！こ、これを持ちながら言えば良いんだろ！！！！」
「……」

頭を振り、ヤケクソ気味にやりやがったな（・・・；）。

「……キュイン！！！」

カードが輝き、光が止むとそこには……
「……何も無かった。」

否、見えなかった。

偽善と瀕死と契約と（後書き）

作者「いやいや、ただいま！！！！」

飛翔「どうしたら3日も出せないんだよ。またモンハンか？」

作者「いやいや、モンハンはあまりやってないよ。今は”祝福のカンパネラ”やってるよ」

飛翔「また時代に着いてこれない奴だなあ。」

作者「とりあえず18になったら”祝祭のカンパネラ”買うんだあ
- - - - -」

飛翔「ハイハイ、で、何で遅れたんだ？」

作者「実は、この前、友人一人、通称”豆”君と、カラオケに行った時に、」

飛翔「余りカラオケに行かないのに珍しいなあ。」

作者「誘われたんだから仕方ない　しかも採点で90越えがアイマスの曲しか出なかったのよ（´；；；、）

飛翔「わかったから続き話せ！！！！」

作者「分かった分かった。．．．．．それで、ドリンクバーなのにあまり飲まず、6時間ぶつ通しで歌いまくってたら．．．．．脱水症状起こしちゃったんだけど、気付かないで、そのまんま帰ろうとしてチャリに乗ってたら、

途中で意識無くしちゃってそのまんま電柱に激突しちゃって、意識不明の所に、宅配便の兄ちゃんが見つけてくれて、119してくれて、病院に搬送されました」

飛翔「．．．．．バカだろ！！！！」

作者「いやあゝ飲み物は飲んだつもりだったんだけどなあゝ。

コーラ一杯、ジンジャーエール一杯、烏龍茶一杯、コーンポタージュ．．．．．五杯」

飛翔「コンポタ多っ！！！！」

作者「いやあゝあのコンポタはうまいよ！！！！」コンポタドリンクタイプ”て書いてあつて怪しかったけど旨かったなあ」

飛翔「．．．．．あとがきを見てくださった皆さん！！！！！！！！」
「この作者馬鹿だろ！！！！」と、俺の気持ちに共感してくれるやつ、感想に書いてくれ。」

偽善と武器と転入と（前書き）

早いなあ（・・・；）

これからこのペースで書けるかなあ（'；；；）

では、M Y P a c e W o r l d 始まります。

偽善と武器と転入と

飛翔SIDE

目の前のヴィータの騎士甲冑は青を基調にし、左手にグラーファイゼン、右手に”何か”を握っている。

そつ、まるで空気を”固めた”ような物をにぎっていた。

「え、ええええ！！！！なんだこの服は！！！！しかも右手のは見えな
いし！！！！」

ヴィータ自身も混乱しているらしい。

「ヴィータ、右手を縦に振ってみてくれ。」

「え、こ、こっか？」

そう戸惑いつつもヴィータは右手持っている”何か”を縦に振った
ら・・・・・・・・

サクッ・・・・・・・・

そんな軽い音がしたのだが実際は・・・・・・・・その”何か”の
インパクトPOINTから半径6m、下に10m位の砂が抉れた。

俺とヴィータは瞬時に飛んで無事だが・・・・・・・・

- 危なくね！？

着地して・・・・・

「ヴィータ、次は”去れ”って言うてみて。」

「・・・あ、ああ。」

”去れ”。」

そういうと、ヴィータの服装は赤色に戻り、右手の”何か”は消えていった。

「い、今がそのアイテムか？」

「多分、いや、絶対そうだけど。・・・ちょっとカード見せてくれるか？」

「お、おう」

そついいヴィータからカードを貰ってもう一回見てみたらこう書いてあった。

・・・不可視な事故インビジブル・アクシデント・・・と。

「ヴィータ、さっきのは不可視な事故インビジブル・アクシデントていう名前だそうだ。」

「ふうくん、長いから事故アクシデントで良いや」
良いんかい！！！！

「まあ良い、見たところ形状的には多分ハンマーだと思うから・・・
使えると思うよ」

「ふうくん、なら良いや・・・アタシ的にはキスしたことの方が・

・・ボソッ
」

「ん、なんか言ったか？」

「い、いいや！――何でもないよ！――！」

「なら良いや、よし――――帰るか。」

そついい俺はヴィータに手を差し伸べると――――

「・・・・／／／う、うん！――！」

綺麗な笑顔で応答してくれて。

結構ドキッと来たことは言うまでもない。そして俺等は海鳴町に戻った。

ヴィータSIDE

その後アタシは家で寝・・・・・・むれなかった！

だつて――！！

蒐集してたら気失って、起きたら飛翔とキ・・・・キスしちゃって
／／／／／

だから・・・・そのお・・・・ええつと・・・・だから・・・・

そんなこんなで眠れないヴィータさんでした。

。

そして翌日の学校、HRにて――――

「はあい！！！！皆、今日から新しい仲間が皆と一緒に勉強することになります。」

――――ワイワイガヤガヤ！！！！！！

クラス中騒いでいたが、ここにいる”三人”だけは誰が来るか知っていた。

そう、アリサ、すずか、なのはである。

え、我らが主人公？

・・・初な主人公も昨日は寝れず、やっと寝れたのが陽が出てからだ。

つまりただの寝坊である。

「先生ー!!」

一人の男子生徒は手を上げた。

「はい、何ですか？」

「転入生って男の子ですか、女の子ですか？」

「パパーン!!!それは・・・野郎共おめでとうございます!!
そして、子猫ちゃん達残念でした!!転入生は可愛い子猫ちゃん
です!!」「うおおお~~~~!!!!」「」

と、叫ぶ男子に・・・

「」(男子って馬鹿みたい)「」と、思う女子達がいた。

「じゃあ、入ってきて」

ガララ・・・

そして、入ってきたのは・・・

「フ、フェイト・Tです。」

緊張しているのか赤面のフェイトがいた。

「うおおお!!!!!!」「」

「神は我らを見放さなかった!」「始めから詰みの人生は今日からさよならだ!!!!」

「さよなら彼女（HD）よ。僕はリアルにいきるよ!!」

などと壊れている男子たちがいた。

「はい、野郎共は静かにしてください。では、席は・・・のはさ・・・先生遅れましたあああ!!!!!!」遅刻ですよ、飛翔君」

「すみませんでした!!!!!!」

綺麗な90のお辞儀をし誤っているチートと言つのは滑稽であった。

偽善と告白と旗と（前書き）

今回は終盤辺りのフェイトのキャラが崩壊しています。

それでも見てくれるかたは、ようこそMY Pace World
へ

偽善と告白と旗と

フエイトSIDE――ハッハハハハ!!!!!!
クラス中が腹を抱えて笑い始めた。

この笑いは勿論フエイトに向けられた物では無く、HR中に入ってきて飛翔に向けられた物だ。

（な、なんだか初日からすごいなあ）

と、登校初日に思ったフエイトであった。

――そしてお昼休みの時――

「うう、質問に答えるのに疲れたよ」

「にはは、大丈夫だよ！飛翔君もあれ受けてるから」

「ごめんねフエイト、うちのクラスは好奇心が強いから、私が仲裁に入らなかつたらどうなってたか！」

「まあまあアリサちゃん、そう怒らない怒らない」

「そうだぞ、アリサ、あんまり怒り過ぎるとその綺麗な顔にしわが

出来るぞ」

「なあっ！！！か、飛翔！！！！なんてこと言うのよ！！」「」「あっははは」

そっという談話をしながら私たちは屋上に向かった。

そして私たちは屋上に着き、ベンチに座ったのだがやはり五人は限界があるようで飛翔はベンチの隣の地べたに座った。

「じゃあ音頭は俺がとらしてもらおう。では、いただきます！！」

「」「」「いただきます！！」「」「」

そして、私達はお喋りしながらお弁当を食べていた。

途中、飛翔がアリサのおかずを取って二人が喧嘩……かなあ？、をやったくらいで昼休みは終わろうとしていた……一つのイベントを残して……

飛翔SIDE

そして、20分後にみんな弁当を食べおわり話しているところのクラス男子がやってきた。

「て、テストロッサさん！！ちょっとお話が……話したい事があるので来て下さい！！」

なんだ、アイツ一目惚れしたのか

「ええっと……ハイ」

男子はフェイトを連れて俺たちに声が聞き取れない距離に離れていた。

「へえ〜フェイトも隅に置けないわねえ〜」

「そんな婆臭い事言つてると彼氏が出来なくなるぞ〜」

「／／／！！！！・・・彼氏にするなら飛翔が・・・ボソ」

「にやはは、アリサも大変だねえ〜、まあ私”達”も好きなんだけど、ね、すずかちゃん」

「うん！私も飛翔君のこと好きだよ！」

なんだか、なの姉とすずかが話してるが少し聞き辛くて聞こえなかったかなあ。

「何の話してるの？」

「残念ながら俺には聞こえな・・・て、フェイト早かったなあ」
「う、うん／／／」

「アイツになんかされたか？」

「うん一目惚れました、って言われた・・・」

「「「おおおお！！！」」」

女子三人がうるさいなあ〜

「で、返事はどうしたんだ？」

「う、うん、断ってきたよ・・・」

「「ええええ!!!!」」

「なんでなの？」

「どうしてよ!」

「どうして? フェイトちゃん？」

「えっと、そのお・・・」

・・・フェイトが困ってるなあ・・・仕方ない、助けてやるか。

ポカ - ポカ - ポカ!!!!

「「痛い!!」」

「止めなよ、フェイトが困ってるだろ。」

「「・・・はい」」

一応反省したのか三人は頭を下げていた・・・何だか可哀相だなあ。

ワシャワシャ!!!

そう思った時には三人の頭を俺は撫でていた。

「「はうー!!」」

「ちゃんと反省するんだよ？」

「／／／わかったのー！」

「／／／わ、わかったわよー！」

「／／／わかりました！」

みんなどうしたんだ？顔が火照ってるが大丈夫だろうか？

「あ、あのー、飛翔私の頭も．．．「キンコンカーン」！！」

「じゃあ授業に戻るぞ！」

「「「おーうー！」」」

三人は元気いっぱいだが．．．フェイトの顔が苦笑いを浮かべてるな。

「（フェイト、後で話したい事が有るけど、良い？）」

「（か、飛翔！ー！べ、別に良いよ／／／）」

「（じゃあ放課後にまたここで。）」

念話を済ませて俺たちは授業に戻った。

そして、放課後、俺とフェイトは用事が有ると言いなの姉達に教室で待って貰い、屋上に来た。

「さて、聞きたいことは、アイツを振った理由だが……こつち側の理由だからすずか達の前じゃ言えなかったんだろ？」

「う、うん」

「不躰で悪いがその理由を聞かしてくれないか？」

「……………」

「本当に失礼かもしれないけど、俺はフェイトの事を少しでも知りたい！！友達として、仲間として」

長い沈黙の後、フェイトは重い口を開いた。

「……………実はね、私は……………F計画で言う実験で生ま

れたの・・・つまり人間じゃないんだ・・・」
フェイトは一度開いた口を閉じなかった。

「人間じゃないんだから人並みの幸せなんか要らないと思ってる・・・」

「それは間違いだよフェイト」

「！！！！何が間違いなの！！！！私は人間じゃない、言い方を変えれば化け物なんだよ！！！！そんな化け物が人並みに幸せになろうとしちゃ行けないんだよ！！！！」

「君は化け物なんかじゃない！！！！」

「・・・飛翔は・・・飛翔は私の何を知ってるの！！！！何も知らないのに勝手な事言わないでよ！！！！」

「知ってるよ、フェイト事なら・・・」

フェイトSIDE

言い過ぎたと自分でも思った。

「知ってるよ、フェイト事なら・・・」

「えっ！？」

「フェイトと会って一週間も経たないけど俺はフェイトの事を知ってるよ。」

「か、勝手な事言わないでよ!!!」

「翠屋で甘いものを食べている時のフェイト、なの姉と話して居る時のフェイト、クラスメイトと話してるときのフェイト……」

「……」

なんだろう、なんだか涙が――

「授業で当てられた時の慌てたフェイト、徒競走で勝った時のフェイト……」

「……エグツ……」

「初めて会った時の凜々しいフェイト、そして笑顔の時のフェイト、君は化け物なんかじゃない、ただの可愛い女の子だよ!!!!ただ生まれ方が違うだけ、それだけだよ」

「うわぁーん!!!!!!」

気付いた時には私は飛翔の胸に飛び込んでいた。

「もうフェイトはそんな事考えなくて良いよ、普通の女の子みたいに買い物にいたり、遊んだり、恋したりしていいんだよ」

「……うん!!!!!!ありがとう飛翔!!!」

パサッ――

ナデナデ - - -

そして飛翔は私の頭を撫でてくれた。こう言った。

「改めて - - - - -」

友達になってください」

「・・・こちらこそ!!!」
これが私が飛翔を好きになつた瞬間だった。

偽善と盾と共闘と（前書き）

こんな駄作に感想をくれた方、ありがとうございます。

この作品もPVが80000を越えました!!!!!!

感想お待ちしています!!

では、 My Pace World 始まります。

偽善と盾と共闘と

その後俺はフェイトが泣き止むまで傍に居てあげ、教室に戻ろうとしたら、

「……飛翔、手、繋いで／＼／／」

目の下を真っ赤にしながら手を出してきた。

（可愛すぎだろ……）

手をつなぐのは恥ずかしいが、ここで突っぱねたら先が見えているので俺は手をつないだ。

「教室の前では離すぞ」

「うん／＼／」

「……やっぱり恥ずかしい、前世ではこんなイベント無かったしな。」

「ほら、もう教室に着くから手、離すぞ。」

「……うん……」

手を離れた瞬間、悲しそうなフェイトの顔が見え罪悪感が否めないなあ。

その後おれ達はなの姉達と合流し、すずかの家に行き、その後家にフェイトを招き入れた時には、美由紀姉が恐かったなあ」

「小動物だああ！！！」

とか言ってフェイトに抱き付くんだもんな。

その後二人はレイジングハートとバルディッシュを取りに本局に行ったのだが・・・
なんだか、遠くでヴィータの魔力を感じるけど、やっぱり契約でパスが繋がったのか？

暇だから行ってみるか。

そう思い俺は双月を飛行少年にし、ヴィータの魔力がある方へ、飛び出した。

飛行して5分位でヴィータは見つかった。

隣の青い獣人は確かザフィーラだったかなあ？

だが気にするところはそこでは無かった。

その二人を囲む十数人の魔導師達だった。

その上空に魔力で出来た刀を数十本作り出してるクロノが居た。

（あれは少しヤバいかなあ？）

そう思い俺はヴィータの方に飛んだ。

ヴィータSIDE蒐集が終わった後集合場所にザフィーラと戻ろうとしたら管理局の奴らが待ち伏せしてやがった。

「囲まれたな」

「だけど、こいつらチャライよ返り討ちだ！」

もしもがあつたら”アレ”を使えば良いし・・・

「えっ！？」

管理局の奴らが離れていった。

「上だ！」

そう言われて上を見ると、大量の魔力で出来た刀が数十本あった。

「ステインガーブレイド・エキスキューションシフト！！！！！！いい！！」

黒い管理局員がデバイスを振って刀を落としてきた。

「くっ！？」

ザフィーラが盾を出したが全部は防げないだろ。

「させるわけないだろ！！ストラグルバインド！！」

「なっ！！」

ザフィーラがああ黒いのにバインドをかけられた！！！！
やられる！！！！

私は痛みに備え目をつぶった――――――
――――――

「クロノ、それはやりすぎだよ」

目の前から聞こえたのは、大好きな異性――飛翔の声が聞こえた。

「か、飛翔！！！！」

そっぴいながらアタシは目を開けたら視界の全てが飛翔と、桜の花びらでいっぱいだった。

飛翔SIDE

防護魔法の範囲が狭いからやってみただ、千本桜で受けとめれる物だなあ。

「クツ！！！飛翔！！君は何をしたのか分かってるのか！！」

「分かってるつもりだ、ただどだ、何も言わずに攻撃、これは不味くないか？」

「だけどこいつら犯罪者が持っているのは第一級搜索指定ロストロギア、闇の書なんだぞ！」

「そうだとしてもやりすぎだよ、理由を聞かずに攻撃をしてもしも、理由がちゃんとしてたらどうする？」

「それでも・・・それでもだ！！こいつらには・・・僕の父さんを殺したこいつら犯罪者には！！！！！」

.....ピキッ！！

「.....ヴィータ、”アレ”の使用を許可するから、あっちにいる女の子二人は任せたよ」

もうなの姉とフェイトが来ていて、Set Up も終わっている。
あっちはこっちに気付いてびっくりしているらしい……………

……………だが今は目の前の”コイツ”とお話しないとな。

飛翔SIDE OUT

偽善と扉と提案と（前書き）

今回はある意味自己解釈が有りますが皆さんの生暖かい愛で見守って下さい。

感想を待っています。

では、M y P a c e W o r l d 始まります。

偽善と扉と提案と

クロノSIDE

くそっ！！

飛翔に邪魔されなきゃ少しはダメージが通るだろうに！！！！

「飛翔！！なぜ邪魔をした！！！！」

「ヴィータは友達なんだな。友達を助けるのは当たり前だろ？」

そついい飛翔はデバイスをこちらに構えた。

「！！！！・・・いいのか？そんなことをすればなのは達や管理局を敵に回すぞ！」

そついい僕も飛翔にデバイスを向けた。

正直データを見る限り僕が本気を出しても飛翔に勝てる勝率は限りなく0%に近いだろう・・・・・・

「正直飛翔、君に勝てる気がしないが僕は管理局だ。私情無しで君を捕まえるよ」

「さつき、私情で動こうとしたじゃん！」

「うっ、うるさいうるさい！！！！」僕はがむしゃらに魔力弾を撃つ

た。

「っ！！！て、逆ギレかよ！？」そう叫んでる飛翔は、目の前に魔方阵を出し、その魔法陣から魔力弾が出てきて、僕のと相殺した。

「クッ！ブレイズキャノン！！」

僕の魔術の中で威力が高い物を飛翔に射出した。

が、

「何度やっても無駄だよ――」

そう言い飛翔はまた目の前に魔方阵を張りそこから出てきたのは――

――
――
――
――
――

「ぶ、ブレイズキャノン！？」

魔力光こそ違うが飛翔が出したのはまちがいに僕が作った”ブレイズキャノン”であった。

勿論また、僕のと衝突して相殺いたが、

「飛翔！なんで僕の使っている魔術が使えるんだよ！！しかも威力まで同じにするなんて！！」

思っている事を言ったら、飛翔は当り前の様に言ってきた――

「そんなの簡単だろ――」

「魔術構成さえ、解ればモノマネ位できるさ」

そついった飛翔の目には六亡星ができ、目の前に魔方陣を作り出した。

「さあクロノ、次はどんなを見せてくれるんだ？僕はそれと同じもの、同じ威力で返して上げるよ」

飛翔SIDE

キレてて無理やりだったけど以外と出来るものだな――

”複写眼”だけど、何の間違いか、複写眼は五亡星、俺のは六亡星、やはり双月のせいかなあ？

新しく名前を考えなくちゃなあ――

「クロノ、俺のこの目はあらゆる魔術の構成を把握出来る。
つまりお前の魔術は効かない。」

「バカな！そんな事出来るのはロストロギアぐらいしかあり得ない
！！！！」

まあ、ある意味ロストロギアより悪質かもな？

けど、この世界に殲滅眼とかいたら嫌だなあ！・・・

「そうだとしても、君は勝てないよ・・・そこで提案があるん
だが・・・」

「・・・はあ・・・解ってたつもりだったけどこ
こまでなんてな・・・解った、負けを認めよう！で、提案と言っ
のは？」

「何、君にとっても管理局にとっても良い話だよ、なんせ・・・」

「ヴォルケンリッターを仲間に入れつつお仕事が出来るお手軽コースだよ」

そう、俺の作戦はヴォルケンリッターを仲間に入れ、管理局の仕事で生態系維持の為の調整する動物の魔力をくすねて闇の書を完成させる。
そういった作戦である。

偽善と義姉と事故と（前書き）

なんだか、色々改善するところがあり、投稿しなおしました（、；

面目ないですorz

では、そんなこんなで M Y P a c e W o r l d 始まります。

偽善と義姉と事故と

ヴィータSIDE

全く、また飛翔に会えたと思ったら

「デメエ等・・・」

この前の魔導師二人がまたきやがった。
しかも・・・

「レイジングハート、カートリッジロード!!!」

「バルディッシュ、カートリッジロード」

そういった二人のデバイスからは薬莢が出てきた。

しかも二人の魔力が格段にUpした。

「・・・カートリッジシステムをつけやがったか・・・」

そうなると厄介だな。

「ヴィータ、どうする？ 私個人としてはテストロッサとやりたいと

ころなんだが・・・」

飛翔と同じく入ってきたシグナムがいう。

「ああ、スタイル的にシグナムがあいつと戦った方が良さそうだし、アタシもあの白いのにけりを付けたいしな」

「では、俺はアイツの足止めをしよう」

ザフィーラはあのデカイ女の相手をやってくれるようだ・・・

「じゃあ、また後で・・・」

・・・
テュウン・・・

軽い音を立ててアタシ達は散開した。

そこから1キロ位離れた所で止まった。

後ろを見るとやっぱり着いてきたのは白い魔導師だった。

「やっぱりテメエが来たか！！アイゼン！！！！」

「（シュワルベフリーゼン）」

私は出した鉄球をアイゼンで打ち出した。

「私が勝つたらお話聞いてもらっからね？」

そういつた魔導師は軽々と避けた。

「そこだ！！アイゼン、カートリッジロード！！！！」

ガシャン！！

「ラケーテンハンマー！！！！！！」

突破力があるラケーテンハンマーで決めようとした……………

「（プロテクション・パワー）」

……………キイイイン！！！！！！

「か、堅え……………」

やっぱりカートリッジシステムを搭載するところなるか……………

……………

……………なら！

そうおもい、アイゼンを引っ込めカードを取り出した。

そして言った――――

「来たれ!!!」

なのはSIDE

「堅え……」

勝てるの!!

前回は手も足も出せなかったのに今回は勝てそうなの!!!

そう思った瞬間、赤い魔導師さんは距離をとりポケットからカード？を取り出した。

「（遠目からだけど、あのカードあの娘の絵が書かれてる?）」

「来たれ!!!」

あの娘の体が光だし、光が治まりそこから現れた外観が変わった赤い魔導師だった。

とりあえずバリアジャケットの色が赤から青になり、左手にデバイス、右手には「・・・・・・・・・・」何か”を握っていた。

「（マスター！！アクセルシューターを撃ってください！！）」

「え？レイジングハート？何で焦ってるの？」

「（早く！！）」

「わ、解つたの！・・・・・・・・アクセル、シューター・・・ファイア！！」

アクセルシューターが放たれたが、数が前回の比じゃないよ！！！！

しかも制御が出来る！！

これなら・・・

「邪魔だ！！！！」

「・・・・・・・・・・パリーン

「え・・・・・・・・」

あの娘は右手、いや、右手に握っている”何か”を一振りしただけで身体の周りを回っていたアクセルシューターを壊した。

「う、嘘！？な、なら！！レイジングハート！！！」
そっつい、砲撃魔法の準備をしていると――

「遅い、飛翔の方が断然速いな」

カチャ――

頭の上にはデバイスが突き付けられていた。

「・・・・・・なんで殴らないの？」

「お前は飛翔の関係者だろ？前は飛翔、そっちで戦ってたんだし・
・関係者殴ったら飛翔に怒られそうで嫌だし／／／」

「か、飛翔君、まさかこんな所にもフラグを・・・・・・はあ・
」

これから何が起るのやらなの・・・・

そう思った矢先に、

「（聞こえますか、ヴィータに、なの姉）」

張本人からの念我が来た。

偽善と烈火と雷撃と（前書き）

今回はアニメのパクリが余りにも多いので進展はしてないですね
|| ^ . . ^ ||

けど、最後に あの娘（？）がやってくれますよ
（ . . . ）

では、M y P a c e W o r l d 始まります。

偽善と烈火と雷撃と

シグナムSIDE

キシャンキシャン!!!!!!

「ハアアア!!!!!!」

「うああああ!!!!!!」

ガキン!!!!

「クッ!」

「フッ!!!!!!」

やっぱり、強くなってるなテストタロツサよ……

――ガシャン!!

私とテストロッサは距離をとり――

「（プラズマランサー）」

テストロッサのデバイスが言うと足元に魔法陣が出来、周りに魔力弾が出来てきた――

「クッ！」

「プラズマランサー……ファイアー！」

十数の魔力弾が発射された。

「（速度は中々……だが!!）」

「ハアアア!!！」

私はそれを弾いた。

だが、魔力弾はまだ残留している。

そしてテストロッサは、

「・・・ターン！」

弾いたはずの魔力弾は方向を変えてこちらにまた向かってきた。

「クッ！？」

私は上に上昇して避け、魔力弾はぶつかり会った・・・・・・・・・・
だが、ぶつかり会った魔力弾がまた方向を変え、上昇してきた。

私は上昇しながら、

「レヴァンティン！」

レヴァンティンはカートリッジを一発ロードした。

「（ブリッツ・ラッシュ）」

魔力弾の速度が上昇した。

「はあああああ！！！！」

炎を纏ったレヴァンティンで魔力弾を打ち消した。

全く、カートリッジをロードしなくては消せないとは・・・・・・・・厄介
だな。しかも・・・

「（ハーケン・フォルム）」

速度も速い！

「（シュランゲ・フォルム）」

カートリッジを両方一発づつロードし、ぶつかった。

どおおおん！！！！

ぶつかった瞬間、爆発が起こり、周りに砂煙をたてながら私たちは距離を取った。

少しの間、静寂が起こった。

テストロッサの体を見ると所々にかすり傷があり、私の体にも切り傷等がある。

「強いなテストロッサ……それにバルディッシュ」

「（シュベント・フォルム）」

レヴァンティンをシュランゲ・フォルムから、シュベント・フォルムに変えた。

「あなたとレヴァンティンも・・・シグナム・・・」

「この身になさねばならぬ事がなければ、心踊る戦いだっただが・・・仲間たちと我が主人の為・・・」

鞘を出現させレヴァンティンを仕舞いつつ私は言い続けた。

「今はそうも言ってもらえん・・・殺さずに済ます自身が無い」

私はレヴァンティンを構え魔法陣を出現させ、

「この身の未熟を許してくれるか！」

そういうとテストロッサもバルディッシュを構え・・・

「構いません・・・勝つのは私ですから・・・」

フッ、やはり良い目と心意気を持っている奴だ、テストロッサよ・・・出来るのならやりたくはないが、主の為なら・・・

「うおおおお！！！！！」

「ハアアアアア！！！！！」

「二人共ストップ！！！！！！！！！」

「…………ガキン！！」

私のレヴァンティンとテストロッサのバルディッシュを止めたのは
……………

「飛翔！！！」

そう、飛翔だった……………だが、

「飛翔、私とテストロッサの真剣試合を邪魔する気か……………そうならば例え飛翔であろうと……………切る！！！」

私は飛翔にレヴァンティンを構え言い放った。

「……………はあ、それは悪い事をした謝る。だけど、聞いてくれ俺達は争わなくて良いんだ！」

「ど、どついう事だ飛翔!？」

「飛翔どついう事？」

「それは・・・」

「（皆、今から結界を破壊するからそれまで頑張ってね!!!!!!）」

「へっ?」「」

空いには一面を覆う雷雲が纏っていた。

M
y
P
a
c
e
W
o
r
l
d
E
n
d

偽善と破壊と仮面と（前書き）

最近なんだか、短くしたのだが投稿速度が延びないの〜）。・・。

感想お待ちしています。

では、My Pace World 始まります。

偽善と破壊と仮面と

「破壊の雷！！！！！」

「くそっ！間に合えええ！！！！！」

「飛翔（君）！！！！！！！」

「シャマルのバカアア！！！」

事の数分前に戻ってみよう。

俺はあの後、なの姉とヴィータを説得し、俺の計画を話したら。

「か、飛翔……ありがとう！」

ヴィータが泣きながら抱きついてきた。

やっぱりはやてが助かるのが嬉しいんだろう。

「……？あれ、飛翔君、一つ質問しても良いかなあ？」

なの姉が何か疑問を唱えてる。

「ん？何、なの姉？」

「その作戦だと結局は闇の書を発動するのは同じなんだよね？じゃあ、何の為にヴィータちゃん達を仲間にするの？」

「それは、理由が3つある。1つが刑罰の事。無断で生き物を討伐して、魔力盗つてたら流石に捕まった時の刑の重さを考えると管理局に入って動いた方が今後の為だ。」

「「「ほおー！！！！」」」

理由は1つ目なのに説得力があるなあ。

「そして2つ目はタイミングだ。俺は闇の書が完成したら、主を食らい新しい宿主を探すことを知っている。」

「「！！！！」」

なの姉とヴィータが驚いている。「じ、じゃあはやては、闇の書を

完成させてもはやては、助からないのか!!!」
ヴィータが半泣きに成りながら問い詰めている。

「普通は助からない・・・だけど此処には普通じゃない俺がいる」

俺ははやてを助ける為に此処に送られたんだから・・・

「え!?じゃあはやては助かるのか・・・」

俺は半泣きのヴィータの頭を撫でながら

「当たり前だろ? 助けるために俺は此処に居るんだからよ。」

「・・・・・・・・・・ありがとう、飛翔・・・」

「・・・・・・・・・・ジーーーーーーーー!!!」

や、やばいな姉とクロノが空気だ!!!!!!

「飛翔(君)、随分とヴィータ(ちゃん)と仲良いみたいだけど、何かあった?」

「こういう時だけ人って気が合うんですね!!!!!!」

「／／／．．．そ、そんな事より飛翔、三つ目の理由はなんなんだよ？」

「ヴィータちゃん、話をそらしちゃダメなの！！」

此処はなの姉を無視しよう。

「ええーとだな、三つ目の理由はd「無視しないでなの！！！！！！」
．．．管理局に戻ったら話してやるよ．．．」

「．．．ならいいの！で、三つ目の理由ってなんなの？」

「はあ、三つ目の理由はこれから、つまり未来の為だよ」

「「「．．．．え？」「」」

みんなして同じ顔をしている。

「なの姉はヴィータと戦ってどうだった？強かった、弱かった？」

「．．．強かったの、カートリッジシステムを使っても勝てなかったの．．．」

まあ、契約カードがあるからなあ

「そういう事だ、そういう強い奴が味方だと何かと勉強なるし、それに心強い・・・だから管理局のこれからでは無く、俺達のこれらを考えると、ヴィータ達には味方に為って貰いたいんだ。」

「「なるほどー！！！！」」

「そういう考えなら僕としても賛成だよ。」

「ありがとな、はやての為にそこまで考えてくれて・・・」

「流石飛翔君なの！！お姉ちゃんとして、鼻が高いの！！」

「あはは、ありがとう。所でヴィータ、今闇の書は誰が持ってるの？」

「確かシャルが持ってたと思うけど？」

「なるほど、じゃあ念話で此处に呼んでくれないか？」

「それが、さつきから呼んでも返事がねえんだよ？」

「・・・解った、じゃあ、クロノはシャルを探してきてくれ。」

「な、なぜ僕が！」

「じゃあ、戦闘中のフェイトとシグナムの間に入りたいか？」

「行つてきまあゝす！！！！」

そういつとクロノは何時もより早く飛んでいった。

「うん、元気でよろしい」

「じゃあ、飛翔君、私たちはフェイトちゃん達の所に行くの？」

「そうつ事。」

俺達はシグナム達の所に向かった。

クロノSIDE

まったく人使いが荒いよなあ〜最近の子供は躑が為ってないよ・・・
・・・僕も子供なのに老けたなあ・・・

そうばやきつつ、飛行を続けると管理局の魔導師では無い、闇の書
を持っている女性を見付けた。

「ええ〜と、貴方がシャルさんですか？」

「・・・何の用ですか？」

シャルは身構えた。

デバイスは指に付けている点を見れば彼女は戦闘ではなく、後方支援
援型なのだろう。

「闘いにきたんじゃないんだ！！そう身構えないでくれ！！」

「・・・じゃあ何の用ですか？」

「実は話す事g「ていい!!!」えっ?・・・うわあああ!!!」

話そうとした瞬間に横から蹴りを食らいぶっ飛んだ。

その蹴りを繰り出した男はシャルに何かを言っていた。

「な、何物だ!!!貴様は!!!」

僕はデバイスを構え戦闘体制になった。

まったくこんなに微妙なタイミングに来るなんてKYな奴だ!!!

「「「オマエモナ・・・・・・・・!!!!!!」」」

・・・・今なんか電波が聞こえだが、気のせいだよな?

目から汗が出てるのも気のせいなんだよね!!!!!!

シャルSIDE

ザフィーラと念話をしている最中に現れた、管理局員は突然現れた
仮面の男に蹴られて吹き飛んだ。

「早く使え！」

「……あの男は闇の書のことを知っているみたいだけど誰なんだろう？」

まあいいや！

「（みんな！今から結界を破壊するからそれまで頑張ってね……！）」

「おう……！」

あれ？

返事がザフィーラしか無いんだけど？

まあ大丈夫だよな。

なんだってヴィータとシグナムなんだもん！

「破壊の雷……！」

巻頭に戻る。

偽善と破壊と仮面と（後書き）

作者「」ののの”後書きコーナー”ハ・・ハ”！！！！！！”

飛翔「どうした作者よ、バレンタインが近くて発狂でもしたか？」

作者「馬鹿野郎！！！！バレンタインがち、近いからって発狂するか！！」

飛翔「じゃ、貰えるの？チョコレート？」

作者「・・・・・・（。・・。）・・・・・・（ノ>。）・。」

飛翔「泣くならバレンタインは大人しく小説を書けよ？ただでさえ投稿速度が遅いんだからよ？」

作者「そうしたいのは山々なんだが・・・・・・・・・ドリームクラブやりたくて」

飛翔「帰れ”ハ・・ハ”」

作者「仕方ないじゃん！！楽しいんだから！！魅杏サイコー！！！！」

飛翔「解った解った・・・てか、疑問に思ってたんだが、”の”後書きコーナーって何だよ！？」

作者「それは俺のリア友がこの小説の名前が長いからって省略した結果だよ」

飛翔「その友達ってこの前カラオケで”最強×計画”で暴れてた奴か？」

作者「あれは良いものだった（´；；；´）」

飛翔「通りすがりの子どもに笑われたけどな」

作者「うるさいうるさい！」

飛翔「と、戯れ言は此処までにして、作者よ、皆様方にアンケートすることがあるんじゃないのか？」

作者「そうそう、”偽善の正義の味方の少年”を読んでもくれている皆様にアンケートを取りたいと思います。」

バレンタインが近いのでバレンタイン番外編として、1・2話書こうと思います。」

そこでメインヒロインを二名決めてもらおうと思います。」

飛翔「対象キャラクターはなの姉、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、アリサ、すずかの7名の仲から選んでください。」

作者「アンケートは感想の所に書いてもらえると幸いです。ついでに感想も書いてもらえると僕はダンシングします。」

飛翔「けど、良いのかよこの小説あんまり感想来ないよ？てか、この後書きすら見られてるか……」

作者「……ば、僕はアドバイス貰えば伸びる人だよ……」

「

飛翔「……不憫なやつめ」

作者「（、；、；）シクシク、泣きながらですが、今回はここら辺でお別れです。」

飛翔「誠にありがとうございます」

偽善と青と協定と（前書き）

PV11万突破!!!!!!!!!!!!!!

また、調子に乗って早く更新を試みるが、大丈夫なのだろうか？
（。。。）

まだ、前回のアンケートは続いているので答えてくれると幸いです。
お時間が有る方々は今回は後書きを見てみてください。
では、MY PACE WORLD 始まります。

偽善と青と協定と

飛翔SIDE

ゴゴゴオオオオ!!!!!!

やあ!、みんなしてこんにちは!、こんばんは!、おはようございます!!!。

主人公の飛翔です。

こんなに明るく挨拶していますが、今の状況を報告すると……

215

目の前にデカイ雷雲が有ってそこから広域殲滅魔法が放たれようとしています。

………なんで巻頭からカオスな!?

作者よ、後で覚えておけよ!!!!!!

「ええい！やってやるさ！！！！」

俺は右手に魔力をチャージしている。

そして雷雲から雷が放たれた……。てか、あれ？今、複写眼で見てみたけどアレってなの姉のスター・ライト・ブレイカーのほぼ三倍の威力あんじゃん！！！！

ゴロゴロオオオオ！！！！！！

雷撃が風を切りながらこちらに迫っていった。

俺は、能力で王の財宝ゲート・オブ・バビロンの仲に入っていた。

某青狸のフラフープ、通り抜けフープを使い結界から抜けた。丁度魔力のチャージも終わった所だ。

「じゃ、一発目行くぞ！！！！スヴィア！！」

俺は右手から砲撃魔法（笑）を放った。

一発目は見事な迄に拮抗している。だが、

「二発目！！！！ブレイク！！！！」

次は左手から砲撃魔法を繰り出した。

すると、雷は抵抗も出来ずに押し負け、ブレイクは雲を打ち抜いた。

「う、うそー！！！」

シャルが驚いている。

まったくあんな魔法は人に向けちゃいけないのに……それもこれも！！！！

「結界、お前の所為だ！！！！スライダー！！！！」

最後に足にチャージしていた魔力を全て、

結界に向けて砲撃をかました。

「『飛翔（君）のバカアアアア！！！！』」

ドゴオオオオン！！！！！！！！

「流石は青の魔法使いの技だ……管理局の結界なんか紙同然だな……」

ガシッ！！！！

「そうとは思わないか？仮面さんよ！！」

「……なぜ俺が後ろから襲うのが解った？」

仮面の男は俺を背後から蹴ろうとしていたが、俺は其方を向かずにその足を掴んでいた。

「そんなもん何となくに決まってるだろ？」

「……今回はこれで見逃してやるが、今度はそうはいかんぞ」

仮面の男は俺の手を振りほどき、転移しようとしていた。

「一つお前の主に言っておけ。」

「……なんだ」

「もしも、この一つの事件^{シナリオ}が終わったら、旨い飯と旨い酒でも飲み食いしよう」と……」

「……クツ、伝えておこう、では！」

シュン！

ふう、これじゃあ、力付くでも、ハッピーエンドにしくちゃ」

「」「飛翔（君）！！！！！！！！！！」「」「」

「……あれ？折角格好よく決められると思ったのに……」

「飛翔君……覚悟は出来てるの！」

なの姉は砲撃魔法を……」

「飛翔……反省しようか……」

フェイトはバルディッシュをハーケンフォームに・・・

「飛翔、貴様という奴は！！！！」

シグナムはレヴァンティンをシュランゲフォームにし――

「あれは遣りすぎだよなあ！！！」

ヴィータはアイゼンをラケーテンにしている。
 エア・アクシデント
 てか！？右手に不可視の事故まであるよ！！！！！！

「……ゴメン（キラッ!）」

俺は可愛く許しをこした。

「
「
「
「
いや、
無理^{なの}!!
」
」
」
」

ドゴオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

その後俺は引きずられながらハラウン家に連れていかれた。勿論その時の記憶などはないのだが、「痛かった」って事は覚えてる。

その後、ハラウン家にてリンディさんに俺の計画について話したところ、

「私はそれでも良いけど、上層部に何て言えば・・・」

リンディさんも組織に属している人間、単独の考えで物事をやっては行けない事くらい解っている。

だけど目の前に居る俺は何ていっても規格外のチートだぜ？

パサッ - - -

俺はリンディさんの前に紙の束を投げた。

「飛翔君これは・・・！！三提督のサイン！」

「いやぁこの前管理局に遊びに行ったときに三提督に挨拶代わりに計画の事を話したら”快く”了承してもらいましたよ」

勿論、却下されたら・・・これは言わないでおこう。

「飛翔君、貴方は何者なのよ？」

「俺ですか？俺はただの月に愛された騎士ですよ・・・少しばかりチートですがね」

「・・・ハア、解ったは、これからはヴォルケンリッター一行は私達と行動を共にしてもらいます」

「ハイ（おう）！！！」
「ワンッ！！」

あれ、ザフィーラが犬に為ってるなあ？

まあ、良いか・・・

END OF MY PACE WORLD . . .

偽善と青と協定と（後書き）

作者「ののの後書きコーナー!!!!!!」

飛翔「で、何を言っただよ?」

作者「いやあ、前回の後書きでアンケートやったじゃん……」

飛翔「あああれね、アレがどうしたの?……まさかっ!」

作者「そう!!そのまさかなんだよ!!!!……アンケートの返事が……無いんだよ……」

飛翔「まあ、予想はできてたけどな、けど、無かったら無かったで書くヒロインは決まってるんだろ。」

作者「(; ;) うん。一応は……決まってるけど、それはもしもだし出来れば読者のご意見が欲しいなあ……」

飛翔「けど、この小説人気無いんだよなあ」

グサツ！！！！

作者に999（笑）のダメージを与えた。

作者は力尽きた。

飛翔「・・・まあ続けよう、アンケートはバレンタインが近いので番外編として、1・2話を書きたいと思います。」

作者「皆様にはその時のヒロインを誰にするかを決めてもらおうと思います。」

飛翔「（復活はやつ！）候補は、なの姉、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、すずか、アリサ、の7名の中からお願いします。」

作者「友達からは「リンディさんイベントキボンヌ！！！」て言われたけど、さすがにリンディさんは書きづらいし・・・熟女だし・未亡人だし」

飛翔「本当にお前は趣味に五月蠅いなあ？」

作者「童顔好きで何が悪い！！！」

飛翔「解った解った、では今回もこの辺で終わらせてもらいます。」

作者「ちっ、いつか決着つけてやる。」

飛翔「ではでは、また次回!!」

偽善と修羅場と純愛と（前書き）

今回のお話はフェイトとシグナムの性格が変わっています！！

そして、皆様！

塩っぱい物をご用意下さい！

最後辺りで……行き場の無い糖分が読者の皆様に襲い掛かります。

感想、アンケートまだまだ待っています。

お時間がある方々、時間が無い方々でも、今回の後書きを見ていただけると作者はダンシングします。

では、MY PACE WORLD 始まります。

偽善と修羅場と純愛と

その後、シャルははやてに連絡を入れずかの家に居ることを確認し終わり、くつろいでいると、シグナムがある一言を言った。

この一言は今思えば地獄の始まりであった。

「ところでヴィータ、何時も持っているあのカードは何だ？」

「ああ、これ？これはなあ、来たれ！」

そっくい不可視の事故エア・アクシデントを出した。

「…………ヴィータ、そんな物持っていたか？」

「……………！！！！！！！！！！」

俺は今思った！

本能的に不味いと思った。何にだ！？解らないがヤバイ！？

このまま行くと”作者”の思うつぼだ!!

「これは飛翔からもらっただぁー!!」

「ほぉ、それにしても綺麗な絵だな・・・飛翔よ、私にも作ってくれないか？」

「い、いやぁ、作っても良いけど・・・やり方がなぁ・・・」

な、何とか逃げなくては!!!

「そうそう! 私もそう思ってたの!!! 飛翔君、私にも作ってくれないかなぁ」なの姉は短いツインテールを子犬のように振り、笑顔で迫ってきた。

「か、飛翔・・・私も欲しいかなぁ・・・」

フェイトは上目遣いでおねだりしてきた。

「ほ、本当に作ってやりたいのは山々だけど作り方がなぁ・・・」

「・・・作り方が?」

シグナムとフェイト、なの姉が一斉に聞いてきた。

「・・・・・・・・キスするんだよ」

「「「・・・・・・・・へっ!?!」」」

「だ、だからキスするんだよ!!!!」

「「「「ええええええ!!!!!!」」」」

シグナム、フェイト、なの姉、ユーノ、クロノ、アルフが叫んだ!!

「あらあら・・・・フェイトさん、大変ねえ」

リンディさんはお茶を飲みながらのほほん、としていた。

「ほおうやるね!飛翔君は、何処かのKYとは、大違いだねえ!
」

エイミィさんは、感心し、知り合いを罵倒していた。

「・・・・・・・・フツ。」

ザフィさんは、犬の姿で黙っていた。

そこまでは良いでしょう。

だが・・・・・・・・

「ヴィ、ヴィータちゃん・・・・・・・・嘘だよね？・・・・・・・・」

なの姉がハイライトが抜けている目で質問し、

「ヴィータよ、仲間として、騎士として聞く・・・・・・・・嘘だよな・・・」

シグナムがレヴァンティンを鞘から抜きかけてながら問い・・・・・・・・

・・・・・・・・

「飛翔・・・・・・・・嘘だよね？・・・・・・・・」

フェイトが半泣き＋上目遣いで俺に問い詰める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ポツ／／／／／」

ヴィータが赤面・・・・・・・・てか、頭から蒸気を出しながら無言に為って

いた。

「・・・・・・・・飛翔君・・・・・・・・O H A N A S I、いや死・合・いしょうか？」

なの姉はバリアジャケットを展開し、レイジングハートを俺に向け、

「飛翔よ・・・私はヴィータより劣っているのか！！！！」

シグナムさんは、レヴァンティンを俺の首筋に当てている。と言うかシグナムさん！！！！キャラクター壊れているから！！！！

てか、血！！！！血出てるから！！！！

「・・・・・・・・飛翔・・・・・・・・私じゃ・・・・・・・・駄目・・・・・・・・グスッ・・・・・・・・」

フェイトがガチで泣き始めた！！！！！！！！

「「飛翔（君）・・・・・・・・義娘（義妹）を泣かせたな・・・・・・・・殺すぞ・・・・・・・・」」

リンディさんとKY（笑）が殺気を浴びせている。

「テメエ！！！！フェイトを泣かせたな！！！！」

アルフが眉間にしわを寄せながら近づいてきた。

「「「「「飛翔（君）！！！！覚悟は出来てるか（の）！！！！！！！！」

俺は皆と言つ名の「ニトログリセリン」に対して俺は………

「えつと………何で？」

火を放った。

「「「「「
かかれええ！！！！！！」
」」」」」

うおおお！！！！

「いや、皆！！その関節はその方向には、曲がらないよ！！！」

ボキッ！！！！

-
-
-
-
-
-
放送事故発生
-
-
-
-

飛翔
SIDE

まったく酷い目に会った。

今の現状を話すと……皆バインドで縛り上げている。

皆と言っても俺、ヴィータ、フェイト、シャマルさん、ザフィさんの五人以外の奴等だ。

バインドで縛り上げた奴等にヴィータにキスしたのは不可抗力だとは説明した。説明した時にヴィータが残念そうな顔をしていた。

「まったく・・・俺が悪いなら謝るが流石にやり過ぎたよ・・・ほら、返事は？」

「はい」

不完全ながら皆も反省してくれたようだ。

――キユツ

俺の服の裾をフェイトが弱々しく引つ張った。

「ん、どうしたんだ？フエイト？」

フェイトは顔を赤らめ片手で口を隠していた。

「あのカードって飛翔と……キスすれば出るんだよね？」

「あ、ああそうだよ……」

や、ヤベエ!!!

フェイト可愛過ぎだろ!!!

半泣きに上目遣いは反則だ……

「じゃ、飛翔は………ヴィータの事が好きでキスしたの？」

「い、いや、ヴィータの事は好きだけどキスしたのは不可抗力だ！」

「……ヴィータ、一つ聞いていい？」

フェイトはヴィータの方を向いた。

「……な、何だよ？／＼／」

ヴィータが赤面に為りながらも返事をした。

「ヴィータは飛翔の事……好き？」

フェイトは真剣な顔でヴィータに言った。

……／＼／

やばいなあ、俺も顔が赤くなってきたな／＼

てか、そういうのは本人が居ない時に聞いてくれよ……

何だか、こそばゆいんだよ！！！

「あ、アタシは・・・・・・・・・・ああそうだよ！！！！アタシは飛翔の事好きだよ！！！！はやてと同じくらい・・・・・・・・下手したらはやてより好きだよ／＼！！！！」

・・・・・・・・・・お持ち帰りしてもいいですか？

「そう・・・・・・・・・・解った・・飛翔？」

フェイトは再び俺の方に向き、

「な、なんだよ！？／＼／」

ヤバイ、まだ顔が赤いな！けど、今の俺は何をされても驚かないぞ！！

「私、フェイト・テストロッサは・・・・・・・・」

そついうとフェイトは腕を俺の首に回して・・・・・・・・

「貴方のことを愛してます。」

チュ！！！！

優しく触れるだけのキスだった。

この瞬間契約者がまた増えた。

偽善と修羅場と純愛と（後書き）

作者「ののの後書きコーナー!!!!!!」

飛翔「////////////////」

作者「・・・チツ！リア充爆死しろ・・・そんな飛翔君にはプレゼントだよ!!!!スペシャルゲストさんだよ!!!!」

フェイト「ど、どうも////」

飛翔「フ、フェイト////」

フェイト「か、飛翔////」

作者「……………（……………）……………ねえ？話そうぜ？」

飛翔・フェイト「……………////」

作者「…………読者の皆様少しばかりお待ち下さい。」

- - - 修正中 - - -

飛翔・フェイト「すいませんでした!!!!!!」

作者「良いよ……」

飛翔「じゃ、気を取り直してアンケートの事についてだな」

フェイト「もうすぐバレンタインだね……作者さん、不憫だね？」

作者「黙れフェイト！その日は何も忘れてカラオケ行くわ!!!!!!」

飛翔「分かった分かった！では、アンケートの事だが……..
おい作者……これはなんだ？」

作者「えっ？何のことだい？」

飛翔「この”執筆中作品”の所クリックしたら……七人全員の番外編書いてあるじゃん!!!!!!」

作者「いや、この作品感想少ないでしょ？だから保険的な物で書いてやった!!^・^!!」

フェイト「わ、私と飛翔が……こ、こんな事に……」

作者「こら！ネタバレするな！……でももしかしたら全員分投稿するかもだよ？」

飛翔「まあ、それは良いとして、アンケートするぞー！」

フェイト「もう少しで女の子が男の子に思いを伝えるバレンタイン……」

飛翔「だから、この作品でもそれを記念して番外編を書こうとしています。」

作者「だから、読者の皆様にはその話のヒロインを決めてもらうと思います。」

フェイト「候補は、なのは、私、はやて、ヴィータ、シグナム、アリサ、すずかの七人の中から選んでもらいます。」

飛翔「けど、感想なんかくるのかなあ？」

作者「・・・二通は来てるよ!!!」

フェイト「けど両方とも私は書いてない・・・」

作者・飛翔「・・・(。・。)(」

フェイト「・・・でも、機嫌を取り直して・・・ではでは、さようなら!!!」

作者・飛翔「勝手に終わった!!!!」

-. -. END OF MY PACE WORLD -. -.

偽善と接吻と携帯電話と（前書き）

今回は原作のあのイベントを消化し、フラグを折ります。

まだ、アンケート、感想、募集しています。

では、M Y P A C E W O R L D 始まります。

偽善と接吻と携帯電話と

フエイトSIDE

飛翔から離れると目の前には宙に浮いているのは私が描かれているカードが浮いていた。

私はそのカードを掴み、

「……飛翔、さっきの返事だけど…」

「……あ、ああ」

軽く飛翔も驚いたのかなあ？

返事がちゃんと出来てないけどなあ〜！

「この事件が終わってからで良いから、けど………」

「……けど」

「飛翔の事を好きなのは、一生変わらないよ・・・」

「!!!!!!／／／／」

飛翔の顔が一気に赤くなっていた。

「（飛翔を弄るの楽しいかも・・・）」
と、思い私は楽しんでいたのだが、

「フェイトちゃん・・・フェイトちゃんまで飛翔君とキスしたの？」

私が楽しめたのは此処までだった。

「な、なのは！？・・・な、なんで動けるの？飛翔にバインドで縛られてたんじゃないの！？」

「高町だけじゃないぞテストロッサ？・・・」

「ヴ、ヴィータ？良いの？」

私が聞いてみる。

「あ、アタシは飛翔には皆に好かれて欲しいし・・・」

「ヴィータ少しまで！！俺に拒否権が発動しなくなっちまっじゃないか！！」

「飛翔よ、私とじゃ、キスしたくないのか？」

「うつ！」

シグナムが涙目で飛翔に迫ってくる。

飛翔SIDE

「飛翔よ、私とじゃ、キスしたくないのか？」

シグナムが涙目でこっちに迫ってくる。

くそ！なんて可愛いんだ！これがギャップ萌えと言う奴か！！！！！！

「飛翔君・・・お姉ちゃんにもキス、ちょうだい・・・」

なの姉は目を瞑りこっちに迫ってくる。

くそ！本当に退路がねえ！！

「・・・ええい！！！！ならばやってやるよ！！！！！！」

そっつい俺は二人にキスをした。

なの姉にキスをした時には舌まで入れられたけど、二人はカードを大切そうに持っていた。

外野SIDE

「飛翔、フェイトにキスしやがって・・・殺すか？」

クロノは怒り狂っていた。

「まあまあ、あんまり怒るとシスコンだと思われるよ？しかもクロノ君まだ、お兄ちゃんじゃ、無いし。」

エイミィは幼なじみに呆れて・・・

「そうよクロノ？それに良いじゃないフェイトさんの恋路が上手く行けば！」

リンディは自分の娘の恋を見守るが如く――――

「……シャルは良いのか？」

「何が？ザフィーラ？」

「お前は飛翔の所に行かなくて？」

「うゝん格好いいんだけどねゝ？あんまりタイプじゃ無いんだよね……どちらかと言うと……」

そついいシャルはユーノに抱きつき。

「この子の方が好みかなあ？」

「え、ええ！！！」

驚いているユーノ君……シャルが抱きついていてから胸が当たっている為顔が赤くなってるし………なんか前屈みだし？

この淫獣め！

そんなこんなで皆は各家に帰っていった。

次の日の放課後

「うん……」

フェイトは携帯電話のカタログと睨めっこを開催していた。

「やっぱり操作性が良いのが良いよね？」

「携帯なんてどれも同じだしデザインで選べば？」

「カメラ機能が良いほうが綺麗な写真撮れていいよ！」

「……おい、そんなに言ったらフェイトがパニくるだろが……」

「「「はい・・・」」」

そう、今俺等はフェイトの携帯電話を選んで居るのだが皆の考え方が違うから言い争っているのだが・・・

「・・・飛翔、飛翔はどういうのが良いかなあ？」

「俺は携帯電話持ってないぞ！」

「「「「・・・あ！！！！」」」」

「そういえば持ってないわねえ！」

「お姉ちゃんなのに知らなかったの！！！」

「飛翔君も買おうよ！！！」

「そうだなあ、これを気に買おうなあ！じゃ、カタログなんか見てないで店行くぞ！！！」

そっついながら俺はフェイトを連れて大型家電屋に行った。

「待ちなさいよあー！」

「「飛翔君！待ってよ！！！」」

三人も着いてきた。

家電屋にて

「一応聞くけどフェイト、ケータイでテレビは見るかい？」

「ううん。多分見ないよ。」

「けど、メール、電話、カメラの性能は良いほうが良いよね？」

「皆とメールとか、したいから性能は、良いほうがほしいな！」

「ならば・・・・・・・・これかなあ？」

俺は棚にあるケータイを一つ取る。

「これはこの会社が新しく出したモデルだし、カメラは画素数も高いし、自分が決めた人なら定数はあるけど、メール、電話が無料だから、お薦めするよ」

まさか前世と同じ会社があるなんて思わなかったなあー！！

・ しかも家電店なのにパソコンソフトの所に”初音〇ク”あるし・・・

「じゃ、それにするよ・・・」

「解った・・・俺も勧めた身だし同じの買っていくよ」

「良いなあゝフェイトは！！飛翔とお揃いか・・・」

と、へこむアリサ・・・

「私も買い換えようかな・・・」
と、機種変をしようとするすずか・・・

「やったの！！これで飛翔君に毎日メールが出来るの！！」
はしゃぐなの姉・・・てか、一つ屋根の下、同じ家に済んでるじゃん！！！！

「・・・お揃い・・・お揃い・フフ！！」

両手でさっき買って貰ったケータイを抱えてるフェイトは可愛かった・・・

偽善と砂漠と小動物と（前書き）

今回は管理局からの初ミッションです。

飛翔に同行するヒロインは誰なんでしょうね???

アンケート、感想はまだまだ募集してますので皆様、気軽にアンケートに答えてくれて構わないですし、感想を書いてくれれば私はL E V E Lがアップします。

では、M Y P A C E W O R L D 始まります。

偽善と砂漠と小動物と

あの携帯電話購入の翌日、管理局からの依頼が有った。

依頼内容は「砂漠の龍種の調整」と言う依頼だ。

つまり砂漠に居る龍種の数が多くなってきているから少し減らして来いと言う討伐クエスト。

別に頼んでいる身として文句は言えないが、その世界が「第43管理外世界」と、言うのだが管理局は”管理外”と行っているのに管理するとは……何とも言えないな……

そして初めてのミッション、そのパートナーは……………

「か、飛翔！……き、今日は良い天気だな！！！」

「そりゃそうだシグナム、なんたって砂漠だからな……逆に暑いくらいだよ」

「そ、そうだな!! はっはは!!」

そうシグナムだ。

別にシグナムだからと言って嫌な事はないのだが・・・

・・・あたふたあたふた!!!!

落ち着きが無いのだ!!

シグナム曰く「ファーストキス」だったらしく、俺と会ったんびに、青い服を着た国家組織に職務質問をされそうな位、挙動不審なのである。

「なあシグナム、最近変だけど、本当に今回のミッションやるのか？無理なら俺一人でやるけど？蒐集だけやってくれれば良いし、無理しなくても良いぞ」

「!!!!!!・・・飛翔よ・・・それは私が邪魔だといいたいのか？」

今にも泣きそうな顔で迫ってくるシグナム。

「い、いや! そんな事ないよ!! だから、泣かないでくれよ!!」

まったく、一番性格が変わったな・・・

前までは”騎士”だったのに今じゃ”恋する年頃の女の子”だもんなあゝ。

「そ、そうか・・・だが飛翔よ、大丈夫だ！！烈火の将・シグナムはやられたりはせん・・・それに・・・」

シグナムは懷から契約カードを取出し、

「これも試してみたいから、一匹だけは私だけでやらせてくれ！」

「そういえばシグナムは確認してなかったんだな？」

「私だけでは無いぞ？テストロッサと高町も「初めは飛翔（君）に見て貰うんだ！」と、言っておったしな！いやあゝ、今回のミッシヨンだってあみだくじで最終的に決まって私だったからなあ！」

「へ、へえゝ」

なんだかその場に居なくて良かったと思うよ。

「でも、そろそろポイントだからそろそろカードは発動しておいた方が良いでしょう？」

話し込んで忘れていたがさっきから歩いて数十分は経っている。

・・・えっ？飛べって？

だってシグナムが「歩いていこうではないか！」
て、子供みたいな笑顔で言ってるんだぜ？

これで断ったら俺は男じゃないよ・・・

「そうだな！！では・・・・来たれ！！！！」

カードを発動すると、カードは発光し、形を変えていく。

（シグナムだからやっぱり剣とかかなあ？意外とムチだったりして・
・・）

そして光が治まり、シグナムが手に持っていたのは・・・

「キュー！！！！」

赤毛が可愛いリスだった。

「「えええええ！！！！」」

正直俺もシグナムも驚いて大声を出してしまい

「……………!!!!!!」

龍種、前回のミニズモドキを起こしてしまった。

偽善と服と性格と（前書き）

今回はシグナムのアーティフェクトの力が分かります。

実はこのアーティフェクトには裏話が有りますがそれはあとがきで語らせてもらいます。ですので、時間がある方はあとがきを見てみてください。

後五日ですが、まだまだアンケート募集しますので皆様、お気軽に書いていつてください。

では、
M Y P A C E W O R L D 始まります。

偽善と服と性格と

ピキヤアアアアア！！！！！

「「ギヤアアア！！！」」

「キユー！！！！！！」

ミミズが吠え、男女が阿鼻叫喚し、小動物が泣き叫ぶ。
なんと言つ地獄絵図www

シグナムSIDE

起きた龍種だが、あれ位なら普通に私一人でも大丈夫そうだが、や
っぱり……

「キユ？」

手のひらの上に居るコイツを使いたい。

なんたつて飛翔がくれた力だ！

使いこなしたいのが本音である・・・だけど・・・

クシクシクシ！

手を使い必死に毛繕いなどをしている姿を見ても・・・

「（使い方がわからん！！）」

「
！」

痺れを切らせた龍種のミミズが私たちにむかって液体を吐いた。

「！？・・・クソッ！」

私たち（私と一匹）は、咄嗟に飛んで回避した。

そして液体は砂漠に生えていた木に当たり、

ジュウウウ！！！！

溶けていった。

「なっ！？」

流石に騎士甲冑があっても、あれを食らったら不味い!!

「クソッ！レヴァンティン、カートリッジロード!!」

ガシャン！

カートリッジを一発ロードし、

「飛竜・・・一閃!!!!」

シュランゲにしたレヴァンティンでミミズに攻撃したのだが・・・

ピキーン！

奴の装甲は堅いらしく弾かれてしまった。

「なっ!?!」

驕りだった・・・その時ミミズは術後硬直を狙ったのか液体を吐いてきた。

「（ま、間に合わない!!!!）」

終わった・・・そう思った瞬間・・・

「キュウウウウ!!!!!!」

肩に乗っていたリスが叫び、小さな身体全てから炎が吹いていた。

そして小さな火の玉だったリスはいつの間にか直径二メートル位の火の玉になっていた。

そして液体はその火の玉に当たったのだが、それは抵抗を見せずに全てが蒸発していった。

そして火の玉は私を包んだ。

飛翔SIDE

「！！」

あの液体はやばいよなあ、……。あ、シグナムは上に避けたな。

おお！？カートリッジをロードしたって事はやる気だな？

・・・刃通らねえ！！！！！！
ドンだけ堅いんだよ！！

しかも技後硬直を狙うなんて知能が高いなあ！

てか、助けねえとヤベエ！

「双月カートリッジロード！！」

「（Hey！ボス！アイツなら大丈夫そうだZE！）」

「どういう事だ・・・て、え？」

双月に言われシグナムの方を見るとミミズが吐いた液体は、結構デカイ火の玉が守ってくれていた。

「どういう事だ？」

「（あれは嬢ちゃんのアーティファクトだZE！！複写眼で見てもよー！！）」

「あ、ああ？」

疑問に思いながら複写眼でシグナムを見ると

シグナムも魔力で出来たものだから反応しているが、あの火の玉からも反応が有り、その”威力”、”用途”、などが解ったのだが、

「成る程！アレは当たりだな！」

火の玉がシグナムの身体を包んだのは”着替える”為だった。

そして炎の中から出てきたシグナムの姿は、髪の色がピンクから白になり騎士甲冑もピンクから混じりけ無しの紅色になった。だが・
・・

「ひ、飛翔・・・」

シグナムが何か言おうとしている。このアーティフェクトの怖い所はそんな所では無い。

「
」

痺れを切らせたミミズがシグナムに液体をまたかけた。

スッ

シグナムはそれを右手を振りかざしただけで液体を振り払った。

だが、それも違う

このアーティフェクトの怖い所は”防御力”が上がる所では無い。

「ぼ・・・僕!」

そう

「アイツ、僕が倒しちゃっても良いかな!!」

あのアーティフェクトの怖い所は”性格変換”だ。

シグナムのアーティフェクト名・悪戯好きの焰
トリック・オア・ファイアンマ

偽善と服と性格と（後書き）

作者「のののあとがきコーナー！！！」

飛翔「……やってくれたよな……シグナムのアーティフェクトアレで良かったのか？」

作者「実はあれ、当初の奴とは全然ちがうんだよ」

飛翔「……へ？じゃあ最初は何だったの？」

作者「最初は火の玉の状態で主人の周りを飛んで、敵の攻撃を打ち落として行く防御技だったんだけど……」

飛翔「だけど……」

作者「近距離戦してる奴から見れば周りを火の玉が飛んでるなんて……邪魔じゃん！！」

飛翔「だから性格変換にしたのかよ（……）」

作者「まあ、シグナムも「騎士道！」とか満腹王みたいな事いつてせこい手の一つも使えないじゃん！だから、性格を変えて戦術を増やさそうかと……」

飛翔「なるほどね……」

作者「では、裏話も終わった所で、何時ものアンケートの募集です！」

飛翔「この作品では、バレンタインが近いから番外編をやるうと思つてます。読者の皆様にはそのヒロインを決めてもらおうと思います。」

作者「まだまだ募集しますので皆様、お気軽に書いていってください」

飛翔「では、また次の話でお会いしましょう！」

偽善とボクっ娘と無邪気さと（前書き）

今回はオリジナル魔法が出ますがそこん所は、暖かい目で見てくだ
さいね！

アンケート募集してます。

では、MY PACE WORLD 始まります。

偽善とボクっ娘と無邪気さと

飛翔SIDEから言わせてもらおう。

シグナムの攻撃は凄かった・・・いろんな意味で・・・

「えい！とりゃあ！いやあ！！」

ザシュザシュ！！！

「ピキヤアアアアア！！！！！」

さつきまで通らなかった刃も基礎能力が上がっている為ダメージが与えられる。

だけど・・・やっぱり性格が変わったからなのか剣筋が前より雑になっているが、そこまで気にするレベルでは無いな・・・

「なんか、面倒くさいなあ！！！！レヴァンティン！！カートリッジロードして！！！」

「（OK）」

ガシャンガシャン！！！！

カートリッジを二発ロードした。

「飛翔見ててよ！！これが僕の新しい力だよ！！」

そう言うレヴァンティンが巨大になり（FFのバスターソード）しかも、炎を纏い、全長二十メートル位になった。

「……………！！！」

少ばかり知能があるミミズは、流石にヤバイと思ったのか逃げだそうとして後ろに駆け出したのだが……

ヒュンッ！

「逃がさないよ！！！」

剣の炎をブースト代わりにし、ミミズより先に前にいた。

「いつくよおお！！烈火……一閃！！！」

シグナムはただレヴァンティンを横風ぎに振っただけだった。

だが今のレヴァンティンは全長二十メートルもの炎を纏っている剣だ。

振っただけでも物は燃え、水は蒸発する位の熱量であった。

「……………!!!」

ミミズは剣には斬られなかった、だが炎が当たった。
それだけでミミズの身体は真つ二つに裂けて、絶命した。

「フウ、ねえねえ飛翔！ボクすごい！！ねえ？凄かった！！」

シグナムはミミズが絶命した事を確認したら、直ぐ様こっちに来て
目をキラキラしながら聞いてきた。

本当にキャラクターが崩れてるんだけどなあ……だけど可愛い
から許す！！

「ああ、凄かったなシグナム！」

ナデナデ

「んんん／＼／ボク気持ち良いよ！！」

目を瞑り、口を猫のようにし、気持ち良さそうに声を出していた。

よおし！！！！

このまんまお持ち帰る！！！！

！！！！！！！！

「」

仲間を殺され切れているミミズが15〜6匹位出てきた。

「……空気読めよ……」

俺は静かに切れていた

「飛翔！ボクがやってく」「いや、オレがやるよ」「……！」

俺は殺気を漏らしながら言った。

シグナムを怖がらせてしまったな……後で謝らないとな……

「大丈夫だよシグナム……一発で終わるよ……」

そう言えばこの前考えたオリジナル魔法でもやってみるか……！

「我、粒子を天に昇らせ輪廻を回らせる者である。」

そういうと当たり一面に有る砂漠の砂は竜巻になり、ミミズの周りを回っている。

「そして我は命ずる……裂け！デザート・カッター……！」

砂漠の竜巻はそのまんまミミズを切り裂いた。

この魔法はものを分解しその粒子で敵の周りに竜巻を作り、標的を切り裂くと言う魔法である。

ここは砂漠であるため粒子なんか腐るほどある。

つまり、ここではベストな魔法であろう。

「はあ……疲れたし、シグナム、帰ろうか？」

俺はシグナムに手を差し伸べる。

「うん！……あつ！ちょっと待って」

そついうとシグナムは目を閉じた。

そつするとシグナムの髪は元のピンクに戻り騎士甲冑も元に戻った。

「では、飛翔よ主の待っている場所に戻ろうか！」

「ああ……戻ろう」

そつ言い俺たちは地球に戻った。

ちゃんと魔力は貰いましたよ？

後日談

シグナムはあの性格の時の記憶が有るらしいが、

「飛翔に可愛がってもらえるなら・・・これでも」

正直シグナム、性格がヤバくない？

偽善と吸血鬼と襲撃と（前書き）

．．．．．すいませんでした！！！！！！！！！！

あとがきを載せ忘れたので投稿し直します。

ではアンケートの結果はあとがきで．．．．

偽善と吸血鬼と襲撃と

初ミッションより数日過ぎたある日のこと、俺は学校も終わり家に帰ろうとすると、

「ねえ飛翔君！一緒に図書館にいかない？」

すずかからのお誘いだった。

「んー、今日は別にやることはないからいいぞ？」

そついい、俺はすずかと一緒に図書館に向かった。

行くときに、アリサは悔しがっていたがなの姉は、そこまで怒らなかった。

「別に良いの・・・だって、私は皆より一步も二歩も後に居るの・・・」

別にの後からが聞こえ無かったが悪寒だけが感じられたので早々にそこから退散した。

すずかSIDE

ふふ、初めての飛翔君とのデートだ！

場所が図書館なのが少し地味だけど、飛翔君と一緒にならどこでもいいから良いの！！

そう思いつつ私と飛翔君は、肩を並べつつ図書館に向かい、現在図書館に着いた。

とつとつと――――

私は急ぎ足で目当ての本の所に向かった。

「ええーと？……ああ！あつた。」

少し探したけど、見つかり私は内心喜んだ。

「すずか……そこまで急いで、そこまで欲しかったのかその本……」

後ろから歩いて飛翔が問い掛けた。

「うん！前に探したときは貸し出し中だ、て言われちゃったから無かったんだけど昨日友達からメールで有るって貰って嬉しかったんだよー！」

私はその本を抱きながら言った。

「さすがそこまで熱愛する本って一体どんな内容だ？」

「これはね、地球のお姫様がある日月の王子様に恋をしてしまったんだけど、そのお姫様は恋ができなかったんだよ・・・」

「なんでだ？」

「それはね、そのお姫様は吸血鬼なんだよ」

「ほう？」

「けどね我慢できなくなったお姫様はその王子様に自分の秘密を明けたんだよ！」

「それで？」

「真実を話したお姫様に王子様は「君は君だろ」って言って幸せになるんだよ！」

「・・・ずか楽しそうに語ってるけど、本当に楽しみにしてたんだな」

「うん！」

そのまま私はその本を借り家に帰ろうとすると、

「家まで送るよ」

飛翔君が気を利かせて言ってくれた。

正直嬉しかったんだよ！

やっぱり私、この男の子の事を好きになって良かったな！……

よし！
決心したよ！

皆には悪いけど今日、飛翔君に告白するよ！

そう思いつつ歩いていき公園の前に差し掛かると、

「か、飛翔君！た、大切な話があるんだよ！」

「ん？どんな話だ？」

「あ、あ、あのね！わ、私は……」

「私は？」

落ち着いて落ち着いて！

深呼吸深呼吸……スーハースーハ……よし、落ち着いた。
今だったら！

「私はね！か、飛翔君の事が……！」

その続きを私はしたのだが、

「おやおや？お邪魔な所申し訳ないな……すずかお嬢様」

男性の方がいきなり会話に入ってきた。

飛翔SIDE

「私はね！か、飛翔の事が……！」

ドキッ！

全く、最近女性にドギマギし過ぎじゃないか俺よ……

けど、こんなシチュエーションじゃ期待したって良いじゃないか！
！！男の子だもん！

「おやおや？お邪魔な所申し訳ないな……すずかお嬢様」

突然三十代位のタキシードを着た男性が喋って来た。

「……どちら様ですか？」

すずかは警戒しながら男性に問い掛けた。

話の腰を折られたから怒っているのかすずかは若干睨んでいる。

「いや、なあくに私の名前は鈴村晶……………日本に居る……………」

そついうと鈴村さんは齒を出し、

「吸血鬼だよ」「!!!!!!」

マジかよ！

まじもんで吸血鬼かよ・・・型月産の吸血鬼だったら俺でも少し本気出さなくちゃ不味くないか？

てか、さっきからすずかが震えてるがどうしたんだ？

「で、その吸血鬼さんが俺等に何か用かい？」

「ええそうですね、低属な人間よ・・・正確に言いますとすずかお嬢様の方に用が有るんですけどね・・・」

「・・・なんでだ？なんですずかに用があるんだ？」

「おやおや？すずかお嬢様、この人間にはまだ喋って無いのですね・・・それは良い、教えてあげましょう。」

「!!!!!!やめて!!!!飛翔君には教えないで!!!!!!」

ダッ!!

すずかが地面を蹴って吸血鬼の方に駆け出した。

多分小学生・・・いや、人間では出せないような速度で・・・それはまるで”人外”クラスの速度だった。

「おいたはいけませんよ。すずかお嬢様！」

凄い速度で迫っていったすずかより、速い動きで吸血鬼はすずかの腕を掴んで、持ち上げた。

「やめてー!!お願い、飛翔君にだけは教えないでー!!」

「・・・なるほど、すずかお嬢様は彼に・・・これは面白い・・・人間よ!!今から私が言う事は真の事で有るぞ!ここに居る月村すずかお嬢様は・・・」

「やめてー!!!!!!!!!!」

「私と同じ吸血鬼なんだよ!!!!」

「えっ？」

すずかが吸血鬼……気が付かなかったな……

「ヒグッ……知られちゃった……飛翔に……」

すずかは目に一杯のナミダを流しながら泣いていた……

「……だったらなんであんたはすずかを……」

俺は冷めきつた声で”ソレ”に聞いた。

「教えてやろう！月村家は日本の吸血鬼の中ではトップに君臨し、上手く下剋上出来ると思ったんだがな、けど当主の月村忍には彼氏が居てな、それが強くて手が出せなかったのだが、ならば、妹の方を拉致しそれを餌に姉の方を殺し私が日本の吸血鬼のトップに君臨しようとしているのだよ」

「……そのあとすずかはどうなるんだよ……」

俺は皮膚から血が吹き出すほど手を握り締めていた。

「そうだな、実験体として使うのもよしだが、このまんま私の妃にしても良いな！」

「いやぁー！！！！！」

「……もうダメだ……ゲンカイダヨナ！！！！！」

「（双月………Set Up）」

「そしてこの計画を聞いてしまった貴様もすまないが、ころs「サシュ！！！！！！う、腕が！！！！！」

俺は”コレ”がずかを掴んでいる腕を切り落とした。
その際ずかも回収してきた。

「あ、あの、か、飛翔く「話はあとでだ、今はやる事がある」……」

黙ったずかを降ろし、俺は再び”アレ”と向き合った。

「き、キサマアア！！！！人間の分際で私の！！！！私の腕を！！！！！！」

「ギヤアギヤア五月蠅い奴だ」

コイツは灰も残らないように殺そう………あの”世界”で

偽善と吸血鬼と襲撃と（後書き）

作者「のののあとがきコーナー！！！！！」

飛翔「懺悔の言葉は有るか？」

作者「失礼しました！！！！いやあ、コレには深い理由が有りまして・・・」

飛翔「ほおう、聞かせてみる！」

作者「いや、トースターに入れてたパンが焦げそうだったから急いで投稿したら・・・忘れてた！テヘツ」

飛翔「・・・呆れて何も言えんわ・・・で、アンケートの結果は発表しないのかよ・・・」

作者「しますよ！では、アンケート結果、今回のバレンタイン番外編で載せるのは・・・」

飛翔「載せるのは？」

作者「なのは、ヴィータ、フェイトの三人です!!!!!!」

飛翔「なんだか、ありきたりじゃね？」

作者「俺的には有りだと思っけどな？」

飛翔「まあ良いや、どうせ死ぬのは俺だしな・・・」

作者「そうそう！では、今回はこちら辺でお別れです！」

飛翔「作者への非難、作品の感想、またはアドバイスなどはどんどん送ってきて下さい！」

作者「非難は要らないよ！では、また今度会いましょう!!」

偽善と結界と決心と（前書き）

すずかルートはつぎで、終了です。

番外編のために今は頑張ってます。

では、MY PACE WORLD 始まります。

偽善と結界と決心と

飛翔SIDE

俺がやる事は決まった。

とりあえず目の前の”アレ”を壊そう。そして……

「エグツ……飛翔君？」

泣きながらもびっくりしているすずかを慰めて上げよう。

「クソオオ！！！！高貴な吸血鬼が人間ごときにやられるわけが無い！貴様は何者だ！！！！」

「俺か？俺は……貴様を無くす者だよ、軟弱な吸血鬼」

俺は双月を鞘にしまった。”アレ”を使うのには要らないからな……コイツは”アレ”を使うには値しないが、コイツはすずかを傷つけた……塵も残さねえ！！

「私達吸血鬼を軟弱と言うか人間よ……良いだろう！！貴様は

実験体なんて生温いものではなくいたぶって殺してやる！！！」

そついい、吸血鬼は残ってる腕の爪を剣のように斬り掛かった。

「……残念、俺には”触れられないよ”……………発動！！固有結界！！」

その瞬間世界は夕暮れの綺麗な空から、青い満月が寂しく光る漆黒の夜になった。

「なっ！き、貴様は何をした！！」

「なあに？ただ俺は自分の世界に貴様を招いただけだぞ？」

そつ俺はただ、吸血鬼を俺の心の世界に招いた……………何故かすずかまでも着いてきているが、まあ良いだろう……………

「貴様の世界だと！？ならば貴様は世界を創造出来るのか！！」

吸血鬼が殺気を全開にだしながら俺に聞いてきた。

「まあ、そうなるけどな？だが人間、もしくは生き物は必ずしも”自分だけの世界”を持っている……………俺はそれを具現化出来るだけだよ」

俺はゆっくり吸血鬼に歩み寄り、

「さあ、月の裁判の始まりだ！・・・ただし、この裁判は死刑なんて生温いものは無いかな？」

突如表れた椅子に俺は腰掛け腕を組みながら言った。

「ふん！だからどうしたと言っただ！！ならば貴様を殺せばこの世界も消えるのだろ！！ならば話が速い！」

吸血鬼はさっきより速いスピードでこっちに飛んできて爪のブレードで斬り掛かった。

「おっと？裁判官に暴力か？これは行けないね？」

ジャリジャリッ！！！！

「な！何だこの鎖は！！！！くそつ外れねえ！！！！」

爪のブレードが俺の首に当たる瞬間、空間を突き破って現れた鎖により、吸血鬼は四肢を縛られた。

「なに、大人しく聞いてくれよ？今説明してやるよ、俺の固有結界・”月の裁判所”（メイク・ユア・スカイ）のルールを・・・」

「ルールだと・・・」

鎖が取れないと観念したのか暴れなくなった吸血鬼が聞く態勢になった。

「っと、その前にすずか！手首、見せてみる？」

「えっ？・・・う、うん・・・はい！」

すずかは手首を見せてくれた。

うわゝ、やっぱりさつき掴まれたから赤く成ってやがる・・・

俺はすずかの手首に触れた・・・それだけで手首はいつもの綺麗な肌色に戻った。

「ど、どう言っこと飛翔君！？」

すずかが驚いた表情で俺に聞いてきた。

「簡単だよ、俺はこの世界の創造主、つまりは神だ、神様が願えば傷くらいなら治るんだよ？」

そう、この”月の裁判所”内だと任意の傷は治せる。

「さあ、貴様の裁判を開始しよう・・・貴様の罪状は俺の大切な人

を侮辱した罪だ」

「はん！だから言つたろそこに要る奴は人間では無い！！立派な化け物だ！！」

「たえそうだとしてもすすかはすずかだ、貴様にはそこは変えられない・・・判決を言い渡す・・・貴様は有罪だ」

パチンツ！

俺が指を鳴らすと、大地を青く不気味に照らしていた月が徐々に落ちてくる。

「う、嘘だろ！！！助けてくれよ！！」

吸血鬼が泣きながら懇願してくるが俺は腰を抜かし歩けないずかをお姫様抱っこをし、

「大丈夫だ、あの月には痛みは無い。あるのは・・・消滅だけだぞ・・・」

扉がいきなり現われたがこれは元の世界に戻る為の扉だ。

俺がその扉を開け出ようとしたら、

「な！手を組もう吸血鬼とアンタが手を組めば、世界が手に入る！だから、助けてくれよ！！！」

「さつきも言つたる判決は有罪・・・」

俺は扉を閉めるさい残すように言った

「・・・これにて閉廷・・・」

ギヤアアアアアアアア！！！！

吸血鬼は塵も残さず消えていった。

デート編 偽善と鉄槌と遊園地と（前書き）

すいませんでした！！！！！！

バレンタインに投稿する予定が少し遅れてしまいました。

では、後の二話は後程！

では、MY PACE WORLD 始まります。

デート編 偽善と鉄槌と遊園地と

飛翔SIDE

読者の皆様、皆様は福引きをやった事が有りますか。

あれは必ず三等^くはずれしか当たらないものなのですが。

だが、しかし当たってしまったりしたらどうなるのか……それがこの物語である。

ヴィータSIDE

今日は管理局からの依頼もねえから、はやてに頼まれて八百屋に買い物に来てんだが。

「おおー！！！！ヴィータちゃんじゃないか！今日はお買い物かい！」

「ばあちゃんじゃん！そうだけど、ばあちゃんは何やってんだ？」

買い物に行く途中でいつも、ゲートボールと一緒にやるばあちゃん
とあった。

「いやあゝなに、ただぶらぶらしてただけじゃよ・・・そうだヴィ
ータちゃん、これをあげるよ」

スッ・・・そういつと婆ちゃんは紙切れを三枚くれた

「?・・・婆ちゃんこれなんだ？」

「これはのう、福引き券っていつての、三枚有ればあそこでくじが
引けるんじゃ」

婆ちゃんが指を指す方向ではテントがあつて、そこで黄色いはっぴ
を着た男の人がベルを鳴らしながら呼び込みをしていた。

「ふゝん、ありがとな婆ちゃん!!!買い物が終わったら行つてく
るよ!!!」

じゃなゝ婆ちゃん!!

と言いながら婆ちゃんと別れて、はやてに頼まれてものを買いに八
百屋に行くと、

「おっ！！嬢ちゃんお使いかい！偉いねえ、そんなお嬢ちゃんにプレゼントだよ」

そういい、八百屋のおじちゃんは一さつき婆ちゃんがくれた福引き券（？）を三枚くれた。

「ありがとなおじちゃん！」

そういい、アタシはさつき教えてもらった福引き会場に向かった。

福引き会場に到着した時には会場は空いていたのですぐにくじが引けた。

「お嬢ちゃん！券は何枚持つてる？」

「ほい、六枚有るぞ！」

「はい、じゃこれを二回回してねー」

景品は、ハズレがティッシュ、四等がシャンプー詰め合わせ、二等が伊園お茶詰め合わせ、二等が遊園地ペアチケット、一等が液晶テレビと書いてあった。

「（か、飛翔と遊園地に行ってみたいな・・・）」

そう思いアタシはくじを回した、

ガラガラガラ・・・コトン！

玉が落ちてきて、玉のいろはきいろだった。

「残念だったね、はい残念賞のティッシュだよ。」

「くそー！次は当てるかなー！！」

そう意気込みアタシはまたくじを回した。

ガラガラガラ・・・コトン！

次に落ちた玉の色は、青だった。

カランカランカラン！！

「おめでとうございます！」

「二等の遊園地ペアチケットとです！！！！」

「よっしゃああー！！！！」

早速飛翔に連絡を取ってみると、快く了解してくれた。

明日は楽しみだなー！！

そして次の日・・・

飛翔SIDE

昨日急にヴィータから連絡があつて、了承はしたが・・・

「こんなもんで良いかな？」

昼食は俺が作るようになってるので朝6時起きだった。

今しがた弁当に盛り付けが終わった所だ。

「よし、行くか。」

父さんや母さんに挨拶し、家を出た。

待ち合わせ場所に着いた。

30分前に着いてはさすがにヴィータは居ないようだ、どうしよう

？ジャンプでも読んでるか？

「・・・い！！おい！飛翔！」

遠くからヴィータが手を振りながらやってきた。

ヴィータの格好は、白いワンピースに黒い羽織物をしている。

なんだか、いつもの印象より違ったのでびっくりした。

「速かったなヴィータ？その格好、可愛いぞ？」

「／／／・・・飛翔のバカ・・・早く行くぞ！」

誉めただけなのに？

なんで、ヴィータは顔を赤くさせてるんだろう？

俺はヴィータに服の裾を引っ張られ遊園地に向かった。

「うおー！！！！これが遊園地かあ！！！」

ヴィータが遊園地に着いた瞬間テンションが上がった。

「コラコラ興奮しないの、・・・そうだな、ヴィータは何か乗りたい物は有るか？」

「うーん・・・そうだな・・・じゃあれ!!!」

初めてのヴィータには色々目移りしていたらしいが、一番始めに乗りたかったのは・・・

「ジェットコースターか・・・俺は大丈夫だけどヴィータは大丈夫か？」

「大丈夫だと思うぞ？だってアタシは魔法で飛んでるから、速いのは慣れてるからな！」

ヴィータが発育が余り進んでいない胸を張りつつ自慢気に言った。

「なら行くか！」

そのまんま俺等はジェットコースターに向かった。

身長制限が有ったが、二人の身長を魔法で少し伸ばしたから大丈夫だった。

ガタガタガタツ・・・

ただいまジェットコースターはてっぺんまで来て後少しで落下する。

「か、飛翔！な、なんだか、怖い！！」

「大丈夫か？ 今じゃ降りれないしなあ……俺の手でも握つとくか？」

「うん!!!」

ガタンッ！・・・シュウウウ！！！！-

てっぺんに着いたジェットコースターは落下した――

「結構速いな・・・俺のほうが速いかな？」

「ニャアアア!!!」

俺は冷静に分析していたら隣にいるヴィータは……猫化していた……

「ヴィータ大丈夫か？」

「だいじょ！ミヤアアア！！！！！」

可哀想だが、コレまた可愛いな・・・

「……し、死ぬかと思った……」

ジェットコースターから降りたら即、ベンチに座りヴィータを休ませる。

「ええと？大丈夫か？これ、さっき買っておいたからゆっくり飲みな。」

俺はさっき買っておいたオレンジジュースをヴィータに渡した。

「う、ごめん・・・ありがと・・・」

ゴクゴク・・・

オレンジジュースを飲んだヴィータは徐々に元気を取り戻し次の乗り物に乗った。

それは - - - - -

メリーゴーランドです・・・

ヴィータが・・・

「か、飛翔！アレ乗ろうぜ！」

ヴィータの提案では、メリーゴーランドをお姫様抱っこで乗りたいらしい・・・

正直恥ずかしかった／＼／

そして昼飯の時間には俺の弁当と一緒に食べたのだが、

「うお！！これギガうまだな！！！！」

弁当を凄い勢いで食べていつている・・・素直な気持ち嬉しいな。

自分が作った物をあんなに気持ち良く食べてもらうのは嬉しい。

その後は、色々な所に行った、お化け屋敷、コーヒークップ、バイキング等々・・・

そして最後は・・・観覧車で有る。

ヴィータが最後に乗りたいと言っていたが、やっぱり女の子はああいうのスキなのか？

けど並ぶ時、前列にはカップルしか居なかったがアレは何なんだろうか？

そして俺等は観覧車に乗りこんだ。

最初の方はヴィータが興奮して騒いでいたが、観覧車が頂上に近づいて静かになった。

「あの！飛翔に言いたいことが有るんだ！！！」

「ん？何だよ急に改まって？」

「あ、アタシは魔法で出来た身体だし、スタイルだって良くねえし、口調も粗いけど・・・」

「・・・・・・・・」

俺は黙ってヴィータの話をきいた。
なんだか、空気がそうさせた。

「だけでな・・・飛翔！アタシは飛翔の事が・・・好きだ／＼／」

ヴィータは頬を赤らめてそういった。

「俺もヴィータの事は好きだが？」

「ちげえよ！飛翔の好きは友達としてのスキだろ！！アタシの好きは・・・・・・・・その・・・」

「異性としてだろ？」

「!!!!!!・・・ああ」

「俺もヴィータを異性としてすきだが・・・他にもなの姉や、フ
イト、シグナムやら俺の周りには魅力的な女性がいるから俺は、
一番を決められないんだ・・・」

「・・・そうか・・・ありがとう飛翔」

「ごめん、優柔不断なんだよ・・・」

そして観覧車が頂上になったとき――

「じゃ飛翔・・・これだけは許してくれよな？」

「ん？」

ヴィータは俺の首に手を回し

キスをした。

それでヴィータとのデートは終わった。

おまけ

「（なのはの姐御！！フェイトの姉さんも聞いてください！！）」

「ん？どうしたの双月？」

「（この画像を御覧ください）」

「「！！！！！！飛翔（君）後でお仕置き（なの）」」

デート編 偽善と鉄槌と遊園地と（後書き）

次回はフェイト編です。

デート編 偽善と閃光と水族館と（前書き）

すいませんでした！！！！！！

ケータイがお風呂にダイブしてしまい、パソコンで打ってるので、遅れました！！！！！！

デート編 偽善と閃光と水族館と

フエイトSIDE

どうも皆さん、フエイト・テストロッサです。

皆さんには今回お母さんの有り難みが分かるお話です。

「フエイトさん、これをあげますから飛翔君とデートに行ってきたなさい！」

リンディ提督は水族館のチケットをヒラヒラさせていた。

「えっ？リンディ提督何を行っているのですか！？」

「実はねこのチケット、最初はクロノにあげようとしたんだけど、あの子「この事件が終わるまで遊べません！」って、断固断っちゃって……エイミィを誘えば、あの娘喜ぶのに……」

「あはは・・・クロノらしいなあ・・・けど貰っちゃって良いの？私、お金とか持ってないけど・・・」

私がそういつとリンディ提督は私の頭を撫でながら

「もう！子供がそんな事言わないの！子供はお外で遊んできなさい。それに、ヴィータに先越されてるんでしょ？」

「！！！！・・・うん、そうだね！ありがとうございますリンディ提督！！このチケットは大切にに使わせてもらいます！！」

タッタッタ！

私は自分の部屋に走っていき机の上にあった携帯電話を取り出し、電話帳・番号01番・高町飛翔に電話をかけた。

結果はOKだった。

「やったー／／／／／」

けど私、何着ていこう!?

髪型は?

お弁当は作るとか行ってみたけど、何を作っていけばいいの!?

あたふたあたふた!!

「フフツ、本当にフェイトさんは飛翔君の事好きなのね。」

「ノノノもう、リンディ提督!! からかわないで下さいよお!!」

「はいはい、では、ここは人生の先輩として色々教えてあげますから今日は明日に備えて寝ましようね?」

「うううゝ・・・はい。」

そのまんま私はベッドに入り寝ようとは思ったのだが、明日の事を考えると・・・寝れないよおノノノ

どういう事だ？

ヴィータと遊園地に行った次の日にフェイトから誘いが有ったぞ？

しかも次は水族館、まあ、フェイトみたいな娘に誘われるなら本望
だけどな！

そして今俺は集合場所に来ているのだが、流石に集合時間30分前、
コレほど暇とは……………

ジャンプは昨日読んでしまったし、サンデー、マガジンは発売日が
明日だからむりだし……………暇だし、害が無い魔法の練習でもす
るか！

「双月、バリアジャケットと刀は出さなくていいからセットアップ
！」

「……………」

ピカッ！

勾玉が少し光りを出したくらいだったがちやんと起動は出来ている
のだろう。

「よしじゃ、我、身体の時間に悪戯するものなり、我は我の時間を
変える……………」

ピカッ！

俺の身体が一瞬光り、その光が止んだとき、そこに居たのは……

「ふう……何とか成功かな？」

このオリジナル魔法は壊れた物の時間を戻して直したり、逆に使いはじめた物なら使い込んだように使える魔法なんだが……これを人に使おう……

「うん！やっぱりこの姿のほうがいいくるな！」

身長が前の世界、つまり高校生の時くらいになっていた。

「前の身長の時は何かと不便だったからな……よし、そろそろ解くか！」

俺は満足したので魔法を解こうとした、その時……

「ええ」と、飛翔？」

目の前にはフェイトがいた……てか、ヤバくね！？

「ふ、フェイト!？」

「その姿、どうしたの？」

フェイトは俺の姿が変わっていることに戸惑っているようだ。

「ああ？コレか、この姿はただ魔法で創りだしてるだけだよ。済まん、すぐ特から!」

俺は再び魔法を解こうとする。

「飛翔、それって私にもかけられる魔法？」

「ん？一応掛けられないことは無さそうだけど、どうしてだ？」
フェイトは頬を赤らめて、照れてるのかこういった。

「あ、あのね、今日のデート、その姿で行かない？」

「別に良いが良いのか？ただデカイだけだぞ？」

ブンブン！

「ううん、デカイだけじゃないよ！これで大人の姿でデート出来るし・・・それに飛翔、普通に格好良くなってるよ／＼」

「!!--!そ、そうか・・・ありがとう、わかった、じゃ魔法かけるな？」

「うん!!--」

飛翔は何か呟くとフェイトは光に包まれて、光が止むと・・・

「これが、未来の私？」

身長はでかくなってるし、髪も長いままだし、しかも

「（よし！胸はでかくなってる！！）」

フェイトは何故だかガッツポーズをしていた。

「な、なんか喜んでるけど、良かったな、じゃ水族館に行こうか？」

俺は手を差し出したのだが

「うん！」

フェイトは差し出した腕に抱きついた。

「／／／ちょ！フェイト・・・」

身体が成長したぶん・・・その、胸が／／／／

「うふふ！このままが良いの！」

フェイトがデレてきた。

そんな嬉しそうな顔されたら、断れないだろ！！！！

今回は徒歩で10分位のところに水族館があるから、おれらは歩いて向かっているのだが・・・

ジイイイ - - - - -

十人中十人がこちらに殺気を送り込んでくる。

正直怖い・・・

何とか殺気を送り込まれながらも水族館に着いた。

「結構混んでるなあ？フエイト、はぐれないように手、繋ぐか？」

世間は休日なのでやっぱり水族館は混んでいた。

「いやあ！腕に抱き付いてるから良い！」

そっついフェイトは力を強めて抱きついた。

「それやられると周りからの殺気がパナいんですよ!」

「飛翔は私に抱きつかれたら嫌?」

フェイトが上目遣いと涙目で見てきた。

「……うわゝ、彼氏さん、彼女の事泣かせたぜ!!」

「……女の子泣かせるとか、マシ無いわゝ」

「……けどあの彼女、泣いてる顔も可愛いぜ!!」

「……俺悪者じゃん……」

はあゝ

「わかった、腕に抱きついて良いから泣くなよ?」

「うん!……!」

さっきまで泣いていたフェイトの顔が、まるで晴れたように笑顔だった。

「飛翔見てみて！！あれがマンボウだよ？」

「そうだな、アレって一回に卵数億個産むんだよな？」

「飛翔、アレが鯨だよな？少し怖いなあ」

「まあ、敵にはあんだけど家族には結構優しいんだぞ！」

「飛翔見てみて！！！ザトウクジラが居るよ！」

「この水族館大丈夫か！？特に餌とか！！」

「ねえ、飛翔最後にイルカショー見に行かない？」

そつえばさつき看板で有ったな？

「別に良いが、アレは服やらなんやらが濡れるから薄くバリア張っておいたら？」

アレは場所であつぱ貸すところと貸さないところが有るからなあ？

外のステージに行くとちょうどイルカショーが始まっていた。

「お！ちょうどいい感じじゃん、フェイト座ろうぜ！」

「うん、……あ、あそこ空いてるよ！」

フェイトが指差す所を見ると、ベンチがまるまる一つ空いていた。

おれらはベンチに座り、イルカショーを見ていた。

そしてイルカショーが終わりに近づくと、フェイトが話し掛けてきた。

「ねえ飛翔、今日私って可愛いかな？」

「ん？……いきなりなんだ？」

「私、今日のために服を選んで、リボンを選んで、お弁当も作って・

・・・頑張ってたけど、全部飛翔の事を考えてやって・・・」

「フェイト・・・」

「私、飛翔の事が好き！だから頑張れた！飛翔はこんな娘に好かれ
たら迷惑かな？」

ザワザワ！！

フェイトが大きな声で言うから周りが気にしだした。

「迷惑どころか嬉しいよ・・・」

「じゃあ、私と付き合「それは出来ない」！！！！なんで！」

否定した事でフェイトは驚いているようだ。

「フェイトは可愛くて性格も良い娘だよ、だけど・・・俺の周りには
なの姉やヴィータ、シグナムやすずかにアリサも居る・・・煮え
切らない俺が不甲斐ない」

「なんだじゃ、私にも可能性は有るんだ・・・飛翔」

胸をなで降ろしたフェイトは俺の首に手を回し

「私待ってるから・・・」
チュ！

ウオオオオオオオ！！！！

キスした瞬間周りからの歓声がした。

これでフェイトとのデートは終了した。

偽善と真実と乱入と（前書き）

とりあえず勉強の合間に投稿します。

偽善と真実と乱入と

すずかSIDE

・・・・・・・・・・・・・・・・

正直言葉が出なかった・・・

私達姉妹を狙ってくる吸血鬼は前から何人もいた。

何時もなら屋敷まで逃げて、お姉ちゃんに頼むかお姉ちゃんの彼氏、恭也さんに任せるかのどちらか何だけど、今日は二人とも出掛けるから居ないことは解っていた。

だから吸血鬼も狙ってきたのかな？

それよりも気になる事が一つだけあるんだよ・・・・・・・・

「飛翔君・・・・飛翔君は魔法使いさん？」

飛翔SIDE

先程まで吸血鬼と遊んでいて、さっき壊し終わり固有結界から出てきたのだが……

「飛翔君……飛翔君は魔法使いさん？」

「ばれましたね！」

まあ、普通の人間が吸血鬼を殺したら疑うよな……

「まあ、その考えは外れちゃいないが名前が少し違うな……俺は騎士だ」

一応はこれで合っているはずだ。

ベルカでは強い人のことを”騎士”と言うらしいし、あながち間違っ
つて無いだろう……

「騎士さんなんだ飛翔君は……凄いなあ……」

「ええ」と、このことはみんなには内緒にしてくれると嬉しいんだ
けど……」

「皆って、アリサちゃんや、なのはちゃんとか？」

「ん……まあ、皆かなあ？」

「うん！わかったよ！」

「さすがにこんなに素直な娘で良かった！！！」

素直ッ娘バンザイ!!!

「けどね条件が有るんだよ！飛翔君・・・」

「はい！何でございましょう？すずかお嬢様」

俺は片膝を付き忠誠のポーズをしていた。

「ええ〜とね・・・ここにね・・・んってして／＼／／」

すずかは自分の唇を指差し、口を前に突き出し目を瞑るって居た。

・・・・・・What?

「あゝすずか？マジで言ってるの？」

「もう！／＼女の子に恥を欠かせないでよ飛翔君！／＼」

いやあゝ、そう言う意味ではなく俺とキスするとカードが出てくるから、すずかもこっちの世界に入り込んでうだけどなあゝ・・・

けど、防犯用に持たせておくのもてかなあ・・・

はあゝ、最近女性とキスしまくってるせいで慣れてきたな・・・

「わかったよ、目瞑ってるよ」

俺はすずかの顔に手をやり、そっと口付けをした。

「ん／＼はあ／＼／」

口付けをした瞬間すずかがいやらしい声を上げた。

全く、小学生でこんな事やってる俺等って何なの？

ピカアアア！

やっぱり、出るもんですね？

すずかの頭上にカードが現れた。

「ん／＼なにコレ？」

すずかは余韻が覚めたのか、カードに気付き、カードをつかんだ。

「そのカードは、すずかの武器だよ、もしもの時にでも使ってくれ」

「コレが武器なんだ、綺麗なカードだね。」

ピカアアア！

やっぱり、出るもんですね？

すずかの頭上にカードが現れた。

「ん／＼なにコレ？」

すずかは余韻が覚めたのか、カードに気付き、カードをつかんだ。

「そのカードは、すずかの武器だよ、もしもの時にでも使ってくれ」

「コレが武器なんだ、綺麗なカードだね。」

「あゝそのカードの事も皆には内緒で・・・」

「解ったよ！」

そのまんま、すずかを家に帰して今日が終わった。

偽善と迅竜と迅速と（前書き）

今回の北関東大震災にて、被災地のかたがたは、衣食住、ライフラインもままならないというのに投稿するのは気が引けますが、この作品をみて少しでも心の支えにしてください。

後、今回の地震にて、身内に不幸がありましたので、投稿するのが遅れました。

これからはいつも通りのペースで頑張っていきます故、どうか優しくお願いします。

では、 M y P a c e W o r l d 始まります。

偽善と迅雷と迅速と

飛翔SIDE

やあ皆!!

今回のミッションはここ、森林からお届けします!!

いやあ、テンション上がるよなあ!

男にとっては森のなかは遊園地見たいな物だからな!

ほらほら〜こんなに長い木の枝だってあるんだ「飛翔大丈夫?」

「……………ごめんなさい、ついテンションが上がって……………」
そう、今回のパートナーはフェイトだった。

前回同様にじゃんけんで決めたらしいが、そんなに俺とミッションに行くの嫌なのかな?

一応キスした仲だから好感度は有ると思ってたんだけどなあ……………

「さっきからどうしたの飛翔? 顔が表情が変わりっぱなしだけど?」

「いや、自己の評価と世間の評価が違ってから絶望してただけだよ……………」

テンションが下がりつつも俺たちは森林を進み続けた。

「所でフェイトは自分のアーティフェクト確認したか？」

「うん、皆で決めたんだけど、初めては飛翔に見せようって決めたんだ！」

それはいいんだろうか？

実際戦闘に為って、わけもわからないアーティフェクトが出て来たらどうするんだろうか？

そう思うと俺のアーティフェクトはどういうの何だろうなあ？

知りたいが・・・止めておこう・・・これ以上女性にキスしたら殺される！！！！

てか殺されるだけならいいなあ・・・屍位は残るだろうか、すずかとのキスの事はまだ言っていないから怖い・・・

「所で飛翔、今回のミッションはどういうの？」

フェイトが質問してきた。

「ええーと・・・確か、森林にて、最近木々が斬り倒れてたり、草食動物の激減、その原因を探り出す事らしいね、なんだか嫌な予

感がしてきたんだがな・・・」

「木が倒れているのはともかく動物が減ってるのはどうしてだろうね？この世界には体格が大きくても大人しくて、決して争いはしない生き物しか居ないって情報だしね・・・」

それは俺も思った。

ウサギにばかり、コアラにばかり草食で大人しい動物でも、木を噛んだりするし、草食だけどサイみたいに体格がデカイ奴が居ることから、草食動物でも木々を倒せるがさすがに仲間割れで動物は殺さないだろう。

「うーん・・・けど、さっきから見えるのは大人しそうな草食動物しか居ないんだけどな？」

「そうだね飛翔・・・あそこにいる、緑色の猫も大人しそうなのにね？」

・・・What？

緑色の猫・・・

グリーンキャット？

そ、そ、そ、そんな馬鹿な話が・・・

そう思い、目の前にある木を見てみると、30メートルくらいあるデカイ木の中腹にある太い枝に緑色の猫が居た。

「飛翔、あれって猫だよね？」

「残念ながら、フェイトよ、俺は緑色の猫を見たことが無い、しかも全長5メートル位いつてるぞ・・・それに加え、両腕になんか鎌見たい何出てきてるし、尻尾なんかウニ見たいにツンツンしてますよ・・・」

ええ、そうですナルガクルガですよ・・・しかも亜種の方ですよ・・・

「・・・け、けどほら飛翔・・・あの子物騒だけど実はいい子がm
「ギャオオオオン!!!!」・・・」

とりあえずナルガ君はキレイらしいですね・・・ほらあ、あんなに目を赤くしてらっしゃる。

そう思っているとナルガは枝からジャンプし、こっちに向かってきた。

「!!!!フェイト!!!!散開だ!!!!」

「うん！」

俺達は左右に飛んで攻撃を避けた。
ザシュ！

さっきまで俺達が居たところにナルガは腕の鎌を振りかぶり地面を
えぐっていた。

「フェイト！多分だがこいつが動物を狩ってた奴だ！どうする？」

ゲームの知識しか知らないがナルガは多分、気性が荒いから今回の
犯人だろうな……

「大丈夫、私が一人でやる……」スツ！

フェイトは懷に隠してた契約カードを掲げていた。

「シャアアアア……！」

標的をフェイトに絞ったのか、ナルガクルガはフェイトに襲い掛か
っていた。

「……来たれ……！！」
ピカアア……！！

「シャアアアア……！！」

カードの力を使ったのかフェイトに光が満ちていた。

その光がナルガの目を焼いて一時的にスタングレーネードの役割になった。

そして光が止み、フェイトの姿が見えてきた。

その姿は、今の服装に白のラインが入り、少し管理職ばくくなっている。（ST時代のBJを小さくしたような感じ）

髪の色は変わりは無いが、髪型がツインテールから、全部おろしてる、つまりストレートになってる。

そして何より変わってるのは………首だった。

いや、首についている首輪だろう。その首輪は機械じみていて（禁書の一方通行さんのチョーカーみたいなもの）スイッチが付いていた。

「行きますよ猫さん。」

そういい、フェイトは首輪のスイッチをオンにした。

その瞬間。

……ザシュ！

「シャアアアア！……！」

ナルガの尻尾が切れて、フェイトがナルガの後ろに居た。

「私の速度は・・・飛翔のおかげで一段階進化した・・・」

フェイトのアーティフェクト・雷神の躍動感
ライジング・ギア

偽善と迅竜と迅速と（後書き）

フェイトのアーティファクト・雷神の躍動感^{ライジング・ギア}

これは首に付いているチョーカーのスイッチをオンにすると、フェイトの魔力を強制変換させ、脳への電気信号の速度を早める道具。

つまり魔力が続くかぎり、反射神経、運動神経、視覚等の戦闘に使える神経が一時的に飛躍的上昇する。

偽善と電光石火と暴食（前書き）

今回の終盤辺りはノリで書いてしまいました。

では、MY PACE WORLD 始まります。

偽善と電光石火と暴食

フエイトSIDE

す、凄い！？

この首輪のスイッチを入れただけで、身体が羽根のように軽く、雷のように速くなった。

今もあの緑色の猫の周りを飛んだり跳ねたりしているが……

シュシュシュ！！！！

「シ、シャアアア！！！！」

猫の目線から完全に私の姿が無い。

そこまで早いのだろう。

そして、猫の横を通り過ぎる時に、右足前足に一閃！！！！

ザシュ！

「ギヤオオオオオン！！！！」

猫の右足前足に付いていたブレードは超高速からのバルディシュにより、折れてしまい、猫はよろめきながら悲鳴を上げていった。

「フェイト、遊ぶな・・・何か嫌な予感がする・・・」

「えっ？・・・う、うん！」

飛翔の嫌な予感が・・・多分本当にヤバいんだろうなあ・・・なら
！！

「ゴメンね・・・けど、君がいると他の子に迷惑が掛かるから・・・
ここで終わらせてもらおうよ！」

現在の猫との距離が15メートル位だったのだが・・・

シュン！

「！！！！！」

猫さんもびっくりだろう、さっきまで遠くにいた「獲物」が一瞬に
して、目の前にいるのだから、だが、私がしたのは、右足で地面を
一回蹴っただけ。

ここまで、身体能力があがっているとは、自分でも驚きである。

「ゴメンね……」

「……スパァン！」

私は猫の首を落とした。

……やっぱり動物を殺したりするのは好きじゃない……

「フエイト……大丈夫か？」

飛翔が慰めに来てくれた。

「何とか大丈夫だけど……心が折れそう……」

「俺も言えた口じゃないが、それで良いんじゃないか？動物を殺して意気揚々としてたら、そっちの方が怖いよ……それにこいつを殺したお陰でこの星の生態系を守ったんだから、それは誇っても良いんじゃないのか？」

ワシャワシャ！

「／／／・・・う、うん！」

飛翔が頭を撫でてくれた。

いきなりは卑怯だよ／／／

飛翔SIDE

「さあゝつてと、じゃあこいつ土に埋めてから帰るか？」

一応こいつも、生きるために襲ったのだから悪いわけでは無いのでちゃんと埋葬してやらんとな。

そして、ナルガが居る方向を向いてみると、死体の傍には、黒い、
巨体が居た。

「ゴオオオオアア！！！」

ヨダレを垂らしながらその巨体はナルガを凝視していた。

「お、おいおい！！！！まさかじゃねえだろうな・・・」

黒い巨体はナルガの死体を何のためらいも無く貪り着いた。

「・・・・・・・・イビルジョー・・・まあ、ナルガ倒したらテンプレか・・・」

そう、ナルガを捕食し始めたのは、イビルジョーだった。

ナルガの五倍位はあろう体格で、ナルガ食べているイビルジョーは俺たちに気付いた――

「・・・・・・・・！！！！！！」

「クッ！」

「うつ！」

威嚇の為か、奴は吠えはじめた。

くっそ！、ゲームでもそうだったがやっぱりこいつのバインドボイスはやかましいくらいデカイな！！！！

耳を塞いで固まっている俺たちにチャンスかと思ったのか、イビルジョーはこっちに走ってきた。

ドンツドンツドン！！！！

歩きたんびに地響きつて……
狙いは俺みたいだな……

「フェイト！！俺から離れとけ！！」

「けど、飛翔が！！」

「早くしろ！このままだとお前まで巻き込む！！」

「え？飛翔どんだけでかいの打つ気なの！！！！」

「良いから離れとけ！！」

「わ、わかったよ！！」

シュン……ギュウン！！

フェイト俺の隣から、300メートル位離れた。

てか、雷見たい何が飛んでったあとに轟音が鳴り響いたぞ……
フェイトもチートのナマカ入りだな……

「さて、イビルジョーよ……俺はゲームをやつてて貴様に言いた
い事が有ったんだよ……」

「ワアアアオオオオ！！！！」

イビルジョーが吠えながら突進したが、俺はそれを向かい風のように通り抜け、イビルジョーの視覚に感知されない程度^{〴〵}のスピードで円を描くように回っていた。

勿論能力使用はしていません。これくらいは日々の鍛練によるものですから！

「そう！貴様には足りないものがある・・・それは、情熱、思念、気品、優雅さ、勤勉さ、技のバリエーション、そして何より！！！！！！！！！」

俺の姿が捕らえなく、オロオロしているイビルジョーの真正面に走っていきーーーー

「速さだああああ！！！！！」

その顎をがち割った。

「ギャオオオオオン！！！！！」

イビルジョーは部位破壊されたので、痛がっていた。

「Gを出すなら覚えておけカプ○ン!!今作がゆとりだと自覚しておけ!!」

「ワアアアオオオオ!!」

イビルジョーは怒っているのか口の中にエネルギーを貯めている。
通称：暗黒ビーム（命名俺）を打ち出す気だろう・・・

「そんなんよりもな・・・」

打ち出す態勢の無防備なイビルジョーの顔面に飛び、展開した双月の柄で――――

「うちの親父の方が万倍怖いわあああ!!!!」

ドタマを殴り着けた。

グチャ！メキィ！バキィ！

多分、即死しただろう。

全く、ナルガに続いてイビルまで居るなんてどうなってるんだ？

そう思ったんだが、結局デカイ魔法使わなかったからフェイト離れた意味なくね？

まあ良いや。

こうして、俺はフェイトと合流した、その時フェイトが、

「さっきまでの飛翔・・・色んな所に喧嘩売ったよ？」

と行ってきたのだが、それはノリで言ってしまったのだから仕方が無いでしょう・・・うん！

こうして、俺たちはイビルの死体とナルガの・・・遺骨を土に埋めて家に帰宅していった。

偽善と双子と硫酸と（前書き）

今回は新キャラが名前だけ出てきます。

このパートは三話位やろうと思いますのでよろしくお願いします。

では、 M Y P A C E W O R L D 始まります。

偽善と双子と硫酸と

飛翔SIDE

あの任務の翌日、朝の鍛練が終了し、なの姉と学校に向っている最中、なの姉がポツリと呟いた。

「飛翔くん、最近海鳴市で流行ってる、硫酸男^どって知ってる？」

「な、なんだそりゃ？あれか、テケテケとか、口裂け女とかと同じ部類の奴か？」

「いやあ、あれは実証が無いけどこの硫酸男^どは実証があるからね？」

「ふん、てか、硫酸男って何やるんだ？」

そんな猟奇的殺人犯が昔居たような……

「あのね、硫酸男ってのは、仲がよさそうな二人組が居るとその二人を夜な夜な攫って町の端にある工場に連れて行ってその二人をドラム缶の中に入れてその中に硫酸を入れて溶かしていくんだって？」

「……そんなやつ居たな、確か名前は、ジョン・ヘグだったっけ？」

「……ん？それにしちやなの姉、やけに詳しくないか？」

俺が質問をするとなの姉は渋い顔をしながら言った。

「それが、飛翔くん、ここ三日間位いなかったでしょう？」

ああ、確かにフェイトと一緒に任務行ってたからなあ？

「その三日間の間の二日目、つまり一昨日………本当に有ったんだよ、しかもうちのクラスの娘の両親だったんだ………」

「………はあ？マジかよ………それって………」

「ほら、いつも一緒にいる、双子のモノクロ姉妹って言えば、分かるかな？」

「ああ、あの娘たちか？」

あいつらは何かと有名だからな？

「確か、親が資本家で有名で、お姉ちゃんの方が全国模試でいつも二桁台で、妹の方が短距離走で全国大会で五位だったりうちの学

校でも有名だもんね！」

しかも、容姿が姉の髪の毛が白くて、妹の髪の毛が黒、それに名前が、姉が星雲 白、妹が星雲 黒 名前までも白黒、容姿も白黒、だから、モノクロ姉妹、って呼ばれてるもんなあ？

「そうか……あいつら俺が居ない間に……」

「（多分、飛翔くん、星雲さん達に、何か言うんだろうな……
そして、フラグ立てていくんだろぅなあ……）」

そう思いつつ俺たちは、学校に向かった。

そして、学校に着いた俺がまず目に付いたのが何時もと雰囲気が違う姉妹だった。

いつもの星雲 白の方は妹と一緒に女子達と話しているのだが、今は目からハイライトが消えていて、何もやる気が無いようだ。

そして、星雲 黒の方は白とは逆にみんなと話しては居るが何だか無理してるみたいだし、話してる奴らも気を使ってる感じだった。

「（やっぱり、こんな雰囲気だったか・・・まあ、親が硫酸で溶かされて正気の子なんか居ないよな・・・）」

はて、どうしてもんか・・・どうにかしてあいつらの貯めてるもんを吐き出させて少しは楽になってほしいもんだがな・・・そうだ！

俺はアリサの所に行き――

「おい、アリサ、あの二人の事なんだけど・・・」

「あ、飛翔！ひさしぶりじゃない、二人って星雲達のこと？」

「そうなんだけど、何とかしてあの二人を昼休み、弁当に誘えないか？」

「ちょっと！どうするつもりよ？こついう時はそつとしく物でしようー!？」

俺たちは小さな声で囁きながら喋っているため、クラスの奴らには聞こえていない。

「そうなんだが・・・なんだか、助けてやりたいんだ・・・俺も両親を事故とはいえ無くしたしな・・・だから例え偽善者と言われてようと俺は、あいつらを助けたいんだ・・・」

「あ・・・その・・・ごめん」

「大丈夫、今は気にしてないから・・・こうやって彼女達にも笑って貰いたいからね？」

「むう？・・・飛翔、やんだか、あの二人の事気になるの？・・・」

「いや、ただのお節介だよ・・・」

「ふ〜ん、なら良いんだけど・・・じゃあ二人には昼休み誘っておくから」

「すまん、こんな嫌な役やらせちまって・・・」

「・・・なら、頭撫でなさいよ・・・」

アリサは顔を赤らめながら言った。

「そんな事で良いのなら・・・」

ワシャワシャーーー

「うゝん／＼・・・」

・・・ギロリッ!!

ビクッ!!!

「（な、何だか殺気混じりの視線が感じられるんだが・・・）」

そうなりつつ俺はアリサを撫でていた・・・

偽善と双子と硫酸と（後書き）

作者「久しぶりにあとがきコーナーだよー！！！！」

飛翔「今回出てきた硫酸男にはモデルが入るんだろ？」

作者「その通り、彼の名前はジョン・ヘイグ、人を殺しても証拠が無ければ大丈夫だろう？と勘違いし、殺した死体をドラム缶に入れて硫酸風呂で溶かしたとされる・・・詳しく知りたい人はググって下さい！！！」

飛翔「そして何だか新キャラが名前だけ出てきてるが・・・」

作者「いやゝそろそろ新キャラ出そうかなゝとおもいつつ、ニコ動でブラック ラグーンのMAD見てたら、双子が出てきたじゃん。それ見て双子にしよう！と思ったんだ」

飛翔「へえゝ、イメージはどうするの？」

作者「イメージはネギ魔の風見姉妹の髪の毛と身長をいじくったらこうなるね？」

飛翔「何だか、ただじゃ終わらなそうだな？」

作者「ただで終わらす気無いしな！！！」

飛翔「ううゝ……」

作者「それと、お知らせがあります、前回のデート編で出せなかったヒロイン達を数人、GW中に出そうと思います」

飛翔「ですので、希望がありましたらどんどん言ってきてください！！！！」

作者「普通に感想も待ってますので」

飛翔・作者「」ではでは、また次回に会いましょう！！！！」

偽善と屋上とモノクロ姉妹と（前書き）

更新遅れてすみませんでした。

リアルで色々あったので最近ケータイや、パソコン等に触ってなかったので遅れてすみません。

こんな更新遅れて、駄文でもよろしければ、読んでください。

では、
M Y P A C E W O R L D 始まります。

偽善と屋上とモノクロ姉妹と

飛翔SIDE

やあ、こんにちは！！！！

今現在午前の授業が終了し、俺となの姉、フェイトはいつも通り屋上に着ていた。

すずかとアリサには、星雲姉妹を昼飯を誘わせている。

一応あの二人はクラスには顔が利くらしいからなあ。

「・・・ねえ？飛翔君・・・こういつちゃんただけど、やっぱり止めたほうが良いんじゃない？」

「どうしてなの姉？」

「どうしてって、やっぱり不謹慎だよ。星雲ちゃんたちは、お父さんお母さんを亡くしちゃったんだから、こういう時にはそっとして

おいた方が良いと思うよ?」

なの姉がいつもの陽気な顔では無く、少しだけ真面目な顔だった。

「だけど、ほっとけ無いんだよ・・・俺にもそういう事有ったからな・・・」

そういとなの姉は、俺の境遇を知っているので下を向いて黙ってしまった。

そうしたら、次にフェイトがこういった。

「飛翔が言いたいことは、わかったよ・・・私もなのはに助けられたからわかる・・・絶対星雲達を助けてあげてね・・・」

「ああ、解ってるよ・・・絶対にだ・・・」

フェイトとの話が終わって直ぐに屋上の扉が開き、すずかとアリサ、そして白と黒の対称的な格好容姿をしている女の子達、星雲姉妹がこっちに向かってきた。

「あーアリサちゃんにすずかちゃん、星雲ちゃん達だあ!!!!こっちこっち!!!!」

なの姉は二人の事を知っているから、挨拶をしていた。

「居た居た！……ほら、星雲達も来なさいよ！」

「ほら、早く早く！！」

「や、やつぱり、私は良いよ……なのはちゃんとかは知ってるけど、弟さんとか、テストロッサさんとかとは、会ったばかりだし、そんな仲良くない私とお弁当食べても楽しくないだろうし」

「べ、別に僕はあんまりそういうの気にしないから良いけど、姉さんが嫌がるならやめといった方が良いんじゃないのかなあ？」

アリサの方は、髪の毛が白い方つまり、星雲 白の手を引っ張り

すずかの方は、髪の毛が黒い方つまり、星雲 黒の手を引っ張りこ
うちに引っ張ってきた。

「おい、アリサよ、まさか了承もせずに連れてきたのか……」

「そんなわけ無いじゃない！！ちゃんと了承得たわよ！！……
ただ、あんた達の名前出した時に逃げようとしたから少し強引に連れてきたのよ！！！！」

「それが駄目なんだよ！！それをふまえて了承してからにしろよ！！」

「まあまあ、二人ともそんなに怒らないでよお」

俺とアリサがあーだ、こーだ 言い合っていると、さすがが止めに入ったりして色々とかオスである。

「・・・くすっ・・・」

「・・・ははっ・・・」

アリサと言い合ってる姿を見て、星雲姉妹がこちらを見ながら笑っていた。

「・・・・・・ははっ！」

俺とアリサもそれを見て、目を合わせ、二人を笑わせた事に笑っていた。

「あ、そうだ、二人にはまだ自己紹介してなかったな、同じクラスの高町飛翔だ、名前の通り、なの姉の弟だ。」

「フェイト・テストロッサです、よろしく」

「わ、私は星雲白と申します・・・よろしく願いします!-!」

「僕の名前は星雲黒です!-!よろしく!-!」

「なんだよ、星雲達も話そうと思えば話せるじゃん」

「あはは、僕は難なく話せるんだけど、姉さんが人見知りが激しくてあんまり他人と話せないんだよ。」

「!-!-!/-/く、黒ちゃん!-!-!そ、そういう事、い、言わない
でよお!-!-!」

黒がニッシシと笑いながら言うと、白は半泣きになりながら黒の胸をぽかぽかと擬音が聞こえるようなパンチをかましている。

「けど、良かったよ、姉さんが久しぶりにこんなに楽しそうにして
るの見られて・・・」

「も、もう……話をそらさないでよ……！」

「……あっはっは……！」

皆が皆、そんな二人のやりとりを見て周りを気にせず俺たちは笑い
やっていた。

偽善と屋上とモノクロ姉妹と（後書き）

取り敢えず、星雲白はボクッ娘にしました。

何故かと言うと、リリカルなのはには、姐御キャラは腐る程居るのに、ボクッ娘が居ないからです！！！！

偽善と性癖と義兄妹と（前書き）

スイヘーリーバー僕の船？

またやってしまった・・・

ここまで開いてしまうのはもう恒例かね・・・

まあ、期間中は色々とありましたよ、人間は車に全速力でぶつかっても、当たりどころ次第でどうにか成ったりするもんですね・・・

あとは、引越しが有ったりで・・・

では、MY PACE WORLD 始まります。

偽善と性癖と義兄妹と

前回のあらすじ

初めて喋った双子の姉妹の百合のような痴話喧嘩が見えた。

あのと、俺たちは、落ち着いた星雲姉妹と一緒に弁当を食べていた。

自分も義理だけとお姉ちゃん、て事でなの姉と白は意気投合していた。

黒の方は、誰とでも打ち解けられる性格なのか、フエイトと意気投合していた。

ちなみに俺が二人を呼ぶときに、「星雲さん」と呼ぶと二人ともこっちを向いてしまうから、二人の事は名前で「白」と「黒」と呼ぶ事にした。

黒の方はその性格からか、同姓、異性共に友達が居るため下の名前

で呼ばれ慣れているのか、最初に名前で呼んだときに声高らかに、
「は〜い!!!」と叫んだ。

あの時周りからの視線が痛かったのだが、アリサに「こういう性格だから・・・仕方ないのよ・・・」と、言われたが、なんだろうね・・・納得できた自分がなんだか嫌になってきた・・・

クラスに一人は居るキャラクターだもんな・・・

弁当が食い終わり、昼休みもまだ少し位あるくらいに、俺は二人にあるものをあげた。

「二人には、友達になれた記念にこれあげるよ」
俺はミサंगाのような物をあげた。

「にゃあ〜!!!良いな良いな!!!!星雲ちゃんだけズルいよ飛翔君
!!!!!!」

「そ、そうよ!!!!私たちなんか何か貰った記憶無いんだけど!」

そう抗議するなの姉とアリサ、すずかはと言うと――

「え？私は持つてるけど？」

と自分の手首に着いているミサंगाをなの姉とすずかに見せた。

ちなみに色は藍色である。

二人に渡したミサंगाの色は白と黒である。

「うわぁ、これだけ貰っちゃっていいの？」

「はわわ！！いい、良いんですか！？こんな物を頂いちゃって！

」！

「ああ、二つ共に俺の自作だからあんまり高級感がなくてお嬢さん方には、貧相に見えるかもだが、作り方はちゃんとしてるから大丈夫だ・・・それとなの姉と、アリサ、それにフェイトもさつきから背中をぽかぽかと叩くのは止めてくれ。三人にもちゃんとあるから

」

そう言い、なの姉にはピンク色のミサंगा、フェイトには金色のミサंगा、アリサにはオレンジ色のミサंगाを渡した。

「『エへ・・・／／／』」

三人とも笑顔で顔を染めていた。

なんとも良い光景だ。前の世界では絶対に拝めないような光景だ。

「それとそれにはあるおまじないを掛けてあるんだよ？」

「「おまじない？」」

白と黒がおまじないに反応した。

なの姉達はまだ、現実世界からトリップしているため、反応しなかった。

あ、勿論すずかには言って有るから大丈夫である。

「それには、悪魔避けのおまじないが入ってるんだ、何か有ったとき、そのミサングを握りしめながら、祈ると問題を解決してくれるんだよ。」

「はは、なんだかうそっぽいけど、ひい兄が言うんだから本当なのかな？」

「はうつ！？そんな事までしていただいちゃって、も、申し訳ありません、ひい君／＼／」

因みに俺の呼ばれ方は、黒が俺の事を「ひい兄」と、読んで、白もそれにもじって「ひい君」と呼んでるらしい。

「ひい兄」「ひい君」は、俺の名前の飛翔の飛から取ったらしい。

「構うもんか、友達に贈り物をするんだからこれくらいはさせてくれ。」

俺は笑顔に成りながらそういった。

「むうゝ、まあひい兄がそういうんだったら良いけど・・・その笑顔は卑怯だよ・・・」

「／／／あ、あうゝ、ず、ずるいですうゝ」

そつ、顔を赤らめながら姉妹は呟いた。

何故顔が赤いんだろ？そんなにミサंगाが良かったかなあ？

「『『『飛翔お（君）！！！！！！』』』」

隣を見ると、般若やら、阿修羅やら、魔王やら、水樹 々やらが居た。

俺が何したっちゅうねん・・・

そんな笑いあり流血ありな昼休みをみんなで笑いながら過ごしていた。

昼休み、放課後になり、白と黒とみんなで帰ろうといったのだが、白と黒は用事があるようで先に帰ってしまっていた。

その夜起こる、正史には無い、もう一つの事件が――――

偽善と理由と義兄妹と（前書き）

・・・申し訳ないです（、；；、）

更新がめさんこ開いてしまった上に短く仕上がりました。

それでも良かったら見ていってください。

では、M Y P A C E W O R L D 始まります。

偽善と理由と義兄妹と

白SIDE

「……………うつ……………」

私が目を覚ましたら、さっきまでと違うところにいた。

確か今日は、放課後に黒と一緒に図書館に行く予定でひー君の誘い断って、図書館に言ってる最中に……………そ、そうだ！後ろから声を掛けられて振り向いたらハンカチみたいな物で口を塞がれて……………駄目だ、そこから思い出せない……………

白が目を覚ました所は、とある所にある、廃工場で天窓から月の光がさしている所を見ると放課後から少したっているらしい。

（それより、黒は……………）

周りを見てみると隣には黒が縄で手足を縛られている以外変化が無い妹がいた。

「よ、良かった・・・あ、私にも縄が巻いてある」
今気が付いた私です。

「あああ、気が付いちゃいましたか・・・残念ですねー！」

カツカツと工場の奥の方から足音が聞こえてきた。

「だ、誰ですか！」

「おやおや？この状況、この展開で分かりませんか？いやいや、確か『星雲白』は頭が良いって聞いたんだけどなあ」

「！！！！な、なんで私の名前を知ってるんですか！？」

「・・・う、ね、姉さん大きな声出してどうしたの？」

私達のやりとりで目を覚ましたのか、黒が目を覚ました。

「おやおや？妹さんまで起きちゃいましたか・・・いやはや、本番
って言うのはイレギュラーが起こって困りますね？」

声の主はやつと姿を現した。

姿は黒いガスマスクが顔を覆っており確認は出来なかったが、格好は普通にサラリーマンのようなスーツを着ていて、背中には大きなタンクを背負っていた。

「・・・・・・・・本番って、どういうことですか？」

「読んで字のごとくですよ？ 僕はある実験をしててですね？・・・・
・人は死んだらどうなるのかなあ？ って・・・・」

「「！！！！！」」

黒も私と同じ気持ちのようだ。

「だけど、殺したとしても死体の後始末って大変そうじゃん？ だからさ、塩酸で死体も溶かせば、実験も出来るし、死体の片付けも出来て一石二鳥じゃん」

「そ、そんな理由で私達のお父さんやお母さんを・・・・」

「あんた、どうにか為ってるんじゃないの！？ なんで私達のお母さんやお父さんを・・・・殺したのよ！」

黒が私の言いたいことを代弁したようにマスクの人に聞いた。

「理由？んゝ、そうだなあ？・・・仲が良さそうだったからかな？」

「・・・え？」

マスクの男が言った言葉は、仲が良さそうだったから殺す。

頭が本当におわっている。

「だってさあゝ、見てていらつくじゃん？だったら僕の実験材料に為ったほうがいらつくが治まるかなあ？って思ってたね？」

「・・・あんた本当に最低よ！！」

黒が泣きながらマスクの男に訴えている。

「まあ実験もまだ途中だからさ、こうやって君たち見たいな材料集めなんかしてるんだけどね・・・」

そっぴいながらマスクの男は私達に近づいてきて脇に抱えるように抱えあげた。

「！……！や、やめてください……！」

「は、離せよ変態野郎！」

殴ったり蹴ったりと足掻いてみたものの、マスクの男はびくともせず歩いていき、そこにあったのは

「痛いから殴らないでくれないかなあ？ただ実験をやるだけなんだよ！」

ドラム缶があった。

ドコン！

私と黒はドラム缶の中に入れられて、男は背中にあつたタンクを取った。

「では、実験開始するね！大丈夫だと思うよ？痛いし死ぬけどね……」

男はタンクの蓋を開けて中に入っている塩酸を傾けた。

「（・・・助けてよ！！ひー君！！）」

私は手首に付いているミサンガを握り締めながら願った。

そしてタンクに入っていた塩酸は私と黒に

「おいおい？どうしてくれちゃってるんだよ？肌が荒れちゃったじやねえか？」

侍さんみたいな格好をして刀を二本持っているひー君のおかげで掛からなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7089m/>

魔法少女リリカルなのは--偽善の正義の味方の少年

2011年8月20日13時05分発行